

角答雜書卷之壹

內村鑑三述

基督教問答

東京 聖書研究社

内村宜之君の七十四歳の  
誕辰を祝し、謹んで此著を  
獻す  
明治三十八年  
一月二十三日  
長男 内村 鑑三

明治  
38 2 20  
内交

序 言

問、基督教を研究するの必要は何處どこにあります乎。

答、何處どこにもあります、先づ第一に、人は若しパンのみを以て生きる者でありませんならば、彼は亦靈の糧かたなる神の道みちを學ぶの必要があります、基督教は人類に供せられし天よりのマナ(神饌)であります、此マナを食はずして人に靈的生命なるものはありません。

基督教は亦世界の最大宗教であります、故に斯教を知らずして世界の事は判明わかりません、ラファエルの繪畫も、アンゼロの彫刻も、ダンテの詩集も、コロムウエルの政治も、斯教を知らずしては判明わかりません、今の世に在て基督教を知らないことは大なる

おきりなほ  
いのちをいかに  
まもる  
糧あると  
ゆえにあり  
と

無學であります。吾人の智識増大のためにも基督教の研究は非常に必要であります。

私は勿論、斯大宗教の極く微少を知る者であります。然しながら此微少を貴下にお話し申して、貴下を真理の大光に導くことが出来ます。私は貴下が私の愚を利用せられて救ひを得んため、の智慧に達せられんことを望みます。サヨナラ。

明治三十八年二月四日

東京市外角筈村に於て

内 村 鑑 三

## 目次並に梗概

### 來世は有耶無耶

- 其一、基督信徒の來世觀
- 其二、來世存在に關する聖書の示顯
- 其三、人類の本能に顯はれたる未來觀念
- 其四、來世存在に關する偉人の證言
- 其五、生涯の實驗より生ずる來世の希望

### キリストの神性

- 其一、問題の性質
- 其二、聖書の證明
- 其三、世界の輿論
- 其四、心靈の實驗
- 其五、推理の無効

## 第一席

## 第二席

### 第三席

聖書は果して神の言なる乎

- 其一、聖書の真價
- 其二、聖書と科學
- 其三、聖書と歴史
- 其四、聖書と道徳
- 其五、砂礫の福音
- 其六、インスピレーション

### 三位一體の教義

- 其一、余は斷じてユニテリアンに非ず
- 其二、聖書に顯はれたる三位一體
- 其三、三位一體の哲理的説明
- 其四、實際的信仰としての三位一體

### 第四席

### 教會問題

無教會信者の辯護なり、聖書に頼り、論理に訴へ、實際に照らして基督の教會の何なる乎を論じ、終に我國に於て將來起るべき教會の性質に論究す、問ふ者は教會信者の一人なりと假定す、

### 第五席

### 豫定の教義

- 其一、豫定の信仰
- 其二、聖書と豫定
- 其三、豫定の事實
- 其四、豫定の論理
- 其五、豫定と傳道

### 第六席

## 人類の墮落

宗教並に哲學上の大問題なり、而かも聖書は大膽に直白に此問題に斷案を下す、人類の墮落は其不完全にあらず、亦靈の理想に映する肉の粗雜に非ず、亦進化の途にある道德の程度に非ず、人情の存するあればとて人は罪人たるを失はず、嬰兒亦罪なき者にあらず、然らば人類は如何にして墮落せし乎、其墮落の原因如何、之を論理的に説明するは難し、然れども基督教は其實際的解釋を供す。

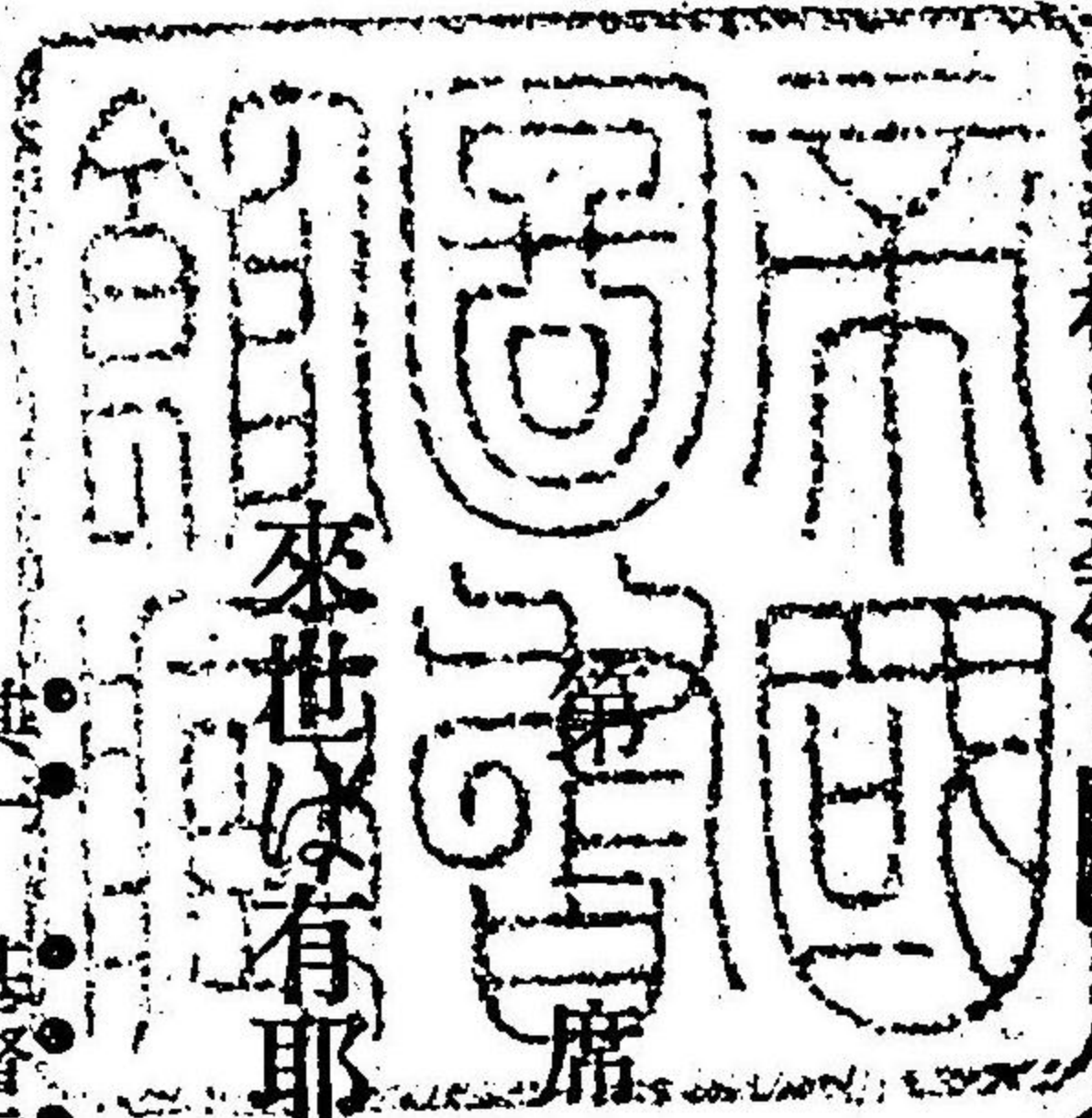
## 第七席

## 奇跡の信仰

奇跡なくして宗教あるなし、奇跡の否定は宗教の否定に終る、然らば何をか奇跡と云ふ、其外形に於ては「奇しきなる事」なり、然れども其内容は靈の活動なり、靈其物が奇跡の最も大なるものなり、故に奇跡は無私の人のみ能く之を行ふを得べし、基督の奇跡は總て愛の發顯なりし、神を信じて天然は總て奇跡的に解釋せらるゝに至る、而かも科學は是れが爲めに其研究の精神を失はず、否な、天然を奇跡的に解釋してのみ科學に眞正の興味生ず、奇跡の信仰は無益の信仰に非ず、此信仰ありて世に懼るべきもの全く無きに至る。

## 第八席

基督教問答



來世は有耶無耶

其一 基督教者の來世觀

問、貴下は來世の在ることをお信じになりますか。

答、勿論信じます。

問、何う云ふ意味に於て之をお信じになるのですか、或る意味に於ては私も之を信じて疑ひません。

答、私が基督教者として信ずる來世は或る特別の意味に於ての來世であり、即ち聖書

内村鑑三述

が明白に示して居る意味に於ての來世であります。

問、それは何う云ふ來世であります乎。

答、それは勿論たゞの未來の意味に於ての來世ではありません、斯世に未來のあるのは之に過去があつたと同じやうに何にも別に考究する必要のないことであります。

問、然らば貴下の信ぜらるゝ來世は今世とは何の關係もないものであります乎。

答、左様、關係がないとは云はれません、然しながら或る特別の危機を経過せずしては來るべきものではありません、私の言ふ來世は斯世が此處にして漸々と進化して終に來るものではありません、是れば斯世以外より來る勢力に依りて建設せらるゝ世であります。

問、それは私の考へて居る來世とは大分違つて居ります、それならば貴下の子孫ではなくして貴下御自身が直に之と關係を有たるゝやうな來世を御信じになるのでありますか。

答、仰せの通りであります、私の信ずる來世は單に「後世」との絆ではありません、私は勿論後世のあることを信じます、亦それと同時に來世のあることをも信じます。

問、然らば何に依て貴下は爾う云ふ來世を御信じになります乎、失禮ながら貴下の御信仰は少しく善男善女のそれに似て迷信のやうに思はれます、甚だ失禮なる申分ではあります。

答、爾う仰せらるゝのも御尤であります、然しながら私は私の頼る聖書の訓示と、私の短いながら今日までの生涯の實驗と、亦私の常に尊敬して歎まざる世界の偉人の證言とに由て來世の存在を信じて疑はないのであります。

問、是れは近頃珍しい御信仰であります、往昔は斯様な信仰を有つた者の在りましたことを聞きましたが、學術日進の今日斯かる來世の信仰を懐かるゝ方に私は今日まで未だ會つて一回も會つたことはありません、甚だ御迷惑ではありませうが、少々貴下の來世に係はる信仰の理由を聞かして下さい。

答、御質問は御尤であります、聖書にも「爾曹の裏にある望の緣由を問ふ人には柔和と畏懼を以て答をなさんことを常に備へよ」と書いてありますから（彼得前書三の十五）、私も此御質問に對しては出來得る丈け明白に御答へ申す義務を有つて居ります。



其二 來世存在に關する聖書の示顯

問、それは眞まことに有難ありがたういふます、然れば伺ひますが、聖書は果して貴下の申さるゝやうな來世の在ることを示して居ります乎。

答、私は居りますと思ひます、舊約聖書は先づ措いて新約聖書の此事に關する示顯しきんは明晰めいしであります、約翰傳の十八章卅六節にイエスは我國はこの世の國に非ずと曰はれたと書いてあります、或人はイエスが茲にこの世と曰はれたのはこの時代との意であつて、この世の國に非ずと云はれたのは後世を指して曰はれたのであると申しますが、然しそれは甚だ無理な註解であると思ひます、原語の kosmos の普通の意味は世界又は現世であります、この世の國に非ずとは現世とは全く其性質を異にしたるものとの意であると思ひます。

問、其他に來世の存在を證明する聖書の語辭ことばを示して下さい。

答、それは聖書到る所にあります、人々の多く注意しないこととありますが、有名なるキリストの山上の垂訓は來世の存在を事實として説かれたものであると思ひます、「天國

答 問 教 督 基

は即ち其人の有なれば也」と曰はれ、「地を嗣ついでぐことを得べければ也」と曰はれ、「天に於て爾曹の報賞多ければ也」と曰はれたのは現世以外、別に神の聖國みくにのあるありて、其處に義者仁人は適當の報賞に與からんとの意味を以て此語を發せられたのであると思ひます、來世の報賞を説いて善行を勸むるのは善行其物に重きを置かない所置しよちであつて、聖人の所置とは曰はれないと云ふ人もありませうが、然しそれは爾うとして、イエスが茲に天の報賞を以て人に善行を勧められた事は掩おほふべからざる事實であります。

問、尙ほ聖書の證明を續けて下さい。

答、馬可傳十章三十節に有るイエスが其弟子輩たちに迫害と共に報賞を約束された語辭ことばの中に又後世には窮あきらなき生を受けんと曰はれたと書いてあります、茲に書いてある「後の世」は今日世に謂ふ所の「後世」でないことは其處に「窮なき生を受けん」と書いてあるの分ります、イエスは其弟子輩が現世の後に窮なき生命を受くる所の世のあることを茲に明白に證言されたのであります。

其他來世の存在に關する聖書の證言は數限かぎりありません、約翰傳十四章以下にあります

る有名なるイエスの訣別の辭の如き、來世の存在を否定しては到底解かる者ではありま  
せん、又哥林多前書十五章の復活に關する保羅の大議論の如きも、來世を無いものと認め  
ては痴人の夢とほか解することは出来ません、又有名なる希伯來書第十一章の信仰稱讚  
の辭の如き、若し來世の希望を有たない者が書いたとすれば何の意味も無いものである  
と見えます。

彼等は皆信仰に由りて美名を得たれども約束の所を得ざりき、そは彼等も我儕と偕な  
らざれば成全すること能はざる爲めに更に愈れる者(所)を神、豫め我儕に備へ給へり

(卅九、四十節)

それ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とするもの也(全第一節)、基督信者の  
希望とは他のものではありません、それはキリストが全權を握り給ひて罪惡が其根を絶  
つに至る未來の神の王國であります、爾うして是はキリストの再來を待つてのみ建設せ  
らるゝ王國であります、使徒パウロ自身も熱心に來世を望み、之に入るの特權を望ん  
で、それがために彼の全生涯を傳道のために捧げたのであります、兎にも角にも死たる

者の甦へることを得んがためなりとは彼の終生の祈願でありました(腓立比書三章十一  
節)、それ故に彼は死に臨んで此希望に達するを得たりと信じましたから彼の有名なる凱  
旋の聲を揚げたのであります、

我れ既に善き戰をたゝかひ、既に馳るべき途程を盡くし、既に信仰の道を守れり、今  
より後、義の冕、我が爲めに備へあり、主は審判の日に至りて之を我に予ふ(提摩太  
後書四章七、八節)

パウロの來世觀を否定して彼の書翰を読んで興味は甚だ尠いと思ひます。

若しまた黙示録に至りましては、來世の存在は其記事の主なる題目でありまして、之を  
否して此書は何の面白味もない者となります、主は來世の榮光を約束し給ひて彼と偕  
に患難を忍ぶ者に告げて曰ひ給ひました、我れ速かに來らん、爾が有つ所のものを堅く  
保ちて爾の冕を人に奪はること勿れと(三章十一節)、聖徒が斯世に於て遭遇する凡て  
の患難は彼が來世に於て受くる凡ての特權と榮光とを以て慰められるのであります、地  
に在ては彼の受くるものは火であります、劔であります、饑餓であります、疫病でありま

す、然し天に在ては能力、尊敬、榮光、讚美であります(五章十二節)、地に在ては惡魔と稱へサタンと稱ふる龍(二十章二節)が勢力を握るに對しまして、天に在ては羔が皎く輝ける細布を衣、白馬に乗りたる諸軍を率ひて萬民を統治し給ふのであります(十九章十四節)、天國とは聖城なる新らしきエルサレム、神が彼等の目の涙を悉く拭ひ給ふ所、死無き所、哀み、哭き、痛み有ることなき所、萬國の民を醫するための樹の葉の繁げらる所であります(廿一、廿二章)、火と戦争とのみを書記せし書のやうに見える此の書の中に婦人の心にあるやうな優しい、涙多い所のあるのは、其中に來世の希望が満溢れて居るからであります、默示録を何う註解しやうと若し其中より來世の希望を取除きまするならば、其れは何の慰めもない書となります、默示録が吾等基督教信徒に無限の歡喜と勇氣とを供しまする主なる理由は、此書に來世の存在と其榮光とが最もハッキリと記載してあるからであると思ひます。

問、新約聖書の來世觀は實に御説の如くでありませう、然し私が常に不審に堪えませぬのは、若し來世の希望が人の生涯を司る上に於て左程大切なものでありまするならば、

何故に舊約聖書が此事に就て沈黙を守るのでありませう乎、貴下はモーセや、ダビデや、イザヤや、エレミヤは來世の希望を抱いて死んだと思ひなさります乎。

答、舊約聖書と來世觀との關係は至て六ヶ敷い問題であります、今、茲に此事に關して充分にお話し申したならば他の事を申上ぐるの假がなくならふと思ひます、然しながら一何よりも明白なることは舊約時代の聖徒と雖も或る希望を抱かずしては死なかつたこのこととあります、神は永遠より永遠にまで生きて在る者であることは彼等も充分に信じて居りました、(詩篇九十篇等参考)、爾うして此神と常に離れざらんことは亦彼等の希望でありました、「我れ陰府に降るとも爾、彼處に在す」とは彼等の信仰でありました(詩篇百三十九篇八節)、斯のやうに舊約時代の聖徒は我儕今日の基督教信徒のやうにハッキリと天國を望むことは出来ませんでした、然しながら彼等は神に由る生涯の永遠死するものでないことは知つて居りました、故に舊約聖書中往々來世の希望に近き言を發見するのであります、有名なる約百記十九章廿五節以下の言は此類であります。

我、知る、我を贖ふ者は活く、後の日に彼、必ず地の上に立たん、我がこの皮この身

の朽はてん後、我れ肉を離れて神を見ん。

實に壯嚴なる語辭ではありません乎、又豫言者の理想せしメシヤの王國なるものに関する彼等の豫言に就て考へて見ましても、是れ現世の將來に就て言ふて居るやうて、實は現世を終へて後に來るべき新郷土の状態を謳歌して居るものであることが判ります、例へば以賽亞書の十一章六節にある「狼は羊と偕に宿り、豹は小山羊と共に臥し、犢、雄獅、肥たる家畜は共にをりて小さき童子に導かれん」との語辭の如きは是れ使徒行傳三章廿一節にある「萬物の復興」の成つた後に實行されることであると思ひます、又豫言者の理想なるもの、性質を能く考へて見ますれば、其凡てがメシヤの降世を待つて始めて實顯する者であることが判ります、舊約聖書の豫言者は此世が進化して（今の人の謂ふ意味に於て）彼等が理想せし王國とならふとは決して思ひませんでした、彼等はそのためには神の特別の行働のある事を信じました、彼等は此事を自覺して居つたか居らなかつたかは別問題と致しまして、彼等がメシヤの王國、即ち我儕が今日望む所のキリストの王國を現世とは全く其基礎を異にした者として畫いたことは明かであり、舊約聖

書の來世觀に就ては今日は先づ是位ひにして御免を蒙りたくあります。

其三 人類の本能に顯はれたる未來觀念

問、其れならばモウ聖書の來世觀に就ての御質問は歇めに致しませう、然し私の更めて伺ひたいのは貴下は聖書の外にも何か論據があつて來世の存在を御信じになるのであります乎。

答、我々基督信者に取りましては我々の主として頼る所のものは聖書の證言であります、然しながら我々は聖書以外にも亦來世存在の證明を有つと思ひます。

問、夫れは大略何てありますか。

答、第一は人類の宗教的本能とも稱すべきものであります、第二は偉人の證言であります、第三は私共自身の生涯の實驗であります。

問、人類の宗教的本能は如何様に來世の存在を證據立てますか。

答、其れは極く古い議論でありますが、然し今日と雖もまだ勢力を失はない議論であります、即ち基督降世前四百年程前に世に出たる希臘の歴史家ヘロドータスの言ふた語辭

に「我は廣く世界を遊歴して、憲法なき、文字なき、政治なき人民を見しことありと雖ども、而かも未だ會て宗教なき人民あるを見しことなし」と謂ふことがあります。今日の人類學者はヘロドータスの此言を打消しまして、阿弗利加の内部或は南米大陸の南端に於て宗教の全く無い種族の二三あるを發見したと云ひますが、然しながら例外は定則を證明すとの言に漏れず、全世界を通じて二三の全く宗教のない種族があると云ふことは（縱し其事を事實と見做すも）返て人類は宗教的なりとの定則を證明するに足ると思ひます。

問、貴下は頻りに人類が宗教的なるを證明されんとなさりますが、然かし其事は來世の存在と何の關係がありますか。

答、然ればです、宗教は即ち來世の存在を唱ふるものではありません乎、來世を教へない宗教は何處にありますが、來世を教へない者は宗教ではないと云ふも決して過言ではありません、埃及の宗教でも、バビロン、アッシリアの宗教でも、印度の比陀教でも、彼のソアラストル教でも宗教と云ふ宗教は、殊に文明人種の宗教は、總て皆な來世の存

在と其處に於ける裁判とを教へます、若し亦た下つて往昔のメキシコ人、ペルー人等の宗教に至りましても、來世の存在は宗教とは相離るべからざるものであります、斯う申したならば、貴下は、それならば佛教と儒教とは如何であると申されませうが、然し佛儒兩教でさへ來世觀を他より輸入するの必要があつたのを見て、如何に此觀念が人の心の中に強い者であるか、判ります、佛教の如き虚無、即ち凡ての物の實在を否定するのを以て其教理の基礎と定めたる教に於てすら、廣く衆生を濟度せんとするに方ては彌陀佛の慈悲と極樂淨土の存在とを教へざるを得ざるに至つたではありません乎、若し亦佛教に至りましては現世に於ける治國平天下を以て其唯一の目的となし、佛を笑ひ耶を嘲けるとは雖も、然かも其唯一の目的たる治國平天下を實行するに方ては甚く自己の不足を感じ、或は佛教を利用し、或は神道を利用するの必要を感ずるではありません乎、宗教より其來世觀を奪ひ去つて其心髓を取去るのであります、近くは我國に於て一時唱道されました「現世的基督教」なるもの、運命を御覽なさい、其唱道者は早く既に去つて基督教界の人に非ず、其教義は化して社會改良策の一種となり、熱もなき、情もなき、た

どの政治論と成り了つたてはありません乎、來世觀を供せざる宗教程無力なるものはありません、來世のない宗教を説く者は無益の業に従事する者であります。

問、随分強いお語辭であります、私も其中に或る真理の在ることを認めます、然しながら人類全體が來世の存在を要求する理由は彼等の無學に由るのではありません乎、所謂る未來觀念なるものは智識の増進と共に消滅するものではありません乎。

答、日本人にして少しく近世の教育を受けた者は大抵貴下の仰せられるやうな事を申しません、然しながら私は爾うは信じません、來世存在の希望は野蠻人のみの希望ではありません、而已ならず、此觀念も亦他の觀念と同じく智識の進歩と同時に進歩するものであります。

問、然しそれは何人にも迷信の元素が多少遺つて居るからではありません乎、迷信の元素が全く智識の光明に由て取り去られた後に始めて來世觀を要求するの必要がなくなるのではありません乎。

答、随分深い御觀察であります、來世の希望を堅く抱いて死んだニュートンもフハラデー

答 問 教 督 基

も、オルゾオスも、グラッドストーンも、彼等の心の中に存する迷信を脱却し得ずして來世を希望したとの御疑問であります、爾うして斯かる希望を抱かれない貴下御自身は新智識の光明に由つて斯かる「迷信」を全然脱却されたのだと申さるゝのでありませう、それは随分大膽なる御斷定であります。

問、御賞讃であるか、お冷かしてあるか分りません、然し何れにしる私の心の疑問を少しなりと解いて下さる。

答、失禮ながら貴下の根本的の誤謬は、智識を道德と全く離れて見らるゝことであると思ひます、然しながら智識は道德と一體であります、徳のない智識は事物の真相を覗ふことの出来ないものであります、若しニュートンが來世の存在を信じたと言へば、彼は彼の智徳兩性を以て、彼の生命其物を賭して信じたと言ふのであります、彼の智識は彼の信仰を以て清められ、彼の信仰は彼の智識を以て明かにせられ、斯くて完全に最も近き、即ち最も信ずるに足る智識を以て彼は來世の存在を認めたと云ふのであります、然るを彼は既に二百年前の人であつて、X光線をも無線電信をも知らない人であつたから、彼

の來世に關する智識は取るに足らないとの御言辭は抑々眞正の智識の何たる乎を御認め  
にならないより發せられるものではありません乎。

問、智識論はそれまでと致しまして、智者、學者、其他の偉人にして來世の存在を堅く信  
じた者は誰でありますか。

答、「偉人の來世觀」、是れは大問題であります、是れは以て一書を著はすに足るの問題で  
あります。

其四 來世存在に關する偉人の證言

問、長いことは願ひません、僅少なりともお聞かせ下さい。

答、私が偉人と思ふ人は大抵は深い篤い未來感念を持つた人であります、私は健全なる來  
世觀程人を偉大になすものはないと思ひます。

問、先づ貴下が偉大なりとお欲召さるゝ人は誰々でありますか。

答、私は喜んで赤穂義士の銘々傳を讀む者でありますが、其臨終の歌の中で原元辰の歌  
を非常に稱讚致します、私は日本人が君と親とを慕ふて詠んだ歌の中で斯んな清い美は

しいものゝ他にあるのを知りません、

兼ねてより君と母とに知らせんと

人より急ぐ死出の山路

彼れ義士の來世觀は決して完全なるものではないと致しまして、斯かる無私無慾の日本  
武士の雪の如き潔き心の中に斯くも優しき、而かも美はしき思想の湧出しのを見て、來  
世の希望なるものゝ決して痴人の夢でないことが能く分ると思ひます。

問、御説、誠に御尤でムいます、私も此歌には深く動かされます。

答、私は亦近頃東海道の俠客次郎長の辭世の歌に目を觸れました、博徒の長の作つたもの  
でありますから歌人の目から見ましたならば何の價值もない者でありませうが、然し若  
しオルツオスのやうな大詩人に之を見せましたならば、實に天真有の儘の歌であると曰  
つて大に賞讚するであらふと思ひます。

六でなき四五とも今は飽きはてゝ

先だつさいに逢ふぞ嬉しさ

多くの貴顯方の辭世の歌でも文字こそ立派であれ、其希望に溢れたる思想に至ては迎も此博徒の述懐に及ばないと思ひます、彼れ次郎長は俠客の名に恥ぢません、彼は斯世に在て多少の善事を爲した報酬として死に臨んで此美はしき死後の希望を懐くことが出来たと見えます。

問、貴下は案外にも我が國人中、人の多く知らない人の中に貴下の同意者を持たれます、然し貴下は彼等を以て世界の偉人とは見做されなくてせう、如何ですか。

答、勿論です、然しながら來世の存在を證明するためには彼等の心事は日本人の所謂英雄豪傑なるものゝそれに比べて優かに價値のある者であると思ひます、太閤秀吉の如き、西郷隆盛の如きは、其野心の大なりし割合に彼等の心の清からざりしがために、彼等は夫にして返つて小なる者でありました、心の清き者でなければ神と來世とを見ることは出来ません。

問、然らば斯世に於て大なる人で來世を明瞭に認めたる人はありません乎。

答、ありますとも、只然し「大」の種類が違ひます、アレキサンダーや、シーザーや、ナポ

レオンのやうなる偉人は(若し偉人の稱を彼等に附する事が出来ると思ひますれば)來世を望み得る偉人ではありません、彼等は現世限りの偉人でありまして、宇宙とか永遠とかいふものを己の有となさんと欲ふた者ではありません、來世の存在を認めたる偉人は彼等とは全く別種類の偉人であります。

問、それは例へて見れば何ういふ人物でありますか。

答、政治家で言へばアルフレッド大王のやうな、グラッドストンのやうな、軍人で云へばコロムウエルのやうな、ゴルドン將軍のやうな人物であります、即ち同胞を援けんとする單純なる心より或は政權を握り、或は劍を抜いた人物であります、爾う云ふ人は多少明白なる來世の希望を懐いて死に臨んだと思ひます。

問、それは御尤の御説であります、それで貴下の指名されし人等は實に來世の希望を懐いて死に就きましたか。

答、左様であります、若し歴史に大なる誤謬がないと致しますれば其事は否むべからざる事實であると思ひます。



問、グラッドストンの臨終の狀に就て伺ひたいものがあります。

答、彼は御承知かも知れませんが、死する二年前より有名なる監督バトラーの著はした *Fourth Analogy* と云ふ書の註解に従事致しました、爾うして彼の重なる目的は之に依て來世實在の證明を世に供せんとするにあつたとのこととあります、彼はその第二卷までを世に公にし、第三卷を半ば終つて死にました、ヴィクトリヤ女王の下に四回まで大英國の總理大臣となつた彼れグラッドストンに取りましては來世の存在に優るの大問題はありませんでした、是れ彼に取りましては印度帝國を保存し阿弗利加大陸を經營するに勝るの大問題でありました。

問、爾うして彼はその來世の希望を彼の臨終の時まで持續けましたか。

答、勿論です、彼が病床に在りし間に彼の最大の慰藉は彼の孫女某と共に有名なるトブラデー作の「千代經し岩よ」の讚美歌を歌ふことであつたとのこととあります、爾うして其讚美歌が基督教徒の來世の希望を歌つたものであるとは誰も知つて居ります、そればかりではありません、彼が斯世に在て發せし最終の言辭は *Our Father* (我儕の父) の一

言であつたさうであります、彼は *in Heaven* (天に在す) の語を發し得ずして彼の唇は鎖されたと見えます、六十餘年間世界を震動せしめし彼の唇は「天に在す我儕の父」の名を續んで鎖されました、實に偉大ではありません乎。

問、偉大であります、いかに太陽が肅然として西山に没するが如き觀があります。

答、私はグラッドストンの死狀を聞いて私の先師故シリー先生の事を想出さざるを得ません、御承知かも知れませんが、彼は十餘年間米國アマスト大學の總長でありまして日本人にして彼の薰陶に與つた者は私の外にも幾人もあります、私は目にグラッドストンを見たことはありませんが、然しシリー先生に接して、グラッドストンとは斯う云ふ質の人であらうと度々思ひました、學者で、實務家で、信仰家で、其圓滿偉大なること到底日本などに於ては見るとの出來ない人物であります、私は一夜少しく先生に求むる所がありました、突然先生の書齋に侵入致しました、先生は其時恰かも或る書を読んで居られました、何時になく喜んで私を迎へられ、その讀みつゝありし書を卓上に置かれ、金椽の眼鏡を取外して其塵を拂はれ、靜かに私の云はんと欲する所を聞かれ、後は

話頭を現世の事より神と來世の事とに轉ぜられ、書齋の壁上に掛けてありし一老婦人の繪畫を指され、小兒のやうな餘念なき口調にて云はれました、「内村君よ、あれは私の妻であります、彼女は二年前に私共を逝りまして、今は天國に在て私共を待つて居ます」と、曰ひ終て先生の温顔を仰ぎ見ますれば眼鏡の中なる先生の大なる眼球は一抔に涙を以て涵されたのを見ました、私は實に其時ほど明白に來世の實在を證明されたことはありません、先生の大智識を以てして、斯くも有々と墓の彼方に美國の在るのを認められしのを見まして、私は自己の小なる頭腦を以て度々其存在に就て疑を抱ひた事を深く心に耻ぢました、私は今日まで幾度となく來世存在の信仰を嘲ける人に出會ひました、然しながら其人は皆人物から言ても、學識から言てもシーリー先生に遠く及ばない人たちでありました、先生の言はれし事として必しも一から十まで眞理であるとは言へません、然しながら斯かる人物が斯かる確信を懷いて居つたことを思ひまして私の來世存在に關する信仰は非常に強められます。

問、多分爾うであります、私如きは不幸にして斯かる人物に遭遇したとがありません、從つて斯かる問題に就ては今日まで至て冷淡でありました、實に興味の多い御實驗談を受玉はりましたして誠に有難うございます。

答、其他コロムウエルやビスマークなど偉人の來世觀に就て御話し申すことは至て面白い事でありますが、それは他日に譲りまして、私は世界の大神詩人が來世存在に就て何う思つて居つたが其事に就て少し聞いていたゞきたく思ひます、御承知の通り我邦では詩人と申しますればたゞ文字を玩ぶ閑人のやうに思はれますが、然し世界の大神詩人とは決して爾んな物ではありません、詩人は偉人中の偉人であります、希臘國の産じた偉人中で詩人ホーマーほどの偉人はありませんでした、伊太利國の最大人物は勿論ダンデであります、英國に在てはシェイクスピアはコロムウエルに優るの人物でありました、又政治家としても詩人の性を備へない者は偉人とは云はれません、所謂「散文的人物」なる者は平凡の方に近い人物であります、それ故に來世存在に關する偉人の言を聞かんと欲へば世界の大神詩人の言を聞かなければなりません、爾うして大神詩人は一様に來世の希望者であります、否な、それに止まりません、來世を觀る能はずして大神詩人たること

は出来ません、詩人の天職は殊に矇眼の世人セジンに來世の實在を明かに示すにあるのであると信じます。

問 詩人の御解釋は御説の通りであります、ドーン大詩人の來世觀に就て少し御話し下さい。

答、先づ詩人オルツオスから申上げますならば、私は彼の詩集の中から何れを先きに引きても話し申して宜しか甚だ感ひます、有名なる「靈魂不朽の歌」「我等は七人なり」等は人の多く賞讃する所の作であります、然し來世存在に關する彼の最後の證明とも稱すべき者は彼の老年の作なる「夕暮の歌」(Evening Ode)であると思ひます、彼は夕陽の西山に春サキくのを見まして彼の感慨を述べて申しました。

Wings on my shoulder seem to play:

But, rooted here, I stand and gaze,

On those bright steps that heavenward raise

Their practicable way.

我が肩上の羽翼の動くを感ず、然れども我れ尙ほ此處に止て遠く望めば、玲瓏たる階段の天にまで達して、之に到るの途を示すを見る。

如何ドウてありますか、今や老詩人は彼の羽翼トビを張つて天に昇らんとするばかりではありませんか。

詩人臨終の歌として最も勇壯なるものは米國の平民詩人ホキットマンの「死に臨んで余の靈魂に告ぐ」の歌であります。

Joy! shipmate—Joy!

(Pleas'd to my soul at death I cry;)

Our life is closed, our life begins;

The long, long anchorage we leave.

The ship is clear at last—she leaps,

She swiftly courses from the shore;

Joy! shipmate—Joy!

歡べよ、同船の同伴よ、歡べよ、

(余は喜んで死に臨んで余の靈魂に斯く告げぬ)

我等の生命は終りぬ、我等の生命は始まりぬ、

永の、永の間の碇泊地を我等は去らんとす、

船は終に纜を斷り、我心は飛立つなり、

彼女は岸を離れて速かに進むなり、

歡べよ、同船の同伴よ、歡べよ。

或人が此歌を評して曰ひました、「余は近世の人にして斯かる凱旋の聲を揚げて彼世に入りし人の他にありしを知らず」と、是れは死の聲ではありません。榮轉の祝賀の聲ではありません、貴下は斯かる希望を懷きたくはありません乎。

問、實に羨しうございます、詩人は酔ふて居るのか、醒めて居るの乎、私には判断がつきません。

答、又詩人ブライアントを御紹介致しませう乎。「死」は彼の特愛の詩題でありました、彼

答 問 教 督 基

答 問 教 督 基

は時には死の威權に壓せられました、死後の生命に就ては歌ひ得ませんでした、然しながら詩人たる彼は死の呑む所とはなりませんして、彼も亦死に打勝つて墓を破るの信仰を持つて居りました、彼は、「二基の墓」と題して或る無名の老夫婦の死後を吊ひし歌に於て、人生のはかなさを述べた後で死は萬事を終ると云ふ世間普通の信仰を排斥して言ひました、

'Tis a cruel creed, believe it not;

Death to the good is a milder lot.

They are here, they are here—that harmless pair,

\* \* \* \* \*

Patient, and peaceful, and passionless;

As seasons on seasons swiftly pass,

They watch and wait and linger around.

Till the day when their bodies leave the ground.

是れ慘酷なる信仰なり、之を信ずる莫れ、死は善人に取つては安き境遇なり、彼等は此處にあり、かの辜なき夫妻は此處を離れず、

静かに、忍んで、憤懣と怨恨なく、

年月、駒の如くに速く走る間に、

彼等は且つ祈り且つ俟つて此邊を去らず、

彼等の肉體が地を離れて出て来るまで。

大詩人の心に小兒の有つやうな斯かる信仰の有るのを見て來世、復活の信仰の決して痴人の夢でないことが愈々明白になると思ひます。

問、大詩人の來世觀に就て尙ほ充分に承玉はりたく存じますが、然し大分御高説も拜聴致しましたから、アトは少々貴下の御實驗上から來た御信仰に就て承玉はりまして、それ今日ばもう御面倒を掛けまいと思ひます。

其五 生涯の實驗より生ずる來世の希望

答、私の實驗として決して私一人の實驗ではありません、人類全體の實驗であります、誠實を追求する者の凡の人の實驗であります、眞面目に同胞のためを思ふて人生を送らんと欲せし人にして此希望を懐かない者はないと思ひます、現世は我等の理想を行ふには、餘りに不完全なる所であります、若し斯世が萬事を終るものでありますならば、人として此處に生れ來りましたのは最大不幸であると思ひます、世に辛らいこととして理想を持つて理想を行へない位辛いことはありません、然るに總て高尚なる人の生涯は皆な此「充たされざる理想」の生涯であります、理想に應ふ實物の存在するのが此宇宙の法則でありますのに、現世には吾人の理想に應ふための實物が在りません、是事が來世の存在の最も確かなる證據ではありません乎、故に詩人ゲーテは來世を望んで言ひました。

凡て變り易きものは、單に比喩に過ぎず、  
達すべからざるものは彼處に事實と成る、

口に言ふべからざるものは彼處に行はる。  
 限なく女らしきものは我等を彼處に引附く。

斯世に誤解といふことがあります、是れは人生の最も怕ろしい事であります、悲劇と云ひ慘事といふは皆な此誤解が事實と成つて顯はれたものであります、天目山の悲劇も之でありました、源義經に腰越状を書かしたのも是でありました、暗主が有つて奸物を忠臣と誤解し、忠臣を亂臣賊子と誤解した爲めに多くの家は滅びました、亦人生の最大苦痛の一なる家庭の紛争もその大抵は此誤解より來るものであります、父母に子の眞偽を見分くるの明なく、孝は孝として受けられずして、僅かに外面の愛相を以て孝なりと信ずるより、家庭に誠實は迹を絶つて、只僅かに形式的の禮儀のみ存するに至ります、誠實は必ず世に認めらるべしとの私共の幼時の信仰は歲月を経るに従つて全く破壊されて了います、誠實は斯世に在ては國人にも、君にも、父母にも、兄弟にも、友人にも、必ず認められるとは限りません、否な多くの場合に於ては其正反對が事實であります、ソクラテスが雅典人に殺されしが如き、ダンテがフロレンスの市より逐はれしが如き、

ラマルチンが佛國より逐放されしが如きは決して珍らしい事柄ではありません、人は國を愛する丈けそれ丈け其國人に憎まれるやうに見えます、世に辛い事として人の善を思ふて其人に憎まれる事ほど辛い事はありません、然しながら是れ人生の常であります、少しく眞面目に世を渡らんと欲せし者は大抵は此辛らき實驗を経過致します。

此時に方て何にが私共の慰藉となりまするか、誰が私共の心を眞正に見て呉れるのでありますか、父母ですか、兄弟ですか、友人ですか、嗚呼、情けない者は人間であります、人類總体が其智慧を一所に集めましても多くの場合に於ては人の眞偽を判別することが出来ません、然し若し斯世が私共の有つ唯一の世でありますならば、生命とは何んと詰らない者ではありません乎、此時に方て誰がヨブと偕に叫びません乎、

我れ知る我を贖ふ者は活く、後の日に彼れ必ず地の上に立たん、我がこの皮、この身の朽はてん後、我れ肉を離れて神を見ん(約百記十九章廿五、廿六節)。

私は世に誤解された時に最も明白に來世の存在を認めました、私は骨肉友人の誤解を最も辛らく身に感じた者であります、私は其誤解を取り去らんために私の知る總ての方法

を竭しました、然し其全く無効なるを知りまして、一時は非常に失望致しました、然しながら聖書を讀み、殊に黙示録を讀みまして、斯かる誤解の生涯が基督信徒の生涯であることを悟り、それと同時に神が私共により善き國を備へ給ひしを知りまして、私の涙は始めて拭はれました、私は眼に涙を湛えずして未だ曾て黙示録の第廿一章を讀んだことはありません、

神、彼等の目の涙を悉く拭ひとり、復た死あらず、哀み痛み有ることなし、蓋前事すでに過去ればなり(第四節)。

嗚呼、是れ有れば足りるのであります、是れ有れば人に何んと思はれても宜ういいます、國賊として窘められませうが、亂臣として斥けられませうが、不孝者として疑はれませうが、偽善者として遠ざけられませうが、是れあれば私に痛み哀みはありません、來世の希望が私に供せられた時に私は始めて氣息を吐いたのであります、此時に始めて私は人らしき人と成つたのであります、其時から宇宙も人世も私には樂しさものとなりました、其時に私は詩人ホヰンチャ一の句を借りて謠ひました、

我れ最早懼れず、曇りし自然の面影も今は笑を含みけり、限りあるもの、朽るもの、眼に見ゆるものすべて皆な、觸るゝ聖靈の羽音して、希望の讚歌唱へけり、

私より來世の希望を奪ふ者は私の生命を奪ふ者であります、是れなくして人生は私には無味のものとなります、私の「存在の理由」は確かに「來世の存在」に在ります。

問、爾う御説明になりました、私はまう何んとも御質問の致しやうはありません、たゞ私はまだ充分に貴下のやうに來世を望むことの出來ないのを残念に思ふまでであります。

答、それは貴下の御生涯が全躰に平坦であつたからであります、夜が來らなければ森羅萬象が眼に映らないやうに、辛い生涯の經驗に遭はざれば來世は瞭かに見ゆるものではないと思ひます、然し貴下にも何時か其辛い嬉しい時が到來するであらうと思ひます。

問、有難ういいます、今日の御説明に依て他日大に心に悟ることがあらうと思ひます。

答、私も爾う望みます、ロングフェローの詩に、「晝間月を見て其要を認めざりしが、夜に火の比よ其光明の有難さを知りた」といふ事が書いてあふまするが、私の不束なる來

世に關する此説明も後日に至て何にか御役に立つことがあるかも知れませんが、サヨナ  
ラ。

イエス十二の弟子に曰ひけるは爾曹も亦我を去らんと意ふや、シモンペテロ答へける  
は主よ我儕は誰に往かんや、永生の言を有てる者は爾なり（約翰傳六章六七、六  
八節）。

イエス曰ひけるは我は復生なり、生命なり、我を信する者は死ぬるとも生くべし（全  
十一章二十五節）。

キリスト死を廢ぼし、福音を以て生命と壞ざる事とを明著にせり（提摩太後書一章十  
節）。

第二席

キリストの神性

其一 問題の性質

問、或人はキリストは神であると申します、亦或人は彼は人であると申します、貴下は孰  
れを信じになるのであります乎。

答、キリストの性格に就ての御質問でありますか、私は之に應じまする前に一言、此問題  
の性質に就て貴下に申上げて置かなければなりません、失禮ながら貴下は如何いふ考へ  
から此問題に就て私にお尋ねになるのでありますか、其事を先づ伺つて置きたいのであ  
ります。

問、別に如何いふ考へと云ふのではありませんが、是れは宗教上の大問題であるやうに見  
受けまする故に、それに就て御意見を伺はんと致した次第であります。



答、御説の通り是は宗教上の大問題であることは申すまでもありません、然しながら是れは單に世に所謂る宗教問題ではありません、即ち是れは單に私共の理性に訴へて、面白半分ほんぶんに哲學的に講究すべき性質の問題ではありません、キリストの性格問題は實に道德問題であります、人類の攻究すべき問題の中で實は是れ程、大切なる問題は無いのであります、私は貴下が豫め此事を御承知置きあらんことを願ひます。

問、御注意は眞まことに有難く存じます、然しながら私にはまだキリストの性格問題が道德問題であるといふ事が分りません、キリストの何たる乎を知るのは吾人の品性に直接の關係があると仰せられるのでありますか。

答、左様であります、貴下は聞いて驚おどろきになる乎も知れませんが、然かし人の品性と彼の永久の運命とは彼がキリストに就て如何信ずる乎に由て定まるのであると私は信じます、キリストは實に品性の試験石であります、彼を知るは永生かぎりなきいのちであります、私は今、貴下が直に此事をお分りにならふとは望みませんが、然し貴下が此心を以て此深遠しんえん窮りなき問題を考究せられんことを望みます、多くの人が此問題に就て議論を闘たたかはした揚句、何

等の光明にも達し得ませんのは、彼等が此畏敬の心を以て考究しないからであると思ひます、即ち自己の心に鑑みないで、之を自己以外の問題と見做し、哲學者が時間空間の問題を研究する時のやうに、單に智識にのみ由て之を解釋せんと致しまするが故に彼等は何時いつも満足なる結論に達しないのであります。

問、御注意に循したがひまして、謹んで空想に趨むからないやうに努めませう、只私の不審かどくの廉々に就ては幾重にも御説明を願ひたく存じます。

答、勿論私の知つて居ることだけは喜んで御答へ申します、但し私の薄信淺學は豫め御承知置き願ひます。

其二 聖書の證明

問、聖書は實にキリストの神性を示して居ります乎。

答、私は居ると思ひます、私は充分に示して居ると思ひます、私は聖書を公平に研究して、此事を認めない譯には行かないと思ひます。

問、然し聖書の或處ではキリストは人であると言ふて居るではありません乎、乃ち提摩太

前書第二章の五節に「人なるキリストイエス」なる言辭があるてはありません乎、是に對してキリストは神であると明言してある所は聖書に見當らないやうに思はれます、福音書全體の記事から考へて見まして、キリストの人でありしことは何人も疑はない所でありまして、彼を神とする者があるからこそ彼の性格問題が起るのではありません乎。

答、左様であります、然しながら聖書の記事全體から推測しましてキリストを人なりと斷定する事の至て難い事は、是れ亦何人も認むる所であると思ひます、若し貴下がキリストは人であるとの聖書の證明を一つ御引出しになりますならば、私は彼は神でなくてはならないといふ同じ證明を十も二十も引出すことが出来ると思ひます。

問、聖書の如何いふ所にキリストの神性が示してありますか。

答、殆んど聖書到る所にあると思ひます、先づ試に馬太傳の第一章を開いて御覽なさい、若し其記事が誤謬でないと思ひますれば、其中にキリストの性格が明々と示してあると思ひます。

問、それはどういふ所に示してありますか。

答、其十六節にキリストと稱へるイエス生れ給ひきとありまして、イエスの何たる乎が明かに示してあります、キリストとはメシヤ即ち神の受膏者の意でありまして、若しイエスがキリストであり、即ちユダヤ人の待望みし彼等の救主なるメシヤであると致しますれば、彼が人間以上の者であつたとはユダヤ人たる者の何人も疑はない所でありました、只彼等に取ての大問題はナザレのイエスが實に此メシヤであつた乎、否やであつたか、然るに茲に馬太傳の記者が、其書の首に於てイエスをキリストなりと稱へて居るのであります、是れ此章に於てイエスの神性が私共に示されて居る其第一であります。又其第廿節に於てマリヤの孕める所の者は聖靈に由るなりとありまして、イエスが尋常一様の人でないことを示して居ります、此記事が迷信に由て成りしものであると致しますれば夫れまで、ありまするが、然し是れが聖書の明白なる記事でありまするが故に、若し聖書は其大躰に於て信するに足るべき書であると致しますれば、イエスの奇跡的出生の事實に就て疑を抱くことは出来ません。

又其廿三節に處女孕みて子を産まん其名をインマヌエルと稱ふべし……其名を譯せば神

我儕と偕に在るとの義なりとあります。イエスの場合に於ては名は實を示すものであります。後世に至てインマヌエルの名を帯びし人は澤山ありました。有名なる獨逸の哲學者カントはインマヌエル、カントと稱ひました。又伊太利國の前々皇帝をビクトル、インマヌエルと稱ひました。然しながら哲學者カントも皇帝インマヌエルも自分は神の獨子で人類唯一の救主であるとは信じませんでした。イエスのみが眞實のインマヌエル、即ち「神、我儕と偕に在る」者であると自覺しました。爾うして又彼の生涯が彼の此自覺の決して彼の妄想に出たものでないことを示して居ります。又ユダヤ人として馬太傳の記者が此聖名を眞實のインマヌエル以外の者に適用しやう等はありません。インマヌエルは人類の中に住はれし神であります。爾うしてイエスは此インマヌエルであるとの事であります。

斯の如くに新約聖書は其卷首からイエスの神性を明かに示して居ると思ひます。イエスの神性を否定して新約聖書は煩混、錯雜、自家撞着、實に讀むに堪へざる書となると思ひます。

問、御説、或は御尤かも知れません。然しながら聖書中所々にイエスが神より劣つたる者であるやうに記示してあるのは如何いふ譯でありますか。前に申上げました提摩太前書二章五節の外に、約翰傳十四章廿八節に、イエスは自身を天の父に較べて「我が父は我より大なれば也」と言はれたと書いてあります。又イエスが自分を神の忠實なる僕として世に紹介されたことは御承知の事でありませう。斯かるイエスの證言より推量致しまして、イエスを神なりと斷定致しますれば、終にイエスは自己の僕なりとか、或は彼は自己より大なる者なりとか云ふやうな背理に達するに至るではありませんまい乎。此邊の御説明は如何がであります乎。

答、其御質問に應へまする前に、私は聖書はそれと同時に何んと言ふて居る乎、其事に御注意を仰がなければなりません。「我が父は我より大なれば也」と云ひ、亦「我が父は萬有よりも大なり」(約翰傳十章廿九節)とイエスが言はれたと書いて居る聖書は、それと同時にイエスは「我と父とは一なり」と言はれたと書いて居ります。爾うしてイエスの此言が決して曖昧の言でなかつたことは彼の此言を聽きしユダヤ人が彼に就て非常に

怒つたといふ事で分ります、爾うしてイエスが彼等に何故に怒るやと問はれし時に彼等は彼に答へて「爾、人なるに己を神となすに因る」と言ひました(十章卅三節)、イエスが彼の國人に神と同位同等の者なりと誤解せられんことを少しも憚り給はなかつたことは新約聖書の明白に記す所であります、又聖書全体の記事から推測致しまして、父なる神と子なるキリストの優劣は職務上の優劣であつて品位上の優劣でないことは能く解ると思ひます、恰かも内閣諸大臣は其品位に於ては孰れも同等であつて、唯其職務の上

に於てのみ總理大臣は他の大臣の上に立つ者であるやうな理由であると思ひます。  
問、如何にも巧なる御例證であります、然しながら聖書の記事は實際御説の通りでありますか。

答、私は爾うであると思ひます、今聖書全体に涉つて私の所信を御説明致す譯には到底参りませんが、然しながら其中の二三の箇所を御指示し申して私の信仰の立場を貴下の前に辨明しやうと思ひます。

テサロニカ前書の二章の十六、十七の二節に斯う書いてあります、

願くは我儕の主イエスキリスト及び我儕の父の神、即ち我儕を愛し且つ恩に因りて永遠の安慰と善望を予ふる者、爾曹の心を慰め、凡の善行と善言に爾曹を堅固くせんことを。

此兩節を通讀致しまして、誰にも氣の附くことはキリストと父の神との間に何の區別をも立てないこととあります、兩者孰れも「我儕を愛する者」、「恩に因りて永遠の安慰と善望を予ふる者」、「凡の善行と善言に爾曹を堅固く」する者であります、斯かる恩恵を我儕に下さる者は主イエスキリストである乎、或は父の神であるか、或はキリストと父の神との二人であるか、パウロの此言辭を讀んでは何の判別もつきません、亦此兩節を原語の希臘文にて調べて見ますと實に著しい事が分るのであります、即ち「主イエスキリスト及び我儕の父の神」とありまして名詞は二つで文章の主格に立つ者は二人でありますが、「愛し」とか、「予ふる」とか、「堅固くせん」とか云ふ動詞は複數の者ではなくして單數の者が使つてあります、少しなりと英語なり獨逸語なりの文法を知つて居る者は誰でも動詞は其數に於ては之を支配する主格の數に一致しなければならぬことを知

つて居りますが、然るに茲に立派なる希臘文で書かれたパウロの言辭の中に複數の名詞に對して、即ち「キリスト及び父の神」に對して單數の動詞が使用つてあるのであります。是れは甚だ奇態なる事でありまして、斯かることには非常に注意したパウロの書いた者としては之を彼の文法上の誤錯に成つたものとは認められません、爾うして此事は何を示すのでありませう、即ち主イエス及び父の神は同一の者であつて、其間に何の懸隔かひへだてあるなく、父の爲す所を子は爲し、子の爲す所を父は爲し、二者は同一體であつて、二者は一者として視るを得べき者なることを示すのではありません乎、今同じ事が人と神とに就て言へると考へて御覽なさい、今、孔子が聖人であると言つて、「孔子及び父の神」云々と言つて御覽なさい、此等の二つの名を斯く駢ならぶ事、其事自身か褻瀆せつとく的に聞えまして、誰も斯かる言辭ごんごに耳を傾ける者はありません、殊に孔子が我儕に「永遠の安慰と善望を予ふる」とか、「神と偕に我儕を導く」とか言ひますれば、我儕はたゞ狂人として世に迎へられるまでとあります。

問、興味ある御研究の結果を伺ひまして實まことに有難く存じます、尙ほ不審かどの廉かどもありませんが、それは後廻ちよまほしに致しまして、更らに此問題に關する御考察の結果を拜聴致したいものであります。

答、聖書が私にキリストの神性を證明する事實の中でキリストが人の崇拜を受けられたとの事は其最も力ある者であります、御承知の通りユダヤ人は激烈なる一神教の信者でありまして、神以外の者に崇拜を奉るが如きは真正のユダヤ人の死すとも爲す能ざる所でありました、「汝我面の前に我の外、何物をも神とすべからず」とはエホバの十誡の第一條でありまして、ユダヤ人たる者は人は勿論のと、縱令たとひ天使てんしのつかひであるとも決して之に對つて神に對するの敬崇を拂つてはならない者でありました、故に若し異邦の人がありますして其偶像に事へし心根こころねを絶ち得ずして、誤つてキリストの使徒等に向て崇拜めきたる行爲に出んとしました時には、使徒等は戰慄せんりつして斯かる接待を退けました、コルネリヤと云ふ人が使徒ペテロを其家に迎へて其足下に伏して拜みました時にペテロは之を扶起ひきおこして「起てよ、我も人なり」と言ひてコルネリヤの己に對する崇拜を却けました（行傳十章廿六節）、又パウロとバルナバとがルステラと云ふ所に傳道しました時に、其土地の人

が彼等兩人を以て神が人の形を取りて降りし者なりと信じ、彼等の前に櫃と花飾とを獻じて彼等を祭らんと致しました時に、彼等は驚駭くこと甚だしく、使徒バルナバとパウロ、之を聞きて己が衣を裂き走り出て大衆の中に入り、喊叫びて言ひけるは人をよ何故に此事を行すや、我儕も亦爾曹と同じ情性を有つ所の人なり（行傳十四章十四、十五節）

と言つて此祭禮を拒絶致しました、以て彼等が神以外の者に自身崇拜を奉ることを非常嫌つたのみならず、又自身も人に神として崇拜せられんとを非常に忌み嫌つたのが分ります、然るにイエスに於ては少しも此諱憚がありませんでした、彼は彼の何たる乎を知つて彼を崇拜せんと欲する者の崇拜は歎んで之を受けられました、彼は生來なる瞽の目を開き給ひて、其來て彼を拜せし時に其崇拜を却け給ひませんでした、「主よ我信すと曰ひて彼を拜せり」（ヨハネ傳九の卅八）、是れは其一例であります、又イエスの復活後の事ではありましたが彼の弟子の一人なるトマスが彼の前に跪きて「我主よ我神よ」と云ひて彼を拜しました時に、彼は彼の弟子に由て彼に與へられし此神なる尊稱を拒み給ひ

ませんでした、イエスは實に其出生の時より人の崇拜の目的物でありました、彼れ始めて呱呱の聲を揚げ給ひしや、東の方の博士輩は來て彼の前に平伏して嬰兒を拜し寶の盒を開いて禮物を獻げたのとてあります、（馬太傳二章）、人に禮拜を獻くることを嚴禁したユダヤ人の中に茲に一人の崇拜を受くるに足る者なりと自信し歎んで人の崇拜を受けた者がありました、私共とても嘗てコロムウエルなりワシントンなりを崇拜したことはありません、若し「英雄崇拜」なるものがあると致しますればそれは尊敬とか敬慕とか云ふ意味の崇拜でありまして、決して寶の盒を開いて禮物を獻げる底の崇拜ではありません、女の胎内より出し者の中でナザレのイエスのみが人類の崇拜を受くるに價あるものであります、彼を神として拜するも我儕の良心は少しも品性の墮落を感じません、而巳ならず帝王を崇拜して自由を失ひ、富豪を崇拜して威權を隕せし國民もイエスを神として崇め奉りて其失ひし自由と獨立を回復した例は人類の歴史にいくつもあります、イエスは實に榮光の君主でありまして、人類の崇拜を要求する者であります。

其外聖書の左の言に御注意を願ひます。

イエス曰けるは、我はアブラハムの有らざりし先より在る者なり（ヨハネ傳八の五八）、父よ、今我をして創世より先に爾と偕に有らし所の榮を得させ給へ（全十七章の五節）、大なる神即ち我儕の救主イエスキリスト（テトス二章十二節）等（此言詞の順序に就ては稍や疑あり）其他數限りありません、爾うして最後は前に御質問になりました提摩太前書二章五節の「人なるキリストイエス」に就て御答へ申しませうならば、其説明は至て容易い者であると思ひます、今其全節を茲に引いて見ますれば其の意味は明白になります、それ神は一位なり、又神と人との間に一位の中保あり、即ち人なるキリストイエスなり、  
 MAN Christ Jesus、  
 A man Christ Jesus  
 ではありません、即ち人なる、理想の人なる、人類が標目として仰ぐべき者なるキリストイエスであります、弱き罪ある人の子の一人なるキリストイエスではありません、即ち敵ピラトが指して「觀よ、これ其の人なり」Ecce Homo（ヨハネ傳十九章九節）と言ひし其の人であります、是れは即ち人類が神として崇むべき人であります、人の形を取て我儕の中に臨りし神であります。

問、御説の大體に於ては誤謬がないと致しまして、私の重ねて伺ひたきことは、若しイエスは神であつて、彼の神性を信ずることが我儕人類に取て左程に大切な事でありまするならば、何故に聖書はモット明白にイエスは神であると繰り返しく、力を籠めて言つて居りませんか、御説明に依りますればイエスは大きな神なりと明狀に言ふて居る所はテトス書の二章十三節の一ヶ所でありまして、夫れも御説明に由りますれば、其辭句の順序に稍や疑があるとのことでありまして、私は神が斯かる大切な教義を不明に附して置き給ふとはどうしても信じられません。

答、實に御尤なる御質問であります、然しながら夫れには夫れ相應の理由があると信じます、先づ第一に聖書はイエスは神なりと明狀に言ふては居らないと致しまして、イエスはキリストなりとは最も明白に言ふて居ります、キリストの神性問題を攻究致しまする方て、キリストなる名稱に就て正格の了解を心に持つことは最も肝要であると思ひます、御承知の通りキリストとは人名ではありません、「キリスト、ソクラテス、孔子」などと言ひまして、三人物を比較する世の所謂批評家なる者がありまする故に、多くの

國人はキリストとは人の名であると思ふて居ます、然し少し注意して聖書を究めた者は  
 ソシナ淺薄なる思考を有ちません、前にも申し上げました通りキリストとは希臘語であり  
 まして、希伯來語のメシヤ即ち受膏者を譯した言辭であります、故にキリストとは人名  
 ではなくして職名であります、恰かも帝王とか、豫言者とか言ふやうなものでありまし  
 て、榮譽と職責との附隨して居る所の聖職の名であります、故に世に眞正のキリストが  
 あり、偽りのキリストがあると聖書の所々に書いてあります、斯かる次第であります  
 故に「キリストの神性を論ず」と云ひますのは實は自明の理を語るやうなものでありま  
 して、恰かも「神の神性を論ず」といふやうなものであります、メシヤは人でない、  
 直に神より出て来て神と同位の者であるとは舊約聖書の充分に證明して居る所でありま  
 して、又イエス在世當時のユダヤ人の毛頭疑はない所でありました、唯問題中の大問題  
 とも申すべきことは工匠ヨセフの子と稱はれしナザレ村のイエス、彼は實にキリストで  
 ありし乎、是れてあります、爾うして若しイエスがキリストであると致しますれば時のユ  
 ダヤ人はイエスの神性に就ては少しも疑を挿まなかつたのであります、然し彼等は此

事が信ぜられなかつたのであります、キリストは神なりと信ぜられなかつたのではあり  
 ません、イエスはキリストなりと信ぜられなかつたのであります、爾うして此疑團に對  
 して新約聖書は繰り返しくイエスはキリストなりと證言して居るのであります、所謂  
 るペテロの大表白とは此事でありました、即ちイエスはキリストなりとの表白でありま  
 した。

イエス、カイザリヤピリビの方に到りし時、其弟子に問ふて曰ひけるは、人々は人の  
 子を誰と言ふや、彼等曰ひけるは或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエ  
 レミヤ、また預言者の一人なりと言へり、彼等に曰ひけるは爾曹は我を言ひて誰とす  
 るか、シモンペテロ答へけるは爾はキリスト活神の子なり（馬太傳十六章十三—十六  
 節）。

是れて問題は解けたのであります、ペテロはイエスはキリストであると判分つて、福音  
 の深い奥義に達したのであります、爾うして聖書は其始より終りまで私共に此了解と信  
 仰とを促がして居るのであります、聖書はイエスは神であると明状には言ひませんが、



キリストは神であるとの打消すべからざる印象を遺して、然る後にイエスはキリストであるとして証明して居ります。

又一見して不明の如くに見ゆるイエスの性格に關する聖書の記事の中に深き神の智慧と攝理とが籠つて居るのではありません乎、「慎て人に告る勿れ」とはイエスが度々彼に由て病を癒されし人に告げ給ひし所の言辭でありまして、是れ一つは彼の謙遜より發せし言辭なる乎も知れませんが、亦二には是れ神が其眞理を人に傳へ給ふ時に取り給ふ方法として見るべきではありますまい乎、イエスの神性の如きは是れ我儕自身で發見すべき眞理であつて他より告げ知らせらるべきことではないと思ひます、否な、是れは我儕が縦令目を以て之を見、耳を以て之を聞きたればとて、それで心に信ずることの出来る眞理ではありません、人は聖靈に因るにあらざればイエスを主なりと謂ふ能はず、我儕はイエスが神たるの事實を示さるれば足ります、イエスは神なりとの言を千萬言繰返へざるゝとも若し其事實が示されなければ其言は我儕の靈魂を感化する上には全く無効であります、世には是れと正反對の方法に出る者が澤山あります、偽善政治家が出てまし

て、民心を己の一手に收攬せんと欲し、勅令を發し、法律を編み、帝王の神聖を宣言して、威力を以て壓制的に之を民衆の上に強ひんと致しましても、悲ひかな、神聖の事實を供しませんが故に、彼の製造せる帝王神聖説は遠からずして民の忌諱する所となり、終には歴史家の嘲弄物と成つて後世に傳へられるに至ります、羅馬皇帝を神として民に拜ましめし羅馬の政治家の愚と陋とは之を羅馬史上に於て御覽なさい、爾うして斯る愚を演ずる者は二十世紀の今日に於ても在ると思へば、政治家なる者の淺見薄智は實に憐むべきではありません乎、然し神は政治家ではありません、神はイエスの神性を世界に向けて宣言し給ふに方て世の政治家輩が政略的に帝王の神聖を布告するやうな、ソナナ淺臺なる方法を取り給ひません、神は我儕人類に向つて「イエスは神なり、若し彼を神として拜せざれば、我は國賊として爾を罰せん」とは宣はりません、神はイエスなる性格を我儕の前に供せられました、爾うして我儕をして彼を我儕の主として拜せざるを得ざらしめ給ひます、イエスの神性なるものは我儕が自由意志の撰擇を以て、何の強ひらるゝ所なく、何の命ぜらるゝ所なく、唯我儕がイエスを愛するより我儕が自らイエスに歸し

奉つた性格であります、爾うして我儕が斯かる方法を以てイエスの眞性を知るに至らんことは確かに神の聖旨であるに相違ありません、爾うして聖書は斯かる方法を以て我儕を眞理に導く者ではありますまい乎、聖書の所々に謎的の所があるのは、是れ全く賢さを教師が其學生の智能を開発せんとする時に取る方法に類して居るではありませんか、單に聞かされたものが我儕の智識となるのでありません、我儕が自から發見したもの、即ち神の聖靈に由て直に我儕の心に傳へられたもの、それが我儕の永久離すことの出來ない智識となるのであります、斯かる智識を持つてこそ我儕は永生に入ることが出来るのではありません乎、イエスは神なりとの智識は實に貴き智識であります、世に是に優るの智識はありません、爾うして貴い丈けそれ丈け之を發見することが困難くあります、故にイエスは前に述べましたペテロの大表白に對して曰はれました、

ヨナの子シモン、爾は福なり、そは血肉、爾に此事を示せるにあらず、天に在す吾父、此事を爾に示せるなり(馬太傳十六章十七節)

と、私共も亦イエスの神性に關する私共の信仰に就て曰はんと欲します、「是れ我儕が教

師の口より聞きし所に非ず、又教權を握ると自稱する教會の信條に於て學びし所にあらず、又必しも研究の結果、聖書の文字の中より拾ひ集めし眞理に非ず、否な、是れ血肉を透うして我儕が識認するに至りし眞理に非ず、此事を我儕に示せし者は天に在す我儕の父のみ」と。

問、段々の御説明に由り私に於ても大分發明する所がありましたして誠に有難く存じます、尙ほ伺ひたい事もありまするが、今日は聖書のキリスト觀に就ての御解釋はこれにて御止めを願ひまして、餘は聖書以外の證明に就て伺ふやうに致したく存じます。

答、承知致しました、聖書に由てキリストの神性を論じまするのは聖書に由て聖書を證明するやうな心地が致しまして、其六ヶ敷い丈け、それ丈け愉快なる事ではありません、多くの人は自己は聖書を充分に信じないのに、聖書に訴へて私共の信仰を覆さんと致しまする、是れは敵の武器を取て彼を斃す方法かも知れませんが、然りとて又甚だ不心切なる方法であります、キリストを信する者は聖書を信じます、聖書を信する者はキリストを信じます、然るを聖書によつてキリストに對する信仰を毀たんとするのは親に由て

子を殺さんとするが如き措置であります、爾うして私共が彼等の質問を眞面目に受けて一生懸命に成つて之に應へますれば、彼等は終に言ひます、「然しキリストは神である」と云ふ其聖書は信するに足る者である乎」と、實に世の懷疑者程狡猾なる者はありませぬ、彼等は信者を困しめることを以て第一の樂みとして居ます。

問、私に對してならば其御怨恨は御無用であります、私は斯かる邪念を以て今日貴下の御答辨を煩はしたのではありません、然し彼やうなる論者の世に在ることは私も承知して居ります、貴下に於ても充分に御注意なさるが宜うムいます。

答、御同情は誠に有難く存じます、私は彼等には大抵門前拂ひを食はして居ります、博士ジョンソンは彼等如き者を、「嘗て眞理の乳を供せしことなき牡牛なり」と稱ふて居ります、爾うして斯かる牡牛輩が宗教界に大分侵入して居りますことは誠に歎かましい事てあります。

問、それは爾うと致しまして、私は先づイエスの神性が世界の輿論と成つて居ります乎、其事を伺ひたく存じます。

其三 世界の輿論

答、善き問題を出して下さりました、斯かる質問に對しては之に答ふるの充分の張合があります、イエスの神性は之を世界的に攻究して最も興味ある問題となると思ひます。

問、キリストは確かに神として世界一般に認められて居ります乎。

答、私は居ると思ひます、少くとも文明世界がキリストに就て懐く觀念は他の偉人英雄に就て懐くそれとは全く異つて居ると思ひます、文明諸國に於てはイエスキリストの名は異様の敬崇の念を以て迎へられます、キリスト教を信する者と信ぜざる者とを問はず、キリストと言へば是れ神に最も近い者であると思ひ居ります、有識の士にしてキリストを罵る者の如きは紳士淑女の社會には迎へられません、若し彼等の中の或者がキリストは入てあつて神でないと言はふと欲へば特別な意味に於ての人としてのみ彼の人格を主張するに止まります、「イエスは萬民の君主」なりとは文明人種の齊しく唱ふる所でありませまして、斯かる尊稱を受くるに足るの歴史的人物はイエスを除いては他に誰もありません、若し釋迦が亞細亞の光でありますならばイエスは世界の光であります、若し孔子は

東洋の大聖人でありますならば、イエスは人類の教導師であります、イエスの傍に立ちてはソクラテスもプラト人もモハメットもゾロアスターも太陽の前に出た月や星のやうな者であります。

問、然し西洋にも基督教を信じない者はあるてはありません乎。

答、有ります、然しながら有識の士にして信ずる者は信じない者よりも多くして且又有力であります、而已ならず其不信者と稱する者も能く其不信の理由を調べて見ますれば彼等は基督教會と稱する一種の壓制的制度の不信者でありまして、自由の主なるナザレのイエスの不信者でないことが分かります、詩人シェリーの如きが其一例であります、彼は自から稱して無神論者なりと唱へました、然し彼の詩を読んだ者で彼を無神論者の階級の中に組入れる者はありません、彼は無教會信者であつたまでとあります、キリストの謀叛人では斷じて有りません、彼が如き者を不信者扱ひを爲したる英國監督教會の罪は實に大なる者であると信じます。

問、去らば世界第一流の人物はイエスの神格を認めたと貴下は御信じなされますか。

答、私は爾う信じます、勿論私の世界歴史の智識は至て狭いものでありますから、私の知らない世界人物の中に絶對的にイエスを憎み且嫌つた者があるかも知れませんが、然しながら私の知つて居る限りでは偉人と云ふ偉人でイエスを聖ならざる者と認めたる者は一人もないと思ひます。

問、例に依て貴下の偉人のキリスト觀に就て少しく伺ひたい者であります。

答、何處から御話し申して宜いか分かりませんが、唯、今、私の記憶に登る儘を御話し申しますれば第一は大帝ナポレオンであります、彼は自己はシーザー以上、アレキサンドル以上の軍人であり、政治家であると信じて居ましたが、然しセントヘレナ島流竄中、曾て談、偶々古昔の偉人の批評に涉りました時に彼はイエスキリストに就て曰ひました、「我が全盛の時に方では我がために生命を捨てんとせし佛國の青年は幾万もありしも、今や我れ流竄の身となりてより我を願る者一人もあるなし、況して我が死後に於ておや、然るにイエスキリストは彼の死後千八百年の今日、世界各國到る處に彼のために生命を献げんと欲する幾千万の忠實なる兵卒を有す、我の彼に及ばざるや實に遠し云々」と、斯くて

彼れチポレオンはイエスに對しては無上の尊敬を表はしたとの事であります。次ぎは丁瑪の彫刻師トルブルドセンであります、彼の有名なる作は「キリストと其十二弟子」であります、キリストの像を彫むに方て彼は他の批判人を求めんとせず、彫像成りし後に八九歳になりし彼の少女を呼び來りまして、像を指して是れは誰なりやと問ひました、其時少女は其無垢の幼心に正に清淨の主イエスキリストを認めました故に、直に其の像の前に跪き楓の如き彼女の手を合せて、「我儕の主イエスキリストです」と云ひしとのこととあります、此大美術家の心に彫まれしキリストは拜すべき神でありました故に其彫みし像が斯くも無邪氣なる少女の崇拜を惹いたのであります。其次は英國の大詩人テニンソンであります、彼が餘りに思考に富みし故に彼の詩篇は理論に失し易く、爲めに其美を害しましたが、然し天よりの靈想に接して彼が自己を忘れました時には彼は眞個のキリストチャンでありました、有名なる In Memoriam の最始の一句は實に聖書の言にも劣らない天よりの聲でありました、

Strong Son of God,

Thou Immortal Love,

能ある神の子

汝不朽の愛よ

キリストの何なる乎を短かき二行に顯はした言辭で之に優つて莊美なるものは又と再び世に出てまいと思ひます、テニンソンは此一句に於て英民族のキリスト觀を知らず識らずの間に歌つたのであると思ひます。

其他例を挙げますれば數限りありません、世界の最大人物の最大多數はイエスに異様の敬崇を拂つた者であります、若し此事を御疑ひになるならば試みにイエスを主として仰ひだ者を世界歴史の中から引き去つて御覽なさい、歴史は實に淋しい所となります、アウガスチン、シャールマン、アルフレッド大王、アンセルム、ベルナード、ルイテル、サボナローラ、ラフ、エル、ミケルアンゼロ、レムブランド、オレンジ公ウイリヤム、コロムウエル、ワシントン、カント、シェライエルマヘル、ネアンデル、マンドルゾー、……、イエスキリストの兵卒は大軍であります、彼の配下には世界第一流の詩人

も、神學者も、畫家も、音樂者も、軍人も、政治家も、慈善家も、教育家も居ります。爾うして彼等は異口同音に「イエスは榮光の主なり、我儕の靈魂の救主なり、我儕は身も靈も之を彼に獻げて彼の意に適ふことを爲さん」と言ひます。若し眞理は世界有識者の多數の投票に由て決せられるものでありますならば、イエスの神性は確かに動かすべからざる眞理であります。

問、夫れは多分仰せの通りであります。西洋諸國に於てのキリストに對する敬崇は非常のものであると兼ねて聞き及びました。然し私が茲に特に伺ひたいことは貴下御自身も同一の敬崇をキリストに捧げらるゝのであります乎。

答、勿論です。私が基督信者であると云つて世に立つ以上は私に此敬崇の念がなくてはなりません。私はキリストを崇拜し得ないものを基督信徒としては認めません。

其四 心靈の實驗

問、貴下は何に由て斯かる信仰を御懷きになるのでありますか、私の今日まで遭ひました基督信者で貴下のやうにハ、キリと此事に就て告白した者は未だありません、ドウソ貴

下がキリストを神として崇拜なさるゝに至つて其理由と經路とを御聞かせ下さい。

答、私は何にも古代の英雄の信仰に壓伏されて、止むなく此信仰を懷くに至つたのではありません。若し爾うならばソレは私の信仰ではなくして他人の信仰であります。私は亦此信仰が或る有名なる教會の信仰箇條であるからとて其條規に縛られて此信仰を懷くのではありません。御承知かも知れませんが、私は私の信仰の絶對的自由を得んがために教會なる者とは孰れの教會を問はず、何の關係をも持ちません。亦私は必しも聖書が此信仰を傳ふればとて其威權に伏して私の理性に背いて此信仰を懷くのではありません。壓制は何れの方面より來るも吾人の斷じて受くべからざる者であります。偉人も英雄も聖書も、自由意志を有する吾人の靈魂に如何なる信仰をも強ゆることは出來ません。信仰は内より外に向て發する者でありまして、外より内に向て詰込つづこまるべき者ではありません。

問、其點は私も至極御同感であります。斯かる信仰を抱かるゝ貴下より信仰談を承はることは私の殊に望む所であります。

## 答 問 教 督 基

答、私はモウ一つ貴下に申上げて置かなければならない事があります、夫れは即ち私のキリストに對する信仰は私が推理的搜索に由て得たものではないとの事であり、眞理は凡て思惟の稽查に由てのみ得らるゝ者であると思ふのは大なる間違であります、勿論往昔より今日に至るまでキリストの神性に就て幾多の哲理的説明なる者が與へられました然しながら斯かる説明は孰れも不完全極まるものでありまして、誰も之に由てキリストの神性に就て確信に達した者はありません、若しキリストの神性が推理的搜索に由て發見することの出来る者でありますならば、それは僅かに吾人の理性を満足させるに足るだけの眞理でありまして、吾人の全性を感化するに足るの眞理ではありません、神の眞理は背理的ではありませんが、然し超推理的であります、理性以上の機能に由て知ることの出来る眞理でなければ、之を神に關する眞理と云ふことは出来ません。

問、去らば何に由て貴下はキリストの神性を御認めになつたのでありますか。

答、私の全有 whole being に由ります、唯ち私の實在其物に省みて終に彼を私の救主、即ち神と認めざるを得ざるに至つたのであります。

## 答 問 教 督 基

問、それはドウいふ事でありませうか、私には能く分りません。

答、それは私は罪人であるといふことを發見したからであります、私が生來の罪人であることが解つた時に、私は私の理性までを信じなくなり、罪は人の體と心とを汚すに止まりません、彼の理性までを狂はします、生來の儘の人の心を以てしては到底神を見ることは出来ません、彼が神の事を解らふと欲へば全く自己を捨て神の光明を仰がなければなりません。

問、其事は解りました、然しそれでドウして貴下はキリストが神であることを御認めになつたのでありますか。

答、自己の罪を耻ぢ、良心の平安を宇宙に求めて得ず、煩悶の極、援助を天に向つて求めました時に、十字架上のキリストが心の眼に映り、其結果として罪の重荷は全く私の心より取去られました、其時に私は始めて自分らしき者となりました、其れから後と云ふものは私の全體に調和が來りまして、私は其時始めて神の救済とはどんなものであるかと分りました。

問、然ればキリストに關する貴下の御信仰は學理に基かずして實驗に依て得られたと仰せられるのでありますか。

答、爾うてあります、然し實驗とは申すもの、是れは化學や物理學の實驗とは全く性質を異にするものであります、是れは道德的實驗であります、即ち良心の必然的命令に由て自己を糺して見ました結果、自己の神に叛き、幽暗を好むものであることを發見し、此罪人を救ふに足るの救主を求めて、終に茲にキリストに接して、此痛める良心を癒すに足る或者を看出すに至つたのであります、爾うして私は罪とは人に對して犯した者ではなくして、神に對して犯した者であることを知りまする故に、此罪の苦悶を取去て呉れた者は必ず神でなくてはならないことを知つたのであります。

問、御説明に由て問題が益々六々敷くなります、去らば罪の觀念が貴下をキリストにまで驅り遣つたと申しても宜しいのであります乎。

答、爾う申しても宜しからふと思ひます、罪惡問題とキリストの神性問題とは其間に極く緻密なる關係を保つものであります、實に罪の何たる乎を知らずしてキリストの誰なる

乎は到底分らないと信じます。

問、ソレで私には少し分かりました、左すれば貴下は罪とは神に叛くことであると御信じになるのでありますか。

答、爾うてあります、其最も確實なる證據には神の赦免に與かるまでは罪を根本的に絶つことが出来ません、キリストに憑らずして罪を覆ふことも出来ずし、罪を隠すことも飾ることも、宥めることも出来ず、然しながら之を殺すこと、根から絶つことは出来ません、故に罪を發見することはキリストを發見するに至るの途であります、罪に關する淺薄なる思想はキリストに關する淺薄なる思想に導きます。私共はキリストに救はれんがためには神に自己の罪を曝露されて消え入るばかりの耻辱の淵に臨まなければなりません。

問、然らば人がキリストを神なる救主として仰ぎ得ませんのは彼等が自己の罪を覺り得ないからであると申さるゝのであります乎。

答、爾うてあります、彼の傲慢の心であります、我は義人なり、清士なりと稱して自己を



欺く心であります。此心があります間は其人の智能は如何に發達して居りましても、イエスのキリストたることを知ることは出来ません、恰かも榮華が彼の身を纏ふ間は人生の深味を覺り得ないと同然であります。人は先づ謙虛の暗夜に入るにあらざれば「耀く曙の明星」なるキリストを其眞正の榮光に於て仰き見ることは出来ません、其謙虛の井戸の底にまで降つて御覽なさい、貴下も今日只今、彼を主として仰がれ、トマストマスの如くに「我が主よ、我が神よ」と言はれて彼の足下に平伏ひたひたされるてありませう。

問、貴下の論據を其所そこにお据えになりまして、私はモウ貴下に何とも申上げる事は出来ません、茲に至て私は貴下が此問答の始めに於てキリストの神性問題は道德問題であると云はれた其譯わけが解ります、私は今日まで、是れは全く宗教問題であつて、若し論理に循て探究すれば必ず解かるものであるとのみ思つて居りました、然し其れは全く私の誤解であつたことは今に至つて解りました、然し理論でない、道德であると致しますれば、ドウしたならばキリストを知るに足るやうな道德の念を私共の心に起すことが出来ませう乎。

答、其御質問に對しましては私は使徒パウロの言を以て御答へ申すより外はありません、

即ち、人は聖靈に依るにあらざればイエスを主と謂ふ能はず三(コリント前書十二の四)。

問、モウ一つ伺つてソレで今日はモウ御邪魔を致しますまい、貴下の御實驗に由て得られた其御信仰は普通の道理と背馳そむするてはありません乎、若し天父も神であり、キリストも神であると致しますれば、茲に二つの神が出来てくる譯わけでありまして、それではキリスト教の第一の教理が崩れて了うてはありません乎。

其五 推理の無効

答、左様であります、然しながら人は死に瀕して彼に供せられた藥品の治療學上の説明を聞かんとは致しません、彼は直に之を飲みます、爾うして飲んで救はれて其藥品の效能を稱へます、彼は或は病癒えて後に、彼に回生の恩恵を供せし藥品の生理學的作用を究めて彼の心を樂しみますことがあるかも知れませんが、然しながら彼の其藥品に對する信仰は其作用の學理的説明に由て立つのではありません、彼は死より救はれて生に回へりませした故に、其效能の事實に由て其藥品を信するのであります。

罪を知覚せし者がキリストに對して抱く信仰も之と同じであります、勿論キリストの場合に於ては聖書の如き大著述の證明もあります、文明世界の輿論もあります、此點に就てはキリストは今の世に有勝ちな新藥とは違ひます、然しながら是等の説明を綜合致しました所が、彼が實際に人の罪を救ふの能力は、私共が之を自身の心に驗すまでは充分に覺ることは出来ません、爾うしてイエスのキリストたるは「彼の血を飲み彼の肉を食つて」(ヨハネ傳六章五五節)而して後始めて覺ることが出来るのであります、此實驗を經過せずして如何に大なる神學者と雖も、キリストの神性を了解した者はないと思ひます、パウロも、アウガスチンも、ルーテルも、ウエスレーも、皆起死回生の實驗に由てイエスの主たることを知るに至つたのであります。

爾うして斯様にしてイエスを神なりと認められた以上は如何して一つの神が二つである乎、或は三つである乎、何故子なる神が父なる神に祈つたか、爾ういふ問題は全く度外視されるに至るのであります、即ちカント哲學の術語を藉りて言ひますれば、此場合に於ても、多くの他の場合に於ての如く、實際的眞理 (Practical Reason) が論理的眞理 (Theoretical Reason) に勝つたのであります、何故かは私共には分りませんが、然しながら若し爾うでなければ私共の靈魂は—爾うして靈魂と共に私共の理性も—死なければなりません、兩理相反 (antinomy) の疑問は其儘に存じて居ります、然しながら斯かる場合に於ては私共は事實を取て論理を棄つるのであります、爾うして斯かる場合に於て斯くするは亦私共の理性が私共に命ずる所であります。

然しながら是より以後は三位一體論に入るのではありませんから今日は之れて御免を蒙ります、サヨナラ。

第三席

聖書は果して神の言なる乎

其一 聖書の眞價

問、貴下は聖書は神の言であるとも信じなす乎。

答、爾うてあります、私は爾う信じます、私は三十年餘り此書を読み続けまして益々その神の言でなくてはならないことを信じます。

問、然らば貴下は聖書は一言一句、誤謬なき神の言であるとも信じなす乎。

答、爾うてあります、或る意味に於ては私は聖書の辭句的インスピレーションを信する者であります。

問、或る意味にてと仰せらるゝのは如何いふ意味でありますか、貴下は聖書に記してあることは何んでも動かすべからざる眞理であるとも信じなす乎。

答、爾うてあります、神に關すること、人に關すること、罪に關すること、救済に關すること

ことに就ては聖書は最終の憑典であると思ひます、此書に據らずして人は何人も神の救済に與かることが出來ないと堅く信じます。

問、然らば貴下は聖書に記してある科學上の事實や又は歴史上の事實は、之も亦悉く信するに足るものであるとも信じになるのであります乎。

答、或る意味に於ては爾うてあります、或る他の意味に於ては爾うてありません、聖書は宗教の書であつて科學や歴史の書ではありませんから、聖書の記事は宗教的には全く信憑すべきものであります。

問、宗教的には信すべきであるとは如何いふこととあります乎、宗教的事實であることは必しも科學的には事實でないとの事とあります乎。

答、爾うてあります、物には總て宗教的の意味が存して居ります、爾うして事物の宗教的意義を示す上に於ては聖書は少しも誤りません、其意味に於ては聖書は誤謬なき神の言であります。

問、今、試に創世記第一章にある世界創造の記録を取て見まして、貴下は其中の何れ丈けが信憑すべき神の言であるとも信じなされるのであります乎。

答、其全躰であります、即ち宇宙萬物は決して獨り自から生じたものではなくして、絶對的意志を有し給ふ全智全能の神が創造り給ふたものであるとの事であります、創世記の此記事は此肝要なる宗教的眞理を傳ふるものでありまして、夫れが故に萬世不朽の神の言であります。

問、然らば貴下は必しも聖書の此記事を取て近世科學の結論と調和しやうとは努められませんか乎、貴下は若し聖書の此記事が近世科學に由て爆撥せられても聖書に關する貴下の御信仰は動きません乎。

答、何にも聖書の此記事が近世科學に由て爆撥されやう等はありませんが、若し聖書が古昔のプトレミイの天文書や、プリーニの博物書のやうな者であつたならば日進の科學の發明に依て破壊される乎も知れませんが、然しながら靈なる神と物なる宇宙との關係を示

した聖書の此記事が如何に科學が進歩すればとて破壊されやう等はありませんが、「元始に神、天地を創造り給へり」、如何なる哲學者でも、如何なる科學者でも、聖書の此宣言を拒むことは出来ません、ニュートンも斯く信じました、ダーウキンも斯く信じました、スペンサーも或る意味に於ては斯く信じました、物質は其れ自身を造つた者であると信する大哲學者のあつたことを私は未だ會て聞いたことはありません。

問、然らば科學的事實に就て聖書が如何に荒唐無稽を唱へやうと貴下は必氣に掛けられませんか乎。

答、「荒唐無稽」とは甚だ不穩當な言であります、聖書は眞面目な人に由て眞面目に書かれたる書でありますから、科學的に正確なる書であるとは言はれませんが、然りとて支那、日本、埃及、バビロンの古書に記してあるやうな事實と全く離れたる事を録しては居りません、聖書の世界開闢説なるものは其始めて録された時代より考へて見ますれば實に驚くべき記事であります、聖書は天神が天の瓊矛を持ちて滄海を探り、鋒滴凝結して一島を成したと云ふやうな全く神話的の記事を掲げません、聖書の開闢説は合理的であります。

す、其書かれし時代に在ては最も進歩したる科學說として目せられたものであつたに相違ありません、試に考へて御覽なさい、我神武天皇紀元前千年頃に既に已にラマーク、ダーウキンの唱へし進化説を豫表したる此宇宙開闢說が世に唱へられしことを、今の青年輩が少しく近世科學の片端を嚙りたればとて聖書の記事に對して迷信呼ばりの聲を發するのは片腹痛いことではありませんか、若し彼等の父や祖父が宇宙に就て如何なる觀念を懷いて居つたかを善く考へて見たならば彼等は此太古の莊嚴なる開闢論に對して非常なる尊敬を表すべきであります、私は信じて疑ひませんが、若し今より百年前に於て、日本國の東京に於て四千年前のモーゼの創造說が唱へられましたならば（其古說なることを表白することなしに）、日本國の學者達は是れは新說なりとか、又は異端なりとか稱して之を迎へたであらふと思ひます、聖書は科學の憑典ではありません、然しながら其專門以外の事であればとてトんでもない荒唐無稽を傳へません、聖書に依て科學を學ばんとする者は誤ります、然りとて聖書を科學と全く關係のないものであると思ふ人は更らに誤ります、聖書は宇宙の創造られし目的と、其今日存在する理由とを示す者であります

して、科學攻究の精神を供する者であります。

問、然らば貴下は聖書に科學的誤謬のあるのを御認めになるのであります乎。

答、認めるも認めないもあつたものではありません、爾んな事に心配して聖書の眞理は探られるものではありません、貴下は山邊赤人の「田子の浦」の歌を誦まれる時に富士山の地質學的構造に就て考へられますか、貴下は藤田東湖の正氣之歌を吟ぜられる時に見島高德に關する歴史的考證に就て彼れ是れ非難せられますか、若し爾うなさるならば赤人も東湖も貴下に對しては何の貴い眞理をも傳へません、富士山の地質學的構造を正確に傳ふる者にあらざれば富士山に關する總ての美しき思想を傳ふることは出來ないと信ずる者の如きは、それこそ偏狂學者でありまして、迷信家に劣らざるの愚かなる者であると思ひます、聖書とても爾うてあります、神と世界との關係を示すのが其目的であります、爾うして若し此目的に違ひませなければ聖書の神の言たるは證明されるのであります。

問、甚だ失禮なる申分てありますが、貴下の御説明を聞きますと、貴下は何やら科學者

の追窮する所となりて、止むを得ず種々の辭柄を設けられて、御自説を曖昧の中に隠さるゝやうに感ぜられます、それは如何なるものであります乎。

答、イエエ、決して爾うではありません、聖書は雲の上に築かれた高樓のやうな者ではありません、聖書は或る毀つべからざる事實の石礎の上に立つ者であります、顕微鏡と望遠鏡との觀察の上に其基礎を置かざるとも、而かも之より更らに確かなる事實の上に其根底を定むる者であります、即ち吾人の自覺を根據として立つものであります、その證據には科學科學と云はれて何事も科學に由らなければ分らないやうに唱へられる貴下ですら、愛するとか、憎むとか、敬するとか、賤むとか稱ふ情性を有たれまして、科學の證明以外の事を爲されます、且つ又貴下は科學に由て世に勝つことは出来ません、利慾の念は科學よりも強くあります、爲めに科學者にして其科學を善のために利用せずして惡と己の利益のために使用する者は今の世に在ては比々皆な然りてはありません乎、而已ならず、科學者の多數は利慾は生物進化の唯一の源動力であると唱へまして、人に「利慾の神聖」を教ゆるのみならず、自己も亦此教義を身に體して恬として耻ぢないでは

ありません乎、世に勝つるの能力、慾念の罪惡、無私の神聖、是亦大なる事實ではありませんか、聖書は斯かる大事實に就て論ずる書であります、岩片の顯微鏡的攻究は之を礦物學者に委ねます、解剖刀を以てする死躰の分解は之を解剖學者に委ねます、古文の文字的考證は之を考古學者に任せます、然しながら人の性格に關し、神の愛に關し、罪の赦免と清き良心の新造に就ては是れ聖書の占有する特別の領分であります、爾うして私が聖書が誤謬なき神の言であると言ひまするのは、此廣大無邊なる領分内に於て爾うであると言ふのであります。

問、御説明に依て稍々貴下の御論據が分りました、亦、私に於ても大に發明する所があらまして眞に有難う存じます、聖書は世界並に人生に關する宗教觀であると解しますれば、御説の通り聖書に關する多くの難問は解かれます、然るに今日までの所では宗教家といふ宗教家は皆な聖書は宗教以外に於ても最上の教權を握る者であるやうに説かれたものでありまするが故に、其反動として世の學者が之に對して痛き攻撃の鋒を向けたのでありませう、然し宗教は宗教、科學は科學と致しますれば、それで二者の平和は結ばれた

のでありませう。

第三席 聖書は果して神の言なる乎

答、爾うであります、然しながら茲に一つ注意すべきことがあります、斯くて結ばれたる二者の間の平和は世に謂ふ所の敬して遠ける的の平和であつてはなりません、若し問題の高下より曰ひますれば宗教問題は何人に取りましても、然り、科學者に取りましても、遙かに科學問題の上に立つべき者であります、斯く云ひて勿論、宗教家は科學者以上の人物であると云ふのではありません、然しながら身體は衣よりも優るやうに靈は身體よりも優ります、隨て宗教の科學に優る問題であることは明白であります、爾うして凡の大科學者は宗教に對して常に此態度を取りました、ニュートン始め、ハムフレデー、フハラデー、近くは先頃世を逝られましたスペンサーに至りますまで、皆な此態度を取りました、彼等の偉大なりし理由は彼等の學の蓄積の大なりしよりも寧ろ彼等の品性の高かりしに由るのであります、神を嘲けり、道徳を嘲けり、宗教を嘲ける科學者は極く小なる科學者であります、彼等は壁に延蔓る蘇の構造を知る乎も知りませんが、全宇宙が來て彼等に使事するの大快樂を感じ得る者ではありません、世界と人生とを聖書的に解

して、即ち聖書が解するやうに之を解して、我等は神の小供となると同時に亦宇宙の主人公と成りまして、隨て我等の究むる科學にも眞正の興味が生じて來るのであると思ひます。

其三 聖書と歴史

問、聖書と科學との關係は御説の通りであると致しまして、聖書と歴史との關係は如何なるものであります乎、若し聖書は科學の書でない致しまするも、之を歴史の書と見ることは出来ません乎。

答、是れ亦、至つて面白い、且つ大切なる問題であります、永の間聖書の科學的正確を辯護せんとして返て失敗に終つた基督教學者は今に其歴史的正確を證明せんと努めつゝあります、然し是れ亦非常の難戦であることは私の茲に貴下に申上げて憚らない所であり、今や所謂「高等批評學者」なる者が出まして、聖書の記事を縱横傲座に批評し、始めにアブラハムを取去り、次にモーセを縮少し、今はパウロ、ヨハネまでを半殺になさんとしつゝあるのは事實であります、何れの時代に於ても聖書の荒亂者なる者があり

第三席 聖書は果して神の言なる乎

ます、爾うして、今の時代に在ては此荒亂者は自から「高等批評學者」と稱ふる者であります、爾うして彼等が荒亂のために採る武器は歴史であります、彼等は歴史的に聖書を覆滅して其覆滅を完うせんとしつゝあります。

問、爾うして彼等は其覆滅の事業にドレ丈け成功致しました乎、彼等は實に聖書は歴史的には全然信憑するに足らざる書であることを證明致しましたか。

答、批評學の戦争尙ほ酣なる今日、勝敗は何方に歸する乎、未だ斷言は出来ません、然しながら戦闘未だ終結を告げざるに、既に己に和解の曙光は天の一方より出来つたと思ひます、それはカントの智識論とそれを根據として起つた近世の心理學であると思ひます、若し一切の智識が批評的解剖に由て得られるものでありますならば、或は此戦争は批評學者の全勝に歸するであります、然しながら今や人の理性に理而上的機能の存することが愈々明白となるに至りまして、批評學者も大分其鋒を收めなければならぬやうに成つて來ました、私の考へまするに高等批評なる者の聖書の分解も今日が其絶頂であらふと思ひます。

問、然らば聖書は何れ丈け歴史的に信憑するに足りず乎、イスラエル民族の出埃及の事蹟、キリストの奇蹟、復活、昇天等は今尙ほ事實として是認すべきであります乎。

答、勿論何れ丈けと限ることは出来ません、然しながら基督教が歴史的宗教であります、が故に、基督教の根本的教義を壊はす丈けの實證が擧りました時には基督教は其存在の基礎を失つたと云はなければなりません。

問、爾うして貴下は未だ斯かる實證は擧らないと御信じなされるのであります乎。

答、爾うてあります、批評學者が今日まで提出したる論定の中に基督教の根本を毀つに足る丈けの者は未だ一つもないと思ひます。

問、然し批評學者の方から云へば爾うは云ふまいと思ひます、彼等は歴史としては聖書は徹座に毀たれて了つたと言ひませう。

答、爾うかも知りません、然しながら聖書の歴史的事實に關しては證據も反證も半々であります、イスラエル民族の紅海横斷に關する奇跡的事蹟の如き、之を是とするの實證も未だ發見せられなければ、又非とするの實證も擧らないのであります、只、詰る所は事



基 督 教 問 答

蹟の蓋然性プロバビリティの問題であります。信者は斯かる事は有り得ることであると信じ、不信者は有り得べからざることであると信ずるのであります。爾うして有り得べしと信ずる者は有りしと云ふ證據を求めんと欲し、有り得べからずと信ずる者は有らざると云ふ證據を見附けんと欲するのであります。爾うして今日目下の事ですら人事に關する事實有の儘を究むることの甚だ難いことを知り得る者は今より四千年前の事を細密に知ることの到底出來ないことを能く解します。若し基督教が歴史的宗教であること云ふ譯から歴史の證明を得るに非れば之を信ずることが出來ないと云ひますならば世に眞面目に基督教を信ずる者は一人も無くなる譯であります。私は基督教を轉覆するやうな歴史的事實の擧ぐる時は未來永切決して來ないと思ひます。何故となれば基督教は過去の事實よりも寧ろ今の事實に由て立つ者でありますから、何か非常の能力が顯はれて今の事實を毀つなら以上は歴史家の攻擧は如何に激しくとも基督教は痛痒を感ずること至て尠くあります。問、若し爾うならば批評家の攻撃なるものは至て詰らないものではありません乎。然るに之に遭ふて何故に基督教信者は非常に狼狽致しました乎。

基 督 教 問 答

答、彼等の信仰の薄い餘り、彼等が深い自己の實驗に頼らずして、淺い且つ危い過去の傳説に頼つたからであります。故に神は批評學者なる近世的の荒亂者を送り給ひて是等偷安の教會信者の信仰を毀し給ふたのであります。是れは實に感謝すべきであります。問、茲に至て問題は全く重心の地位を變へて來ます。若し基督教は主として今の宗教であるので過去の宗教でないとの事でありませうならば、歴史的攻撃は全く其功を失ふに至りまするるのは、尤のこととてあります。然らば貴下は聖書が萬一歴史的に全然毀れやうと基督教は存在すると御信じなまします乎。

答、爾うてはありませぬ、亦前にも申上りました通り斯かる破壊の來りやう等はありませぬ。何故なれば今日私共基督教信者が實驗する事が事實であります以上は聖書に書いてある之に類したる事柄は少くとも其大體に於ては必ず事實でなくてはならないからであります。私共は私共が見たこともない、聞いたこともない事柄を聖書に於て讀むのではありません。私共は今より推して古へを量るのではありません。基督教信者に取りましては聖書の記事の重要な部分は總て爾う有るべしと云ふ意はるゝ事でありませぬ。

問、爾うすれば貴下は死者の復活を目撃せられたと仰せられるのでありますが、勿論爾うてはありますまい。

答、爾うてはありません、然し、死せる肉躰の復活よりも更に驚くべき復活を目撃したのであります。

問、それは何んな復活でありますか。

答、靈魂の復活であります。

問、然し靈魂と云ふやうなそんな漠たるものゝ變化を取て、それを現然たる肉躰の變化に應用することは出来ません、是れは論理學に所謂 *Ab absurdo* 即ち背理より道理に達せんとする論鋒てはありません乎。

答、其れは爾うてはありません、靈魂の事は決して漠たることではありません、若し其事を御疑ひになりまするならば貴下御自身其事を御試験なさることが出来ます、若し貴下が貴下の年來の警敵を今日直に快く赦すことが出来ますならば、又は貴下の最も愛するものを國のために又は人類のために、何の惜氣もなく献ずることが出来ますならば、貴

答 問 教 養 基

下は實に神の如き者であります、特に若し貴下の成育されし家庭が決して善良のもてはなくして、貴下の若き心の中に凡ての悪念が注入されしにも關はらず、若し一朝に或る奇態なる感化力に由て、貴下の心より、豹の皮より其斑が取除らるゝやうに、罪念が根こそぎ取去られますならば、貴下は必ず是れ天然以上の力であると仰せられるに相違ありません、自己に此事を實驗した者は誰でも申します、死んだ靈魂を甦へらする事は死んだ肉躰を甦へらする事に優るの大困難であると、爾うして私共は各自此奇蹟を實驗して居りまする故に肉躰の復活を聞いても少しも驚かないのであります。

問、爾う致しますれば其靈魂復活の實驗なしには聖書の歴史的事蹟は之を事實として信ずることが出来ないかと仰せられるのであります乎。

答、爾うてあります、歴史的證明は如何に強くとも私共は之は由て私共の經驗以外の事はどうしても信ずる事は出来ません、己れ自から奇跡を施されたものでなければ如何なる大學者が如何なる重き證據を擧げて私共を説服せんと致しましても、私共は之を信ずることは出来ません、信仰は我が全性の允許であります、より強き證據に對して智識的承

答 問 教 養 基

認を興ふることはありません。

問、茲に至りて私共宗教門外漢と貴下方信者と到底推論を續けることの出来ないことが分りました。然しながら貴下にも充分なる論據のあることは私も十分に認めます。成程仰せの通り若し吾人の智識論が確定し、心靈的實驗なるものは確かめ得べき心理學上の事實であることが解りますれば、それで聖書の歴史的證明なるものは殆んど用なきに至るのでありませう。且又斯く定つた以上は聖書の記載する事蹟に就て強大なる歴史的證據が供せられました。信者の信仰を一層強くするに至るかも知れません。

答、それだけ御承認下されますれば私も大満足であります。

其四 聖書と道德

問、聖書は科學でもない、歴史でもないと思はれますれば、之に科學上、又は歴史上の缺點があると思はしても、その信憑すべき書なる事の説明はつきますが、然し宗教の書として之に道德的の缺點のあることは許せまいと思ひます。然るに聖書を繙きますれば所々に此缺點があるのはドウいふ譯であります乎、即ち撒母耳前書十五章の三節に神が

サムエルを以てイスラエルの民に命じ給ひし言辭に斯ういふ事があります。

今、行きてアマレク人を撃ち、其有てる物を悉く滅し盡くし、彼等を憐む勿れ、男、

女、童稚、哺乳兒、牛、羊、駱駝、驢馬を皆な殺せ。

其他之に類したる言辭は聖書の所々に見當ります。貴下は之をしも神の言として見らるるのであります乎。

答、それは随分強い御詰問であります。それに對する辯明は今日まで幾個も提供されました。私は今茲に二つの觀察を呈しまして貴下の御參考に供しやうと思ひます。

(一)、斯かる殘酷なる宣言と同時に時代不相應の高潔なる道德の舊約聖書に示さるゝこと、即ち利未記十九章十八節にある

汝、仇を復すべからず、汝の民の子孫に對ひて怨を懷くべからず、己の如く汝の憐を愛すべし。

是れ實にキリストの福音に多く劣らない者であります。殊に同じ利未記の第十八章の如きは其當時の社會道德として實に純潔なるものでありまして、日本國今日の社會道德と

ても迎も之には及びません、其當時の道德として考へて見ますれば舊約聖書の示す道德は比較外に高潔なるものであります、其當時のバビロン、カナン、エジプトの道德を知るにあらざれば舊約道德の神聖は解りません。

(二)、貴下は驚きなさる乎も知れませんが、聖書は道德の書でもありません、即ち所謂純正倫理を吾人に傳ふる書ではありません、聖書より道德的組織を編出すとは出来ません、然し聖書は道德組織ではありません、聖書は人が道德の本源なる神に到るの道を示す書であります、故に其人の道德的程度に循つて神の眞意を彼に傳ふる者であります、聖書に奴隷を廢止せよとは書いてありません、故に或人は聖書は奴隷制度を許す者であると云ひます、然し決して爾うてはありません、聖書は人の神の子たることを教へて奴隷制度の土臺を毀しました、聖書は戦争の廢止を強ひません、然り、或る所に於ては之を奨勵して居るやうにも見えます、然しながら聖書は人命の貴重なる理由を教へて戦争をして在るべからざるものとなしつゝあります、聖書は道德の原理を教へます、其形式を教へません、其事其れ自身が聖書が神の言たる證據となるてはありません乎。

其五 砂礫の福音

問、其説明は其御通りであると致しまして、茲に私が聖書の全軀を神の言として受取れない一つの事があります、それは聖書の或る部分は實に乾燥無味の記事でありまして、若し是が天よりの聲であるとならば小川に轉ぶ礫も神の言てなくてはなりません、私は聖書の中に神の言のあることを信することは出来ませんが、聖書全軀を爾う認めることは出来ません。

答、御説御尤であります、利未記に於ける犠牲に關する精細の記事の如き、歴代史略に於ける十一章に渉る人名録の如き、以西結書に於ける聖殿構造に關する細目の如き、如何にも乾燥無意味の事項のやうに見えます、然しながら深く聖書を研究した者は是れあるが故に聖書の神の言たるを拒みません、否な、返て是れあるが故にその神の作たるを信じます。

問、それは何ういふものでありますか。

答、貴下は此地球が神の作り給ふたものであることを御信じなす乎。

問、勿論信じます。

答、若し爾等ならば聖書も此地球と同じこととあります、此地球は耶馬溪や松島ばかりではありません、其中には漠々たる沙漠もありますれば茫々たる大洋もあります、然し能く考へて見ますれば此地球の美は其全体に存して居るのであります、其常に美を以て稱せらるゝ小部分に存して居るのではないことが分ります、聖書も同じ事とあります、其美と完全とは山上の垂訓や哥林多前書十三章の愛の賞讃の辭に於てばかり存して居るのではありません、馬太傳一章のイエスの系圖も確かに福音の一部分であります、黙示録廿二章の天の石垣の描寫も亦希望の新約の一部分であります、基督教の精神は犠牲と贖罪とにあります、是れを最も細密に教ふるものは舊約の利未記であります、又基督教の大切なる教義の一つは豫定又は聖別であります、爾うじて歴代史略の永々しき人名録は撰民の系圖を委びて述べた者であります、小川の岸に轉ぶ小石の天然の美を認め得ないのは見る人の無學に由るのであります、其様に聖書の乾燥と見ゆる記事の中に神の眞を發見し得ないのは是れ亦讀む人の無學に由るのであります、之を神の靈に由て解釋

基 督 教 問 答

して御覽なさい、石も花となりて咲いて來ます。

其六 インスピレーション

問、抑々インスピレーションとは何ういふ事とありますか、是れは所謂る天來の思想に接するといふ事とありますか。

答、それもインスピレーションの一種であるに相違ありません、然しながら聖書のインスピレーションなるものはモット、ズーッと深いものであります。

問、聖書のインスピレーションとは何ういふ事とありますか、お聞かせ下さい。

答、聖書のインスピレーションとは神の靈が人の靈に降て之を活潑せて事を爲さしめると云ふ事とあります、是れは單に思想を傳ふるといふに止まりません、亦機械的インスピレーションと稱して、之に接した者は自覺を失ひ、己れ知らざる間に神に依て語り、又は書いたと云ふやうな事でもありません、人間は神の機械ではありませんが、然し神は人間を吾人が機具を使ふやうには使ひ給ひません、インスピレーション inspiration は即ち in-spiration でありまして、靈が入來るとか又は靈を吹入れる (in-breathing) とか

基 督 教 問 答

云ふこととあります、爾うして聖書は聖靈の斯かる發動に由て書かれたものであります、同一の聖靈が豫言者エレミヤに降つたのであります、イザヤに降つてイザヤ書がなつたのであります、同一の聖靈が異様の人に降つて同じ精神を傳ふる異様の言が出たのであります、聖書の聖書たる所以は全く此一事に在ります、人が書いたものではありまするが、人が自分で書いたものではありません、然りとて他の者が来て手習師匠が子供の手を取て字を書かせるやうに、使徒や豫言者の手を取て否諾なしに書かせたものではありません、神の靈が人の靈に降つて、人をして自由に書かせたものであります。

問、爾ういふ事は出来るものでありますか。

答、出来るものであります、靈が靈に加はる時には火に油を加へたやうなものであります、同じ火が急に其光と熱とを高めます、靈は相互に合一することの出来るものであります、爾うして人の靈と神の靈とは其間に量の差と清濁の差とこそあれ、質の差はありません、故に神の靈が人の靈に臨みます時は人の靈は急に聖く成り、且つ非常に活力を増して來

ます、爾うして其結果として彼の草する文も、彼の語る言も一種異様の能力を帯ぶるに至ります、爾うして聖書の言は斯かる言であります、人の口と手とを通うして來た神の言であります、之に人間的の所があるのは人間を以て書かれたからであります、然し、活神的の所があるのは神が書かした言であるからであります、爾うして此特性は聖書を終始一貫して居ります。

問、然し同一の事は聖書以外の書に就ても云へるではありません乎、ダンテの神曲、ミルトンの失樂園、是れ又一種のインスピレーションではありません乎。

答、爾うてあります、然しダンテもミルトンも聖書に依て神の靈に接した者であります、今日と雖も我等とても直に聖靈の降臨に與かることが出来ます、故にインスピレーションは聖書に限るとは勿論言へません、然しながら聖書は亦特別な意味に於て神の書であります、即ち神がまだ廣く異邦人に聖靈を注ぎ給はざる時に其降臨を受けた人の爲した事を同じ恩恵に與かつた人達が書いたものでありますから、電氣學の語を以て云ひますれば、聖書に蓄電されたる靈氣は甚だ濃厚であります、聖書は他に抜んで、特別に

聖靈の書であります、故に後世、之に接觸せずして聖靈の著しき降臨に與かつたものはありません、ムーデー氏は度々曰ひました、「余は聖書は聖靈の書なるを知る、そは之に由て聖靈余に降ればなり」と、爾うして是れ何人に限らず、近く聖書に接觸した者の實驗する所であります。

問、有難うございます、大分善く分りました、尙ほ重ねて伺ひますが、聖靈は人に降て其感能を強くするのみでありますか、又はそれと同時に新たなる真理をも人に傳ふる者であります乎。

答、哥林多前書二章の十節以下に斯う書いてあります、

聖靈は萬事を究知り、又神の深事をも究知るなり、それ人のことは其中にある靈の外に誰か之を知らんや、此の如く神のことは神の靈の外に知る者なし。

神の事を知らんと欲せば、殊に神の心を知らんと欲せば、神の靈に由るより他に途はありません、聖書は神の精神をのみ傳ふるものではありません、人類の救済に關する神の大なる事業に就て示す者であります、目、未だ見ず、耳、未だ聞かず、人の心、未だ念

はざる事を傳ふる者であります、是事を稱して黙示と云ひます、黙示は事實的インスピレーションであります。

問、聖書は神の真理を傳ふる書なるが故に神の書であると云ふ事は解りまするが、それが故に聖書の文字までが神の屬であるとは如何しても受取れませんが、如何ですか。

答、貴下は文章を書かれたことがありませう、其時貴下は思想と文辭とを區別することが出来ますか、眞正の文章は生物のやうなものであります、其生命と肉體とを別つことの出来るものではありません、思想は文章の生命でありまして、文辭は其肉體であります、二者同一物でありまして一は他を離れて存立する者ではありません、聖書は神の言であります、神の思想が神の文字を以て顯はれた者であります、成程文字其物は人の造つたものでありませう、然し其人間の造つた文字が聖靈の埒場の中に鎔解されて、新たな鑄型の中に注込まれて出来た文字であります、私は勿論此神造の文字が今日まで何の缺損なしに傳はつたとは言ひません、然し今日尙ほ存して居る所の其形から推測して見ても、其決して尋常普通の文字でないことは能く分ります、茲に於てか聖書を原語

其儘に於て研究するの必要が起きて來るのであります、聖書は最も翻譯し易き書であります、然し如何に善き翻譯でも原文に及ばないことは勿論であります、詩人カウバの牧師なりし、ニートンと云ふ人が希伯來語を稱して「神の言語」なりと云ひましたのは決して迷信ではありません、神の直接なる深き感化を受くるに非ざれば斯かる簡潔にして力強き言語は決して起らなかつたと思ひます、モーゼの十誡を原語の希伯來語に讀んで實にそのシナイ山を轟かした言辭であつたことを覺ります。

問、爾う御説明になりましたして聖書の如何に貴き書である乎が察せられます、然し、斯かる貴さは私の到底想像することの出來ない所であります。

答、爾うであります、聖書が神の言たるの實證は之を一つの古典として攻究した位ひて分かるものではありません、之を數十百回讀するのは勿論、其教訓を自己の身に實行して見て始めて其神の言なることが分かるのであります、イエスは白されました、

人、若し我を遣し、者の旨に従はば、此教の神より出るか、又己(人)に由りて言ふなるかを知るべし(約翰傳七章十七節)。

詰る所、聖書が神の言たるを識るの途は唯是れ一つであります、聖書の言に貴下の良心を照らされて御覽なさい、其罪の詰責に遭ふて御覽なさい、爾うして終りに其救ひに與かつて御覽なさい、貴下は其、誠に實に神の言であることを信じなされるに至りませう、私が今日申上りたい事は是丈けてあります、サヨナラ。

天地の廢るは律法の一畫の癢るよりも易し(路可傳十六章十七節)。

それ人は既に草の如く、其榮は凡の草の花の如し、草は枯れ、其花は落つ、然れど主の道は窮なく存つなり、爾等に宣傳ふる福音は乃ちこの道なり(彼得前書一章廿四、廿五節)。



第四席

三位一躰の教義

其一 余は斷じてユニテリアンに非ず

問、基督教に三位一躰と云ふ事があるさうですが爾うてあります乎。

答、有ります。

問、それは何う云ふ事てあります乎。

答、それは神は一つである、然し單獨(unity)ではない、彼は三つのペルソナ(persons)として存在する、然かし三つの異つた神があるのではない、父、子、聖靈各神であつて、爾うして神とは此の三位の一致したる者(unity)であると、斯う云ふ事てあります、(ペルソナの解釋は後で致します)。

問、私には込入て少しも解りませんが、今日でも爾う云ふ事を信じて居る者があります乎。

答、有ります、私も爾う信する者の一人であります、私は確かに世に謂ふ唯一神教者即ちユニテリアンではありませぬ。

問、神は一つである、然かし三位である、然かし三つの神があるのではないと、夫れは全く解し難い事てありまして、私には此點に於てはユニテリアンの信仰の方が優に單純で且つ理に合ふて居るやうに思はれますが、如何です乎。

答、左様であります、ユニテリアンの信仰の方が單純で合理的である乎も知れませぬ、現に近頃私の知つて居る或る有名なるユニテリアンの教師先生が私共の前で「我等ユニテリアン教徒は三位一躰と云ふやうなそんな馬鹿氣切つたる事を信じない」と申されました、又近頃では自からオルソドックス(正統派)であると稱せられる人々の中でも、イエスの人格であるとか、社會救済であるとか云ふ事に重きを置かれました、三位一躰の教義の如きは全く度外視され、斯かる信仰は懐くも棄つるも基督教の信仰には何にも關係がないなど云ふ人が澤山居られます、然かし私は爾うは信じないのであります、私は三位一躰は基督教の教義の中で最も大切なるもの、一つであると信するのてあります、斯く

信ずるのは勿論、或る外國宣教師を歡ばせんとするからではありません、斯く信ずるも信ぜざるも私の身に取つては何の利益も損害もないのであります、前にも曾て申し上げました通り、私は私の信仰の絶對的自由を守らんがために世の教會なるものとは何の關係をも有たない者であります。

問、兼ねて爾う承け玉はりました故に私は殊更らに此點に關する貴下の御信仰に就て伺ひたく思ふのであります、只、私の如何しても解りませんとは、近世教育を受けられ、且つ理學の御嗜好ある貴下が三位一跡と云ふやうな、私供の眼から見ますれば全然不合理なる事を眞面目に信ぜられると云ふ事であります。

答、御懷疑は御尤であります、私自身とて一朝一夕にして此信仰に達した者ではありません、私も事物の單純を愛する者でありますから、若し唯一神説が私の心をして満足せしむるに足る者でありますならば、私も速くに之を信じたであらうと思ひます、然し三位の神を信ずるにあらざれば私の理性も心情も平穩なる能はざるが故に竟に今日の信仰に至つたのであります、故に此大問題に關する御質問の廉々に對しては私の出來得る限り

の力を以て之に應じたく欲ひます、然し問題は至て廣闊くありますから御質問は成るべく簡潔に願ひます。

問、承知致しました有難うございます、それでは先づ伺ひますが、基督教の聖書は確かに三位一跡の教義を掲げて居ります乎、私はユニテリアンの教師の口より聞きました、又其著書に由て讀みました、聖書は斯かる事に就ては沈黙である、是れは後世の基督信者の迷信に成つた教條であるとのこととありますが、それは如何いふものでありますか。

其二 聖書に顯はれたる三位一跡

答、御尤の御質問であります、私もユニテリアンの人々より度々斯かる質問を受けました、爾うして私も一時は非常に迷ひました、然し聖書の研究を続けるの結果、今は其迷誤は解けました、彼等の曰ふ所を貴下の御懷疑として一々述べて御覽なさい。

問、ユニテリアンは申します、聖書中、三位一跡を明白に指示して居る所は唯一箇所しかない、それは英譯聖書の約翰第一書五章の七節であつて、それを和譯すれば、天に在て證をなす者は三なり、父と道と聖靈となり、而して此三つは一なり。

となることとあります、然かし三位一跡論者が金城鐵壁として頼りし此一節は近世批評學の解剖刀に由て聖書中に存在すべからざるものとして其中より切取られたさうであります、爾うして現に改正英譯聖書には此一節が刪つてあることは私の承知する所であります、貴下は其事を御承知であります乎。

答、承知であります、私はユニテリアンの先生方が、今日に至るも尙ほ此事柄を取て三位一跡説の攻撃 材料に使はるゝ事を常に怪んで止みません、爾うして是れは日本のユニテリアン教徒に限りません、學術進歩を以て誇る新英洲に於てすら、歴々のユニテリアン學者が此古き舊き材料を引いて三位一跡説を嘲けりつゝあります、是れは實に奇態なこととあります。

問、されば三位一跡の教義は此疑はしき一節の上に掛つて居るのでないと仰せられるのであります乎。

答、勿論です、此一節の疑しいものである事は早くより聖書學者の中に解つて居りました、故に近頃或人が或るユニテリアンの博士の攻撃に答へて申しました、「過ぐる百年間、名

を知られたるオルソドックス派の神學者中、此一節に據て三位一跡の信仰を唱へし者なし」と、私も爾う信じます、又ユニテリアンの中でも公平なる聖書學者エヅラ、アボット氏の如きは明白に三位一跡の教義の此一節と浮沈を共にする者でない事を唱へて居ります。

問、若し爾うならば、聖書の何處に三位一跡が教へてあります乎。

答、聖書の何處にとの御質問であります乎、私は聖書到る處と申し上げたい程であります、キリストの神性問題と三位一跡問題とは相關聯する問題であることは申上げるまでもありません、爾うして直接に又は間接にキリストの神性を表示して居る所の聖書の語は亦直接に又間接に三位一跡を表示するものであります。

問、例へば何ういふ處に三位一跡が表はしてあります乎。

答、先づ誰れにも能く解かる處から申上げませう、馬太傳第廿八章十九節に在るキリストの世界傳道命令の語に就て考へて御覽なさい、  
爾曹行きて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子となし

云々。

此處に三位一體の教義は最も明白に示されて居ります、若し此一節を希臘原文か又は英譯聖書に於て讀まるゝならば更らに明白に御解かりになることと思ひます、茲に「名」とあるのは英譯では the Name とありまして、一つの名であります、若し父と子と聖靈とが三個別々の神でありますならば the Names 即ち一つ以上の名と記されなければなりません、日本語、支那語を除いては其他の國語には大抵名詞に單數のものと複數のものがあるのは御承知の通りであります、爾うして茲にある「名」は單數名詞であります、單數名詞が三個、即ち複數名詞を受けて居るのであります、それ故に此一句を解しますれば、父と子と聖靈なる一つの神となるではありません乎、爾うして是れは確かに三位一體の神を示して居るではありません乎。

問、其他に何處に三位一體が顯はして有ります乎。

答、哥林多後書十三章十四節に有るパウロの祝福の辭を御覽なさい、

願くは主イエスキリストの恩と神の愛と聖靈の交際、爾曹衆と偕にあらんことを。

恩も愛も平和の交際も皆な神より出づる者なることは誰も知つて居ります、然るに茲處には此等の三つの恩賜が三つの實在者より下るものとして記してあります、此事も亦確かに三位の神を示すものではありません乎、此處に云ふ「神」は「父なる神」を指す者であることは謂ふまでもありません。

問、念のためモウ一箇所、貴下が此教義の憑語とせらるゝ所を示して下さい。

答、約翰傳十四章以下三章は父と子と聖靈との關係を説いて、最も懇切に三位の神を我儕に紹介する者であります、其中十四章の廿三節を御覽なさい、

イエス：…曰ひけるは若し人、我を愛せば我言を守らん、且つ我が父は之を愛せん、我儕來りて彼と偕に住むべし。

「我儕」の二字に注意して下さい、イエスは「自己」を天の父と同一の者と見做されて居ます、彼は父と偕に信徒の心に宿らんと茲に言はれて居ます、爾うして二者が斯く宿らせ給ふに「慰むる者」又は「眞理の靈」又は「訓慰師」即ち聖靈を以てせらるゝことは前後の關係から見て明かでありませす、即ち聖書の此語に由りますれば聖靈として我儕信者の心に宿ら

る、者は單獨の神ではなくして、彼は父、子、聖靈の神であるとのこととあります。「我儕來りて彼と偕に住むべし」とはキリストの貴き語であります。

問、新約聖書には或は三位一跡の教義を醸すやうな斯かる語があるかも知れません、然しながら是れ或は當時の思想界の感化を受けた爲であつて、基督教の本源たるユダ教は嚴格なる惟一神教を唱へた者でありますから、ユダ教の聖典たる舊約聖書には三位一跡と云ふが如き教條は其痕迹だも留めないと思ひますが、爾うてはありません乎。

答、大膽なる御質問であります、基督教は勿論ユダ教より出た者であります、故に新約の教義は皆な舊約に根ざして居るものであります、舊約聖書は嚴格なる惟一神教を唱へる者であるから、其中には多神教に類したる三位一跡の教義の如き者は其痕迹だも留めて居るまいとは、御疑問としては至て痛快のやうに聞えますが、然かし失禮の申分ではあります、聖書御研究の程度を御示しになるためには少しく貴下の御不利益ではあるまい乎と思ひます。

問、御冷かしは御免蒙ります、只、私の疑ひの點を明かにして下さい。

答、先づ創世記の第一章第一節を讀んで下さい、聖書の劈頭第一の此一節に三位一跡の教義が含まれてあると私が申しましたならば貴下は驚きなさるてありませう。

問、如何にも左様であります。

答、然し是は何にも私の牽強附會の説ではありません、若し少し深く聖書を究めて見ますれば此一節の中に實に容易ならぬ、而かも一見して不審に堪えぬ事實が示されて居るとが分かります。

問、それは何う云ふ事てあります乎、伺ひたいものであります。

答、元始に神、天地を創造り給へり、茲に神とある名詞は單數名詞ではありません、希伯來語の Elohim てありまして、El とか、Eloah とか云ふ「神」と云ふ詞の複數であります、故に若し字義なりに此一節を解しますれば、元始に一つの神が天地を創造り給ふたのではなくして、一つ以上の神が之を創造り給ふたのとてあります、即ち宇宙萬物の造主は God てはなくして Gods てあつたとの事てあります。

問、それでは聖書は始から多神教を教ゆる者であります乎。

答、爾うてはありませぬ、決して爾うてはありませぬ、其事は此一節を終りまで読んで見ますれば能く分かります、「神」を複数名詞に作つて居る此一節は「創造る」なる働詞を單數に作つて居ります、爾うして「働詞は其數に於ては之を支配する名詞に一致すべし」と云ふ文法の定則に従ひますれば此一節は確かに文理に叛いて居るものであります、之を英文法を以て言ひ顯はしますれば God makes は正當でありまして Gods makes は間違ひてあります、然かしながら茲に此明狀なる文法上の間違ひが聖書の劈頭第一に行はれて居るのであります、或る批評家が聖書には文法上の間違ひが澤山あると云ひて此書を輕蔑しますが、それは一理ある言であり、聖書は神の大眞理を顯はすためには人間の造つた文法上の規則には拘泥致しません、聖書は必要の場合には斯かる法則は自由之を破ります、爾うして創世紀第一章第一節が其一例であります。

問、然らば文法上の此違範は何を意味しますか。  
 答、一つ以上の神が相一致して一つの神として天地萬物を創造り給ふたとの事を意味します。

問、それは實に奇態な事を伺ひます、然かし茲に云ふ「神」Elohim なる複数名詞は習慣上單數名詞として用ひられたものではありませぬ乎、其一例には漢字の「朕」は國民全體を代表する詞であつて、實は「我等」と訓むべき者であるさうです、希伯來語の Elohim (エロヒム) も其類ではありませぬ乎。

答、或ひは爾うかも知れませぬ、然かし更らに奇態なることは同じ創世紀第一章の第廿六節に於て顯はれて居ります、

神言ひ給ひけるは我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造りて云々

神は茲に三度まで自己を我儕と稱ひてあります、又同じ三章の廿二節には、

エホバ神曰ひけるは視よ、かの人(罪を犯せる人)我等の一の如くなりて云々。

「我等の一」と言ひ給ふ神は決して單獨ではありませぬ、斯かる神は其中に自他相對の關係のある神でなければなりません、此事を哲理的に解するは困難であると致しまして、聖書の此記事の中に此解し難い事實の伏在して居ることだけは明かであります。

問、問題は愈々六ヶ敷くなりました、舊約聖書は同一の事を他の所に於ても示して居りま

す乎。

答、居ります、然かし此事は和譯又は英譯聖書で讀んでは分かりませんが、然かしながら舊約聖書の書かれたる希伯來語で讀んで見ますれば明かに分かります。

問、其二三の例を擧げて下さい。

答、聖書中、神を Elohim (エロヒム) とか Adonim (アドニム) とか稱して居る所は皆な此類であります、而うして舊約聖書は神を稱ひ奉るに滅多に單數名詞を使つて居りません、其他左の例を御覽なさい。

汝の少き日に汝の造主を記えよ(傳道之書十二章一節)。

茲にある造主とは英語に譯しますれば Creators と云ふべき者でありまして複數名詞であり升、又

汝を造り給へる(Makers と譯すべきもの、複數名詞なり)は汝の夫なり(以賽亞書五十四章五節)。

其他枚擧するに違ありません、舊約聖書の神が單獨の神でない事だけは疑ない事である

と思ひます。

問、然かし其事を聖書の他の明言と如何して一致させる事が出来ますか、モーゼはイスラエルの民に告げて曰ふたてはありません乎、

イスラエルよ、聽け、我儕の神エホバは惟一のエホバなり(申命記六章四節)

此一節は以て惟一神教の毀つべからざる基礎となすに足りるてはありません乎。

答、左様であります、然し此所は其御質問に對して御答へ申すべき所ではありません、貴下の御質問の主旨が舊約聖書に一位以上の神の存在を認めて居る所がある乎との事でありましたから、私は其證據を擧げたのであります、如何して惟一の神エホバが三位である乎、それは全く別問題であります。

問、然れば其事は後て伺ふ事に致しませう、然かし只今伺つて置きたい事は舊約聖書の何處に此エロヒムなる者が三位であると云ふことが記してあります乎。

答、三位一神の教義は新約聖書に於て明かに示された者でありまして、舊約聖書に於てはたゞ其徴候を見るまでであります、然かし徴候とは云ひますもの、之を新約の默示と善

く較べて見れば誤るべからざるものであります。

問、それは何所にあります乎。

答、問題が餘り長くなりまして、冗長に流るゝ虞れがありますから私は茲に之を聖句の摘指に止めて置きまして後は他の問題に移りたく思ひます、子なる神の存在は創世記廿二章十一、十二節、箴言八章廿二節より卅一節まで等に示されて居ります、聖靈の神の存在は創世記一章の二節、以賽亞書六十三章の十節、以西結書卅七章九節等に顯はれて居ります、御暇の節に是等の箇所を御照合せなすつて御覽なさい、多少御了解になることもあらふと思ひます。

問、然れば御説に従ひまして聖書には一位以上の神のあることが教へられてあると致しませう、然かし茲に至て他の大問題が起つて来るのであります、即ち是れ理性に合ふ教義である乎、何時の御説の通り宗教は理論以上であると致しますものゝ、然りとて理性に全く適はない事を私共は信ずる事の出来ないのは御承知の通りであります、貴下は三位一體の教義は理性を以て近づくことの出来る問題であると御信じなされるのであります

乎。

其三 三位一體の哲理的説明

答、左様であります、私供は理性を以て、即ち哲理的に此高遠なる教義を説明し盡すことが出来るとは言ひません、然しながら神に關する眞理である以上は哲理的には攻究し得ない眞理であるとも言ひ得ません、人間の理性の届く所までは最も有益に攻究し得る問題であると思ひます。

問、然らば明狀に伺ひますが、(ドゥソソ) 褻瀆の罪を以て私を責めなさい(ドソ)、如何して三つの者が一つであり得ます乎、若し(ドソ)であり、(ドソ)であると言ひますならば數學の土臺が崩れて了ひまして世に算數學なるものは其迹を絶つに至るではありません乎。

答、御質問は御尤であります、西洋にも斯かる質問を試みる者があります、バベージ氏の三位一體に對する數學的反對説なるものは貴下の御質問と同じものであります。

問、それに對して貴下は如何御答へになります乎。

答、私は斯う答へます、貴下は神の何たる乎を能く御考へにならない、貴下は神は石か木



であるやうに考へられて居る、若し三個の石が一個の石であると云ふならば數理學の根本は崩れて了ひませう、然しながら意志と感能と情性とを備へたペルソナが三つ合して一つであると云ふことは直に以て背理として排斥するとは出來ないと、斯う答へます。

問、其事は私にはドウしても分かりません、全體ペルソナとはどういふ者であります乎。

答、其御質問は實に適當なるものであります、ペルソナの何たる乎が善く分らずして三位一體は論ぜられませんか。

問、然らばペルソナの御説明に就て充分に伺ひませう。

答、ペルソナは拉典語でありまして、英語で Person とか Personality とか云ふ詞であります、此詞を和譯し又は漢譯するのは至て困難であります、英華字典には此字を「一個人」とか「一位」とか、又は「爲人」とかに譯してあります、是れは何れも人に屬する性質を示した譯字でありまして、未だ以てペルソン又はペルソナの眞意を盡したものと云へません、勿論吾人は始めに人に由てペルソナの何たる乎を知るのでありますから、人の屬性として之を考ふるのは左もあるべきであります、然りとてペルソナは必ず人

に屬する性であると云ふのは大なる間違であります、ペルソナは靈の屬性であります、さうして靈は人に限りません、然り、完全なるペルソナは人に於て顯はるゝものではない、人は不完全なるペルソナであります、完全なるペルソナは神であります。

問、さう仰せられましてペルソナの説明にはなりません。

答、承知致しました、ペルソナとは意志と智性と能力と愛心とを備へた實在物であります、さうして之等を完全に備へた者は神のみであります、人は神の象に像られて造られた者でありますから、矢張りペルソナではあります、然し不完全なるペルソナであります、神の事を攻究する時の普通の誤謬は人を本位として立て、神の事を人の事より推斷するとして有ります、然かし完全は不完全より推して知る事の出来るものではあります、完全の標準は完全其物であります、神を知つて始めて人を知ることが出来るのであります、ペルソナの何たるも之を完全に知らんと欲すれば神に於て之を知るより外に途はありません。

問、ペルソナの何なる乎は御説明に由て少しく分かりました、然かしそれがドウして三つ

相集つて一つで在ることが出来ます乎。

答、ドウしてとの空理屈を申上げるとは出来ません、然かし其實例に近きものを申上げることは出来ます、聖書の教訓で我國の漢學者流が非常に嫌ふ一節があります、それは夫婦に關する聖書の教訓であります、

是故に人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一體となるべし(創世記二章十四節)。其道徳上の可否は別問題と致しまして、此一節の中に深い心理學上の眞理が含まつて居ることは確かであります、即ち夫婦たる者は二個別々のペルソナ性を有したる個人でありますけれども、若し其意氣相投じ、熱望相合するの場合に於ては二人は實に一體と成るとの事實、是れであります、二人が一體、即ち一人となる、而かも一人ではない二人であるとは數理學から言へば背理の最も明かなる者ではありまするが、然かし愛情を有する人の特性として考ふれば決して怪しむに足りません。亦近世に至りまして國家學なる者が起りまして、學者は國家を一個人體として論ずるに至りました、而かも國家なる一個人があるのではありません、國家とは四千万とか五千

万とかいふ、個々別々の個人が相集つて造つた者であります、然らば國家なるものは無いかと云ふに有ります、一定の意志を有ち、目的を有ち、之を組織する個人の盛衰に關らず進歩發達する國家なる一個人體があります。

其事は何を示します乎、人の心は或る場合に於ては融和投合して一つと成ると云ふ事を示すではありません乎、四千五百万個の石を蒐めた所が矢張り四千五百万個の石より他の物ではありません、然かし或る高貴なる目的のために四千五百万の人を結合して御覽なさい、是れは一個人體となります、即ち一國家となりまして、泰山をも崩し、大陸をも呑む力となります、數理學の理を以て人事を量る者は大に誤ります、ペルソナ性を有する人は多くの場合に於ては數理學の法則の外に立つ者であります。勿論、夫婦と云ひ、國民と云ひ、孰れも不完全なるペルソナでありますから其糾合一致も隨がつて不完全であります、故に彼等が一體となるの狀を以て直ちに之を三位の神に適川することは出来ません、然かしながら三位が一體となりて存在する事が出来るとの事を推量するためには充分なる思料として用ゆることが出来ます、バベージ氏の三位二

躰に對する數學的反對論は之を心理學的に攻究すれば跡形なきものとなりて消ゆると思ひます。

問、御説は大分明白に分りました、然し爾う致した所が三位一體の教義は吾人が神に就て懐く所の思想を無益に複雑ならしめ、それがため吾人が思想的に得る所は少しも無いではありません乎、「神は一なり」と云へばそれで人生をも宇宙をも至て容易く解釋することが出来まして、思想上の便利は此上ないではありませんか、爾うして總て天然の法則は單純なる丈けそれ丈け眞理に近いではありません乎。

答、私は爾うは思ひません、成程、思想上、單純は甚だ貴ぶべき者であります、然かしただに單純なればとて夫れて貴いものではありません、多くの懶惰書生はたゞ單に問題の容易ならんことを祈ります、若し宇宙が水か水晶のやうな單純透明の者でありましたならば哲學者が出て之を説明せんがために彼の頭腦を碎くの必要がなくなつて嘸ぞ宜しからふと云ふ人もありませう、然し宇宙の美は斯かる容易なる美でない事は誰も知て居ります、宇宙の造主なる神の美も同じものであります、或る意味から云へば神は單純であります。

彼には缺もなければ雜もありません、然しながら彼は容易に解し得らるゝ者ではありませぬ、彼は安易の意味に於ては決して單純ではありません、彼は深遠であります、高遠であります、彼は simple ではありませんが grandly simple であり、profoundly simple であります。

問、然かし神は完全なる者ではありません乎、爾うして完全なる者は獨り自身で完全なる者でなければならぬではありません乎、二三相集るにあらざれば完全なる能はざる者は不完全なる者ではありません乎、故に三位一體の教義は神を不完全なる者として世に顯はす者ではありません乎。

答、左様であります、完全であるから三位でなくてはならないと云ふのであります、貴下の御質問其物が三位一體の有力なる證據となるのであります。

問、夫れはドウいふ譯であります乎。  
答、貴下は完全なる者は獨り自身で完全でなくてはならないと仰せられます、私もそれには御同意であります、神は彼自身にて完全なる者でなければなりません、彼は彼の造り

たる人類又は宇宙と共にするにあらざれば完全なる能はざるが如き者であつてはなりません、彼は宇宙万物の未だ會てあらざりし先きより完全なる者でなくてはなりません。問、其事は私にも分かります、然し其事が三位一神の教義と何の関係があります乎。

答、大なる関係があります、若し神は單獨の者であつたならば彼は宇宙の造られし前にはドンな者でありましたらふ、神は永遠より愛であると云ひますけれども未だ愛すべき受造物の無かりし時に單獨の神は何を愛しましたらふ、貴下は其時彼は彼自身を愛し給ふたと云はれませうが、然し自身を愛するとは愛ではありません、少くとも愛の最も劣等なるものであります、愛は言ふまでもなく交換的であります、愛する者があり、愛せられる者があつて始めて完全なる愛があるのであります、然るに憐むべし、私は此語を用ゆるに躊躇致しません、貴下の想像なざる單獨の神は、彼が宇宙萬物を造り給ひし前には、自己以外に愛すべき者を有たれませんでした、彼はデホーの小説にある南洋の孤島に孤獨の生涯を送りしロビンソン、クルッソーのやうな者でありました、漠々たる虚空の中に彼自身の外に「汝よ」と呼懸よびかぐることの出来る者なく、又「然り」と應ふる者

基 督 教 問 答

もありませんでした、貴下は斯かる虚空の單獨者を稱して完全なる愛を備へたる完全の神と言はれます乎、博士ペーコンの言に「單獨なる者は神にあらざれば禽獸なり」とのことがあります、然かし神とても絶對的に單獨たることの出来る者ではありません。

問、それならば其時、神は誰を友とし給ふたと仰せられるのですか。

答、彼の中に三位があつて、彼は彼自身の中に聖なる社會を備へ給ふたと言ふのであります、三位の社會「the Society of the Trinity」とは米國第一の神學者ジョンナサン、エドワードの始めて用ひし熟語でありまして、「社會」なる詞ことばの何人の口にも上る今日に至ては甚だ俗化され易き語句ではあります、然かし此事に能く注意して用ひますれば其中に深い眞理を含む辭句ことばであると思ひます。

問、それでは神は個人ではない、社會であるとして仰せられるのであります乎。

答、爾うであります、若し貴下が「個人」、「社會」なる詞を今の神を嫌ひ宗教を嘲ける世人が用ゆる意味に於て用ゐられませんならば爾うであります、單獨の神を哲學的に思惟するの困難は深く此問題に就て考ふる人の常に感ずる所であります、ユニテリアン派の第

基 督 教 問 答

一流の思想家と見做されしジェームス・マーチノイ氏が曾て此問題に就て述べた言が  
りまするが、單獨の神を信ずるユニテリアンの思想家でも若し公平に思惟の順序を追ふ  
て攻究しますれば竟に此結論に達しなければなりません、彼は單獨の神を造化の成りし  
前に思惟するの困難なるを述べ、斯る神は可能的潛勢力を抱藏せる「大なる沈黙」と見る  
より外なきを論じ、竟に言を續けて曰ひました、

彼は力に非ず、そは其時未だ之に抵抗するものなければなり、彼は原因に非ず、そは  
未だ結果なければなり、正義なる能はず、其時未だ之を施すの靈的實在物の、神を除い  
て他に無ければなり、愛なる能はず、そは其時未だ愛すべき者なければなり、吾人は  
視るべき物なき時の視覚、接觸すべき物跡なき時の力、思惟其物の外、思惟すべき事  
物のなき時の思惟に就て思惟せんと欲するも能はざるなり、吾人は斯かる單獨にして  
隔絶せる神に對し、之に附與すべき一の屬性を有せず、吾人が彼に就て言ふは、恰かも  
暗黒又は空白の無極に就て言ふが如く、單に否定を以てするのみ、即ち彼に資質なし、  
限界なし、感情なしと言ふに過ぎざるなり、而して資質と云ひ、限界と云ひ、感情と

云ふも、是れ皆な受造物ありて以來の言なるを如何せん。

實に公平なる斷案であると思ひます、單獨の神の永遠の存在は思惟せんと欲して能はざ  
る所であります。

問、若し爾うならば多神教こそ最も思惟し易き教理ではありません乎、三位一跡説と多神  
教との間に何の差異があります乎。

答、有ります、大にあります、多神教とは神の数が多くあると云ふに止りません、多神教  
の原理は意志を異にする神々の存在を信ずるにあり、風の神は山の神と主義方針を  
異にし、火の神は水の神と正反對の意見を懷き、正反對の方針を取ります、彼等の間に  
は多種多慾の人間間に於けるが如き、衝突、競争、反對があります、彼等は統一なき  
神類であります、彼等の名が異なるが如く、彼等は各自の目的方針を異にする者であり  
ます、斯かる者の總躰を、完全なる一致の裡に純聖なる目的に向て進み給ふ三位の神と同  
視するは誤謬の極と稱はなければなりません、三位であるから多神であると云ふのは前  
に述べました、バベリシ氏の數學的反對論と同一轍の淺見でありまして、斯かる小兒ら

しき反駁を以てしましては基督教の此大教義を少しなりとも動かすことは出来ません。問、何やら分かつたやうで未だ充分に分かりません、然し是より後を伺ふの必要はないと思ひます、多分貴下の御信仰の中に、何にか私供の未だ透徹し難い深い真理があるのでありませう、然しそれは夫れと致しまして、茲に尙ほ一つ此問題に就て貴下に御尋ね申したい事があります、それは貴下は斯くも滔々と貴下の御信仰を御辯護になられますが、然かし斯かる込入つたる御信仰は實際上何の益になりますか、神は單獨であらふが、三位であらふが吾人が斯世に在て社會人類のために盡す時に方ては何の差違もないてはありません乎、私は世の神學者なる者が何の益もない事項に就て無益の思考を凝すのを見て、その何のためなる乎を知るに甚だ苦む者であります、「神は愛なり」、吾人の信仰は是れて足りるてはありません乎、吾人は何を苦んで幽邃、極なき所にまで吾人の研究を<sup>も</sup>持て行くのであります乎。

其四 實際的信仰としての三位一統

答、何よりも實際を貴ぶ日本人としての貴下の御質問として誠に御尤であります、吾等は

斯國に在ては何事に就ても其實利實益を述べなければなりません、日本人は自ら哲學的の民であると稱ひて誇りまするが、然かし彼等の最も貴びまするものは哲理ではなくして實利實益であります、「是れは金に成る乎」、是れが彼等の最大問題であります、彼等は基督教は果して真理である乎と問ひません、基督教は國家のために、然り、我が爲に利益である乎、是れ日本國に於ては何人も基督教に就て問ふ所であります、「三位一統の實益」、私は御質問に接して戰慄が致します。

問、何にも爾う卑い思考を以て御尋ね申したのではありません、只、實際的方面から見て此教義に亦た何にか憑るべき所がありません乎、それを伺いたく欲ふのであります。

答、それは有ります、勿論あります、大なる真理で竟には大なる利益を供へないものはありません、三位一統の教義を以て單に空論家の辯證術の一課であると思ふ人は大に誤ります、勿論、斯かる深遠なる教理は淺薄なる人には何の實益をも供しません、國家改造とか、國民教育とか、慈善事業とか其位ひの事を以て人生最大の目的と致しまする人に取りますしては、神は單獨であらふが、或は三位であらふが、或は全く無い者であらふが、

別に何の差障さしやうにもなりません、彼等は信仰的樂天家らくてんかであります、何でも易く信じて易く天國てんこくに行うとする人達であります。

問、彼等の事はドウでも宜うムいます、實際的方面から觀た三位一神に就て御聞せ下さう。

答、先づ始に此點から觀た單獨の神の不完全なるに就て申上げませう、單獨の神は之を思惟するには容易やすしい乎も知れませんが、然し實際に私共を慰むるに足るの神ではありません、單獨の神は自みづから孤獨こどくの神であります、爾うして孤獨の神は世の獨身者の性を帯びて決して同情推察の心に富む者ではありません、彼は世界と人類との造主である乎も知れませんが、然し彼は之れを造つて後に之を彼の手より放し、之を彼の定めし天然の法則はつそくに委ね、彼れ自身は高く天の寶位たからゐに棲止り、彼の足下に彼の造りし宇宙と人類とを瞰下くわんげし、其悲哀の狀を視て、轉た哲學的憐憫の情に堪へずと雖も、而かも彼の榮耀えいごうの天位を棄て汚濁の世に降て之を救はんとするが如き慈悲的熱心を起す者ではありません、單獨の神は哲學的隱遁者の如き者であります、世を卑み、嘲けり、遠ける者であります、彼に我等の悲痛を訴ふるも彼は應へません、彼は莊嚴なる君主であります、神聖にして

近づくべからざる者であります、新田義貞が勾當の内侍に書き送りしと云ふ一首の歌は、憐むべき人類が此單獨無情の神に對つて懐く感であると思ひます、

我袖の涙にとまる影とだに知らず雲井の月やすむらん

爾うして單獨の神は斯かる神でなくてはならないことは三位の神を否む人の神に關する觀念に照らして見て能く分かります、十七世紀の自然教信者は其一例であります、彼等は勿論無神論者ではありませんでした、然し彼等の信ぜし神は人類を遠く離れたる神でありました、彼等は勿論基督教の「神の受肉」の教義を拒みました、彼等は神とは此穢れたる人類に斯くも近づく者ではないと唱へました、彼等は神を父と呼び得ませんでした、詩人ゲーテの如きは基督教信者が天の神を「我儕の愛する父」と呼ぶのを見て頻りに彼等の不敬を嘲けりました、然かし、ゲーテ、トマス・ペイン、フランクリン等を以て代表されたる十七世紀の自然教信者が決して温かきクリスチャンでなかつた事は誰でも知つて居ります、冷たい單獨の神を信じた彼等は冷たい宇宙觀と人生觀とを懷きました、是れは免かるべからざる事であります。

第二の實例は今日のユニテリアンであります、ユニテリアンは冷淡なりと私が申しましたならばユニテリアンの人々は怒りませう、然かし事實は決して蔽ふことは出来ません、ユニテリアン教徒自身が三位一體教信者の狂熱を嘲けります、熱し得ないのがユニテリアン信者の特質であります、ユニテリアン教に信仰復興なるものはありません、又、改信の歡喜とか、悔改の悲歎とかいふものもありません、ユニテリアン教は平靜であります、感情を脱して居ります、人類を愛しますが、キリストの愛のためには愛しません、爾うして三位の神を拒みまするユニテリアン教信者の或者は神の存在の信仰をさへも信徒たるの必要條件とは認めません、善を爲せば彼等は足りるのであります、彼等に取りては何にも必しも眼に見えざる神を信するの必要はありません、人類を愛さへすればそれで彼等の目的は達せられるのでありますから、彼等の或者は「神に對する信仰も是れ亦た信條的ドグマチックなれば不用なり」と叫びまして一神教の信仰をさへ無用視します。

問、それは如何いふ理由であります乎、三位の神を拒みなればとて神其物を拒み或は其愛を感じないと云ふ理由はないではありません乎。

答、三位の神を拒む者の神に對する愛心の薄いのは其裏に深い理由があると思ひます、前にも申し上げました通り愛は單獨で存在する者ではありません、愛は相互的のものでありますから單獨の神には實は愛なるものはないのであります、ユニテリアン教徒は人を愛するのが愛であると云ひますが、然し善く聖書を研究して見ますと、愛の本源の決して斯かる者でないことが分ります、神が愛なるのであります、我儕は神を離れて愛の何たる乎を知らないのであります。

主は我儕のために生を捐たまへり、是に由りて愛と云ふ事を知りたり（約翰第二書三章十六節）。

即ち主が我儕のために生を捐て給はざりせば我儕は愛の何たる乎を知らざりしとの意であります、又

それ神は其生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり（ヨハネ傳三の十六）とありまして、愛とは元々人が人を愛するの愛でもなく、亦キリストが人を愛するの愛でもなくして、愛の最も高貴なるもの、最も純正なるものは神が其獨子を愛するの愛で



あるとのこととあります、故に我儕キリスト信徒たる者は愛を人と人との間の愛に於て、  
學んとは致しません、神がキリストを愛するやうに、又キリストが父なる神を愛するや  
うに、我儕は相互を愛すべきであると言ふのが基督教の道徳であります。

イエス曰ひけるは……我は爾に就る、聖父よ、爾の我に賜ひし者を爾の名に在らしめ、  
之を守りて我儕(三位の神)の如く彼等(弟子等)をも一になし給へ(ヨハネ傳十七の十  
一)。

爾の我に賜ひし榮を我れ彼等に授けたり、此は我儕(三位の神)の一なるが如く彼等も  
互に一ならん爲なり(全廿二節)。

又爾(聖父)我(聖子)を愛する如く彼等をも愛することを知らしめんと也(全廿三節)。  
是等の諸節に由て見ましてもキリスト信徒の一致と云ひ愛と云ひ、皆な三位の神の相互  
の間に存する一致と愛とに倣ふべきものであることは明かてあります、我儕が神は愛て  
あると云ふは彼の裏に三位が在て其間に完全にして純正なる愛が存在して居るから爾う  
言ふのであります、純愛は聖なる三位を繋ぐの絆であります、此聖なる結繩があります

る故に我儕は神は愛てあると云ふのであります。

問、それは私が今日まで聞いて居りました基督教の愛とは大分違ひます、私は神の愛とは  
人の愛に由て始めて知ることの出来るものであると思つて居りました。

答、それは大なる間違てあります、人の愛を以て神の愛を量るのは曲がれる定木を以て宇  
宙を量るの類であります、人の愛を以てしては到底神の愛を識ることは出来ません。

エホバを畏るゝ者にエホバの賜ふその憐憫は天の地よりも高さが如し(詩篇百三篇十  
一節)。

婦その乳兒を忘れて己が腹の子を憐まざることあらんや、縦ひ彼等忘るゝことありと  
も我は汝等を忘るゝことなし(以賽亞書四十九章十五節)。

神の愛は神の愛を知るにあらざれば知ることの出来るものでありません、人は父母の愛  
を稱へますけれども是れ僅かに他人の愛に較べて見て深い丈けてあります、父母の愛は  
決して完全なる愛てはありません、之に多くの自分勝手の所があるのは誰も知つて居り  
ます、彼等は或時は孝道を楯に取て自己の非理を其子に強ひます、彼等は子の心中の悲

痛を知りません、彼等は理なくして怒ります、己れの命に従はないとて不孝の名を蒙らして幸なき其子を責立てます、故に骨肉の父母の愛より推して靈の父なる天の神の愛を量り知ることが出来ません、若し天父とはたゞに肉躰の父母の無限大なる者でありますならば、我儕は時としては廣大無邊の宇宙に在て我儕の悲痛を訴ふるに所ない者であります。

然しながら天の父は肉躰の父母とは異います、彼は絶對的に無私の者であります、彼は永久に其獨子を愛する者であります、爾うして今や其子に由て其同じ永久の愛を以て我儕罪人を愛し給ふ者であります、神の愛の高さ深さ潤さは我儕の想像以外であります、之に接して我儕は人間の愛の如何に憐れなるものである乎を知るのであります、爾うして神は直に其愛を我儕に顯はし給ふのであります、人間の愛に顯はれたる神の愛は其極々小部分であります。

斯かる次第でありますから、三位の神の愛を知るにあらざれば到底神の愛の何たる乎を知ることは出来ません、其獨子を世のために捐給ふ神の愛を知て始めて父の愛の何たる乎が分かるのであります、父の命とあれば死にまで之に従ひし子の従順を見て始めて孝の何たる乎が分かるのであります、聖父と聖子とより出て、自己に就ては少しも語らずして、聖なる二者の榮光をのみ是れ彰はさんとする聖靈の恩化を受けて我儕は無私の生涯の何たる乎を知るのであります、斯くて我儕の龜鑑は人間ではありません、孔子でもありません、鮑叔でもありません、重盛でもありません、正成でもありません、ルーテルでもありません、コロムウエルでもありません、我儕の龜鑑は神御自身であります、愛を以て働き給ふ三位の神であります、爾うして斯かる神を知らない者が高い深い聖い愛を知らないのは左もあるべき筈であります。

問、段々の御説明に由りまして少しく分りました、然らば貴下は三位の神にあらざれば實際人類を救ふに足るの神ではないと仰せられるのであります乎。

答、爾うてあります、單獨の神は地を遠く離れて高く獨り天に棲止る神であるのみならず、斯かる神は亦罪人とは全く関係のない神であります、單獨の神は地球にまで達しない神であります、罪人にまで及ばない神であります、三位の神を待つて始めて救拯の神はあ

るのであります、罪の赦免、其贖ひ等は三位の神にあらざれば我儕のために成就なすするとの出来ない事であり、夫れ故に御覽なさい、三位の神を拒むユニテリアン教徒は贖罪を拒みます、神が肉躰を取りて人類の中に降り給ひしとの事の如きは彼等が神に對して懐く觀念から割出して見て決して有り得べき筈のものではありません、十字架上の罪の贖ひの如き貴き教義は三位の神を信じない者の到底解し得ないことであります。爾うであります、三位一躰の教義は道德的教義であります、之を信ずるに由て人の人生觀は全く一變致します、之を拒みます時に彼の品性の變化は始まります、基督教の總ての教訓は此教義と大關係を有つて居ります、之を取ても捨てても可いと思ふ人は未だ基督教を了解しない人であり、爾うして基督教が世を救ふための實際的勢力であります以上は、三位の神を信ぜずして此勢力を維持することは出来ません、私は私の聖書に照らして見まして、亦私の理性に訴へて見まして、殊に亦私の實際的生涯に應用して見まして、エホバの神は三位一躰の神でなくてはならないことを信じて疑はないのであります、サヨナラ。

序に申上げて置きますが、此答辯の大躰は私自身の思考の結果なるものであります、然し聖書の引照や、例證の撰擇等に就ては私は R. M. エドガー氏が千九百〇二年十月の發行にかゝる the Presbyterian and Reformed Review 雜誌に寄贈されし「三位一躰論」に負ふ所が澤山あります。

神の己を愛する者のために備へ給ひしものは目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心未だ念はざる者なり、然れど神は其靈をもて之を我儕に顯はせり、靈は萬事を究ね知り又神の深き事をも究ね知るなり（哥林多前書二章九、十節）。

第五席

教會問題

無教會信者の辯護なり、聖書に頼り、論理に訴へ、實驗に照らして基督の教會の何なる乎を論じ、終に我國に於て將來起るべき教會の性質に論究す、問ふ者は教會信者の一人なりと假定す。

問、私は貴下が基督教の固い信者であらるゝことは豫ねてより承知して居りまするか、貴下が教會に就て如何も考へなされるか、今日は其事に就て伺ひたく存じます。

答、承知致しました、私の今日まで邂逅した人て此事に就て私に問はない人は殆んどありません、殊に牧師、傳道師、外國宣教師と云ふやうな人達は先づ第一に此事に就て私に尋ねます、彼等は今日は私の全く異教徒でないことを認めて呉れます、而已ならず、彼等は或る場合に於ては私が彼等の信仰の善き辯護者であることを承認して居ります、然

しながら教會問題の一段に至ては私が彼等と主義方針を全く異にする者でありまするか、それ故に彼等は私に近きません、亦、私も強ひて彼等と親まんとは致しません、或る宣教師が曾て米國に在る私の或る友人に書き贈て言ふたさうであります、「彼はイエスを愛する、然し我等宣教師と親まない」と、それは事實であります、然かし私は「彼はイエスを愛する」との其宣教師の一言を以て非常に満足する者であります、私は宣教師と教會を共にする者ではありませんが、然かし及ばずながら「イエスを愛する」者であります。

問、然らば貴下は何れの教會にも屬しにならないのでありますか。

答、爾うであります、私は今は無教會信者であります。

問、さういふ事は有り得ることですか。

答、有り得ることであると信じます、私自身が其一例であります。

問、それで貴下は聖書の指示に適ふと信じなされるのであります乎。

答、私は別に此點に於て聖書の指命に逆つて居るとは信じません、若し地上に於ける教會

に對して私の取る態度が聖書の明かなる指命に逆つて居ると考へになりますならば、どうぞ其廉々を示して私を責めて下さい、私も二十年來此事に就ては随分考へた積りてありますから、其思考の結果を貴下の前に陳述して貴下の御教訓に與かりたく存じます。

問、それでは先づ貴下に伺ひますが、貴下は聖書は教會を認めて居らないとお信じになるのであります乎。

答、勿論爾うは信じません、舊新兩約聖書とも幾度か「民の會合」又は「教會」の事に就て書き記して居ることは私も充分に承知して居ります。

問、貴下は亦イエスキリストが地上に於ける其教會の建設に就て語られたことを認めになりますせんか、彼は弟子ペテロに向つて、

爾はペテロ（磐）なり、我が教會をこの磐の上に建つべし（馬太傳十六の十八）

と言はれたのを御承知でありませう、亦、使徒行傳廿章の廿八節には主の己が血をもて買ひ給ひし教會と書いてあるではありません乎、其他新約聖書に教會のことに就て書き

示してある所は澤山あるではありませんか、然るに聖書の教訓に非常の重きを置かるゝ貴下が、教會の事に就てのみ固く自説をお取りになりました、無教會の地位に立たらるゝのは私には如何しても分りません、甚だ失禮の申分ではありまするが、此點に於ては貴下は意地を張らるゝの結果、常識の軌道を脱して居られはしません乎。

答、御説、誠に御尤であります、亦、御注意、誠に有難く存じます、然しながら貴下の御申分丈けては今の所謂る教會なるものが聖書の示す教會である乎、其事は未だ定まりません、聖書は必ず今の羅馬天主教會、又は英國監督教會、又は米國組合教會、其他有りと有らゆる殆んど數へ切れぬ程の教會的團體の救靈的必要を教へて居る乎、其事は全く別問題であります、爾うして私の研究と思考との結果に由りますれば（甚だ不束なる者であることは私も充分に自覺して居る積りではありまするが）私は我主イエスキリストも亦使徒パウロも決して斯かる團體の必要を教へては居られないと思ふのであります。

問、其證據は何所にありますか。

答、何所にと云ふて一言を以てお答へ申すことは出来ません、然しながら新約聖書に顯は

れたる教會なる文字の意義を能く研究して見まして、亦、基督教の精神より能く考へて見まして、基督並に使徒等の唱へし教會なるものが、決して今日貴下が非常に重きを置かるゝ教會でなかつたことは少しく聖書の研究の功を積んだ人の誰にても分ることであらふと信じます。

問、少しく教會なる文字に就ての御講釋を聞かして下さい。

答、御承知のとも存じませんが、新約聖書にては教會なる文字は種々の意味に於て用ひられて居ります。文字其物は EKKLESIA と言ひまして、「呼び出されし者」の意であります。故に總ての會合はエクレシヤと稱ばれました。使徒行傳十九章の卅九節にありますが、「律法に合ふ會」とは此種の會合であります。「律法に合ふ會」とは此場合に於ては希臘人の憲法に循つての會合といふことでありまして、純然たる政治的又は社交的の會合であります。故に文字其物より言ひますれば今の帝國議會もエクレシヤ(教會)であります。縣會も、郡會も、社會主義者の會合も矢張りエクレシヤ(教會)であります。故に使徒行傳の同じ章の第四十二節に「如此語りて會を散せり」とありまするのは、

今日の言葉を以て言ひますれば、集會が治安妨害の廉を以て解散されたたのことであります。

問、爾う致しますれば貴下は初代の教會なるものは只の集會に止まらなかつたと仰せられるのであります乎。

答、爾うであります。其集會の狀に至てはたゞの會合と少しも違はなかつたと言ふのであります。然し其精神、動機に至ては如何であつたか、それは全く別問題であります。

問、初代の基督教會なるものが單に信徒の集會であつたといふことは何所に書いてありますか。

答、左様であります。腓利門書の第三節には「爾の家内の教會」とありまして、キリストの言はれし「我が名のために二人或は三人集れる處には我も其中に在らん」との言葉に適ふたる教會が一信徒ピレモンの家庭の中に在つたことが示されて居ります。又パウロがコリントの信徒に告げて「爾曹の婦女等は教會の中に黙すべし」と言ひましたのは、其當時の習慣に従つて、多人集合の所に於て婦人の立つて語るは謹肅の美德に反すと

言ふたのでありまして、是れは今日の男女同權、婦人飛躍の權利を承認する英米兩國の如き國柄に於て必しも適用すべき聖語でないことは私の教會論に正反對の意見を表せられる宣教師諸君の齊しく唱道せらるゝ所であります、又、哥林多前書十四章の十九節に於て使徒パウロが「教會の中に在りて我れ方言をもて一萬の言を語らんより、寧ろ人を教へんために我が心を以て五言を語るを善しとす」と言ひましたのは、多人集會の所に於て人の解し難き歌辯を弄することの無益なるを示した言葉であります、教會とは禮拜あり、音樂あり、僧侶あり、焼香ある所と解しては聖書の此等の言葉は甚だ解し難くあります。

問、然らば基督の言はれた教會と普通の集合體とは何所が違つて居ります乎。

答、勿論其精神が違つて居ります。會員相互の心を結び付ける一致の繩の性質が違つて居ります。基督教會なるものは、利益のための集合でないことは勿論、亦、社會改良、慈善施行のための會合でもありません、基督教會は基督に託りて聖靈を以て新たに生れたるもの、生的團體であります、故に是れは靈的團體でありまして、會堂とか、會則と

か、制度とかいふやうな形跡を以て顯はさるべき者ではありません、神の國は顯はれて來るものに非ず、此所に見よ、彼所に見よと人の言ふべきものに非ず、夫れ神の國は爾曹の衷に在りとキリストの言はれたのは彼の教會に就て言れたのであります（路可傳十七章廿、廿一節）、如何なる地上の教會でもパウロが言ふた教會はキリストの身體なり、萬物を以て萬物に満しむる者の満てる所なりとの言葉に適なふものはありません（以弗所書一章廿三節）、神の家は活ける神の教會なり（提摩太前書三章十五節）とは書いてありまするけれども、斯かる教會は我が教會なりと言ふ組合教會の信者があると致しますれば、其人は大なる虚偽を言ふ者であります、バプチスト教會でも、「日本基督」でも、メソヂスト教會でも、然り日本獨立教會でも、決して斯かる言葉に適ふた教會ではありません、活ける神の家は聖靈の宿る信徒の心であります、亦斯かる心を授けられた者の、目に見ざる靈的交際であります、若しキリストの教會を靈的以外のものに解する者がありますれば、其人は未だ眞面目に新約聖書を研究したことの無い人であると思ひます。

問、教會なる文字の解釋より推論致しませば或は貴下の仰せられるやうな結論に達する乎も知れませんが、然しながら若し基督教の歴史より考へますれば教會の必然性は最も明白に説明されるではありません乎、之を舊約の歴史に就て稽へて見ましても、神を拜するに適當の禮式あり、讚美あり、音樂あり、犠牲のありましたことは何よりも明白なる事ではありません乎、利未記とは何てありますか、重もに斯かる禮式に就て神の撰民を教へた書ではありません乎、歴代史略の如きは純潔なる禮拜式の如何に神に悦ばれしものである乎を歴史的に示した書ではありません乎、ダビデも亦其詩篇に於て斯かる禮拜の如何に美はしき、亦慕はしきものなる乎に至る所に歌ふて居るではありません乎、我れ昔し群をなして祭日を守る衆人と共に往き、歡喜と讚美の聲を揚げて彼等を神の家に伴へり、今此等の事を追想して我が衷より靈魂を注ぎ出すなり（詩篇第四十二篇四節）。

是れ貴下方無教會信者の逆も味ふことの出來ない歡喜ではありません乎、貴下は何事に付ても靈的靈的と仰せられますけれども、人に五感の供へられてある以上は彼は靈を以てのみならず亦肉を以ても神を拜すべきではありません乎。

答、一應誠に御尤でいます、安息日毎に鏘々たる鐘の音に導かれて會堂に至り、其處に洋々たる音樂に心を清められ、後は白衣を着けたる教師の口より蜂蜜の如き説教を聞かると、貴下方の御幸福を私も時には御羨み申し上げないではありません、然しながら、然しながら聖書は寛大なる書であります、彼は私共無教會信者をも祝福します、聖書は儀式の用をも説きます、亦、其無用をも説きます、爾うして私の見る所を以てしますれば儀式の無用を説く聖書の言葉は其有用を説くそれよりも優かに莊嚴で優かに偉大であると思ひます。

問、何處に聖書は儀式の無益を説いて居ります乎。

答、何處にとの御質問であります乎、貴下は聖書に預言者なる階級のありしことを示してある所を御承知ありません乎、預言者は或る意味から言へば儀式の破壊者ではありません乎、

汝等ソドムの有司よ、汝等モラの民よ、我等の神の律法に耳を傾けよ、エホバ言ひ



給はく、汝等が厭ぐる多くの犠牲は我に何の益あらんや、我は羊の燔祭と肥えたる獸の膏とに飽けり、我は牡牛、或は小羊、或は牡山羊の血を喜ばず、汝等は我に見えんとて來る、此事を誰が汝等に要めしや、汝等は徒らに我が聖殿の庭を歩むのみ、空しき祭物を再び携ふること勿れ、燻物は私の惡むところ、新月及び安息日また會衆を召集することも我が惡む所なり、云々（以賽亞書一章十節より十四節まで）。

是れは所謂る教會破壊の聲ではありません乎、是れが神が會てモーセに告げ給ひし「汝等世々常例としてこれを祝ふべし」と宣ひし聖なる禮式に對しての預言者の發憤の言葉であると致しますれば預言者とは實に神の聖業を破壊して其聖名を瀆すの族ではありません乎、爾うして斯かる「暴言」を發したる者は預言者イザヤ一人に止りません、預言者と云ふ預言者は儀禮宗式に對しては大抵は此態度を取つた者であります、殊に預言者アモスの如きは殆んど聞くに忍びざる激越の言を發して、時の教會制度を攻撃しました、

汝等の歌の聲を我前に絶て、汝等の琴の音は我れ之を聽かじ（亞摩士書五章廿三節）

と、讚美の歌と樂とを嘲罵した言葉で是より強いものはありません、爾うして預言の書が聖書の一大部分であることを承知して居る者は聖書が儀式一點張りの書でないことを充分に承認致します。

問、預言者の禮式攻撃は惡を兼ねたる禮式の攻撃であります、禮式其物の攻撃ではありません。

答、其事は私も承知して居ります、然しながら其事はれ自身が禮式なる者の如何に價値の少ない者なるかを示します、是れは誰にても司る事の出来るものであります、如何なる賣僧でも、如何なる妖僧でも、僧侶となり、祭司となりて、如何なる莊嚴なる儀式と雖も之を司ることが出來ます、腐敗の附着し易いものとして宗教の儀式の如きはありません、爾うして時には疫病を根絶するために病菌の附いた家屋を焼き拂ふの必要があるやうに、人類進歩の歴史に於て腐敗の附着した教會制度を破壊するの必要が度々あるのてあります、爾うして預言者は斯かる破壊者であるのであります。

問、若し教會とは左程に惡い者でありますならば何故に神は其存在を許し給ひます乎、

基督教在て以來教會の無かつた時は無いてはありません乎。

答、仰せの通りであります、然し神は或る條件の下にのみ教會（目に見ゆる）の存在を許し給ひます、其れは教會が信者の評價に於て最上の地位に置かれなすこととあります、教會は結果でありまして原因ではありません、教會有つての信仰ではなくして信仰有つての教會であります、教會が信仰の發顯である間は神は其存在を許し給ひます、其れが信仰の鑄造者又は壓搾者となるに至りまして、教會は其存在の理由を失ひまして終に預言者の壞す所となります。

問、去らば貴下は現今の教會なる者は已に破壊の時期に達した者であつて、貴下は之を破壊する預言者の任を負はるゝ者であると御自信なさるのであります乎。

答、随分過激なる御詰問であります、若し私は預言者であるから今の教會以上に立つて之を毀つゝの義務を保有する者であると言ひますならば、誰か私の不遜を憤らない者がありませう、事物を總て其極端に於てのみ解釋して、我に與みせざる者は我が敵なりと言はるゝのは決して他人を正當に鞠くの道てはありません。

問、然らば何故に貴下は今の教會に御屬じにならないのであります乎。

答、其事は少しく私の個人問題に立入りまして、教會問題を其大體に於て攻究せんとする此問答に於て述べべき性質の者ではありませんが、然し一般の問題を特別の實例に照らして稽ふるのは返りて利益ある場合もありますから、私は茲に貴下の其質問に答ふることに致しませう。

御承知の通り地上の教會は天に在る理想の教會とは違ひ、歴史的の性質を有つてあります、世に所謂理想的教會なるもの有るべき筈はありません、羅馬天主教會とは中古時代の歐羅巴の境遇に應じて起つた者であります、カルビン主義の長老教會なる者は十六世紀の思想并に社會の必要に強ひられて起つた者であります、英國に僧侶制度が其腐敗の極に達して、儀式宗制を全然否定したる友會派一名クエーカー教會が起つたのであります、其他何れの教會の起原を尋ねても同じこととあります、世に永遠に續くべき教會なるもの有るべき筈はありません、若し有るとすればそれは活ける神の城なるエルサレム、又千萬の衆、即ち天使の聚集（希伯來書十二章廿三節）であります。

て、斯かる教會は此移り變る世に建設せらるべき等の者ではありません、故に若し二十世紀の日本國に教會が有るとしますれば、それは千五六百年前に歐羅巴に起つた天主教會であつてはなりません、又四百年前に瑞西國ゼネバで起つたカルビン教會であつてはなりません、又三百年前に英國に起つたメソヂスト教會であつてもなりません、それは今日の日本の信者が基督教の眞理を心に受けて、深く神の救済の恩恵を味ふて、其結果、外部より何の制せらるゝ所なくして自然に出來た教會でなくてはなりません、恰度我等が如何に望むとも英吉利人や亞米利加人の肉を取て我が肉とすることが出來ないやうなものでありまして、我等が如何に望むとも彼等が作つた教會を取つて之を我が教會とすることは出來ません、若し出來ると思ふ人があればそれは爾う思ふ丈けてありまして其神より賜ふた實物でないことは其維持の非常に困難なるので分かります、恰かも外國産の植物を無理に我邦に移植せんとするやうなものでありまして、多くの費用と勞力とを費すならば其生命を持続し得ないではありませんが、然し少しく之を世の風波に曝しませれば忽にして枯れて死んで了ふ者であります、爾うして斯かる教會に身を置きますれば

ば我が信仰も自づと其不自然の性に侵され、竟に自由の發達を遂げ得ずして、死するまでには至らずとも、その變形矮縮は到底免れ難いことであります、私は私の信仰の自由發達を計らんがために外來の既成教會に身を置かないのであります、教會は人の造つたものではなくして神の造り給ふものであります、即ち時と場合とに應じて神が我儕の信仰を土臺として其上に造り給ふものであります、然るを我儕の時と場合とに何の關係もなくして出來た教會を其儘我儕の中に植えやうとするのは是れ天然の法に叛くことではありません、亦神の聖旨でないと思ひます、私は若しメソヂスト派の宣教師が來つて私にキリストの救済の道を傳へて呉れますならば感謝して之を受けます、然しながら若し私に三百年前に英國に起つたメソヂスト教會に入れと勧めますならば、私は斷じて其勧誘を拒みます、メソヂスト教會は二十世紀の日本人なる私には何の用もないものであります、若し私が強ひてメソヂスト教會の會員とならんと欲しますれば私は多少私の本性を曲げなければなりません、爾うして斯かることは神が決して私より求め給ふことではありません。

問、然らば貴下は人は教會なしに其信仰を守り又進めることが出来るかと信じなさいませう。

答、私は出来ると思ひます、人の信仰は教會を作るべきものでありまして、教會は信仰を作るべきものではありません。

問、然しながら信仰の初期に方では教會の保護並に奨励は信者に取ては非常に必要ではありません乎。

答、多くの人は爾う申します、爾うして私も永の間、さう信じ來りました、然しながら今に至て其懸念の全く不要であることが分りました、私は厚き教會の保護を蒙つた信者にして憐むべき墮落に了つた者を澤山知つて居ります、亦、教會よりは何の世話にもならずして立派に信仰を維持して居る者をも澤山知つて居ります、信仰は神の事でありませ、人の事ではありません、主は己に屬ける者を知り給ふ（提摩太後書二章十九節）、監督より洗禮を受け、大監督より堅信禮を受けた者でも神に簡あはれられない者は終に墮落しませ、此事は餘りに明白なることでありまして、私は弱信保護の理由を以て教會存立の必要を辯護する人に邂逅します度び毎に、其人の志を嘉よみますると同時に、亦其信仰上の實驗の未だ至て淺いことを認めませ。

基 督 教 問 答

問、然らば貴下は今日の教會なるものは全く不要であると仰せられるのでありますか。

答、勿論爾うは申しません、好意を以て建てられたる今日の教會が悪の外、何を爲さないなど、は常識のある者の言ひ得るものではありません、然しながら教會が教會として其發生地以外の國に於て會て永久に成功したことの無いのは歴史上著明の事實でありませ、布哇國の如き、一時は其國王は英國監督教會の會員であり、其國民の多數は米國組合教會の會員となりしに係はらず、其國は今滅びて米國の領土となり、天下何人も布哇國の基督教を口にする者なきに至りし理由は何であります乎、又マダガスカル島の如き、一時は最も熱信なる基督教的婦人を其女王として戴き、萬邦に率先して禁酒令を國內に布きし國にして、今は佛國の領土として知らるゝの外、宇内に何の貢獻する所なきに至りましたのを見て、誰がマダガスカル傳道は成功であつたと言ひ得ませう乎、米國宣教師シャドソンが其生命を投棄なげて救はんとせし緬甸國ビルマは今何うなりましたか、英國

基 督 教 問 答

監督教會は英領印度三億の民に如何なる感化を興へつゝあります乎、外國傳道會社の補助を絶たれて組合又は長老の諸教會が永久に支那に於て繁殖するならんと貴下はも信じなさります乎、爾うして他國のことはサテ措き、我國今日の教會なるものに就て貴下は如何なる御觀察をお下しになります乎、「監督」と云ひ、メソヂストと云ひ、バプチストと云ひ、プレスビテリアンと云ひ、或は三十年或は四十年の傳道的勞働の結果、如何程の地歩を此國に於て得るに至りました乎、此事に就ては見識のある外國宣教師の方が日本の多くの信者に優さるの卓見を懐いて居ります、彼等宣教師の或者は日本傳道の結果に就て頗る悲觀を懐いて居ります、數十年間に渉る外國傳道會社の保育を受けながら日本の基督信者の多數は今に尙ほ補給を外國に仰ぐの途を講じつゝありまして、自から立つて日本傳道の責任を負はんとは致しません、試に外國の傳道會社が今日直に日本より全く其手を引くと考へて御覽なさい、日本に幾干の基督教會が残りましたや乎、四十餘派の傳道會社が七百餘名の宣教師を派遣して二三十年間傳道に従事するも、是より以上の効績を擧ぐる事が出来なかつたとは抑々何に由るのでありますか、然かも貴下は私

基 督 教 問 答

に其教派の一に私の身を置いて日本國のためを計れと勧められるのであります乎、私は貴下が私に斯かる勧誘を試みられる前に我國今日の基督教會の現状に就て少しく調査を遂げられんことを望みます。

問、然らば貴下は今の教會は如何したら好いと仰せられるのであります乎。

答、基督の救済を説いて教會を説かないこととであります、教會のことは之を神と信者とに任かし、我より進んで斯かる教會に入れとか、斯かる教會が最も聖書的なりとか唱へて、未だ信仰薄き信者に向て特別の教會制度を勧めないこととあります、靈魂は神の屬であります、人が其發育に干渉するにあらざれば靈魂は枯死するに至るべしとは古代の天主教徒の懐いた迷想でありまして、我等新教徒の全然排斥する所であります、信徒を驅てメソヂスト教會又は其他の教會に入れんとするは之を天主教會に收めんとせし天主教徒の所爲と其精神に於て少しも異りません、福音と共に教會（教派）を説く者は福音其物を毀つ者であります、金剛石は之を入れる筥とは全く別物であります、然るを筥と金剛石とは同一物であるやうに説き、筥其儘を受くるにあらざれば其中にある金剛

石をも受けること能はざるやうに傳へまするのは大なる誤謬であります、我儕傳道師は貧しき靈魂に福音の金剛石を與ふればそれで足りるのであります、之を受けし者が之を如何なる筐に入れて置かうが、是れ我儕の關する所ではありません、或は「獨立」でも宜ういいます、或は「無教會」でも宜ういいます、或は若し信者の好む所でありますならば、在來のメソヂストでも、クエーカーでも、監督でも、組合でも、何んでも宜ういいます、私は卑むべきものとて我に由りて福音を聞きし者は我が教會に入らざるべからずと言ふ傳道師の心事の如きはなれと思ひます。

私自身は御承知の通り無教會信者であります、然ればとて私は曾て私に由て基督教を信じた者に向て教會の事に就ても「汝、我が如くなれ」と勧めたことは無いと思ひます、現に私に由て道を信じた人て英國監督教會の信者になつた者もありません、爾うして私は其人が私の許に來り、監督某より洗禮を受けんとすとの相談に與かりました時に、私は歎んで私の賛成を彼に表しました、又私に由てキリストを認めたる人てメソヂスト教會の忠實なる信者となつた者も決して尠くはありません、現に某地の或る有力なるメソヂス

ト教會の如きは私が其建設の榮譽に與かつた者でありまして、其メソヂスト教會へ加入の如きも全く私の勧誘に由つて成つたものであります、私の名譽と歡喜とはキリストの福音を説くことであり、爾うして無教會信者の一大利益は信徒を收容するための我が教會のないことであり、是れがために我に宗派心の起る患がなくして、純正に最も近きキリストの福音を説き得ることであり、私の最も望む者はメソヂスト教會を全く忘却したるメソヂスト教會の傳道師であります、監督教會を念頭に置かざる監督教會の傳道師であります、爾うして私は信じて疑ひません、斯かる傳道師は靈魂を救ふ上に於て大なる成功を見るのみならず、亦、彼の屬する教會の勢力の思はざる所に揚るを見るに至りますことを、教會は人の生命の如きものであります、之を惜む者は返て之を喪ひ、之を惜まざる者は返て之を存ちます（約翰傳十二章廿五節）、今の教會の失敗の大原因は全く教會を惜み其擴張を計るにあると思ひます。

問、御説、誠に御尤に聞えます、然かし教會なしの傳道は實際行はれ得るものであります乎。

答、行はれない理由はありませんが、若しキリストの福音が人間の製造した虚偽でありまするならば之を維持し、之を傳布するために世の勢力の必要がある乎も知れませんが、然しながら福音が神の眞理である以上は、其傳播に團體の勢力と稱するが如き世俗的勢力の必要は少しもない筈であります、政府の權能と學者の智識と多數の贊助とに由るにあらざれば擴張することの出来ない主義は是れ悪魔の主義であります、フランクリンは曾て申しました、「權力に由るにあらざれば立つこと能はざる宗教は神が立つことを欲し給はざる宗教なれば、斯かる宗教は一日も早く消滅するを可とす」と、實に爾うてあります、ダシテの詩集や、シェークスピアの戯作ですら別に之を傳播するための團體なきに係はらず、世界到る所に歡迎敬讀せらるゝを見ますれば、天の默示なる聖書が其れ自身の眞價にのみ頼つて世界に傳播されない理由はありませんが、實に此寶典が今日の如く世に多くの冷笑家、多くの憎悪者を有つ理由は、之に補助者が餘りに多く有り過ぎるからではありますまい乎、私は或時は思ひます、若し聖書が今の教會より放逐されましたならば其時は其傳播が非常に抄取るであらふと、世の團體の勢力を有つことは聖書の如き書に

取りましては大なる不幸であります、然り、キリスト教の傳播は今の教會なる者の破滅と共に決して滅じません、否、若し牧師や、宣教師が叫ぶを息めますれば路傍の石が彼等に代つて叫び出します。

問、爾うして貴下は貴下の述べられるやうな方法に従つて實際神の道は我國に擴まりつゝあると信じなさるのでありますか。

答、爾うてあります、貴下方教會信者は御承知ない乎も知りませんが、然し、宣教師の目の届かない所に神の教は非常の勢力を以て進みつゝあると信じます、現に私が聖書の雜誌を出しましても其讀者の六分以上は教會信者の所謂「未信者」であります、彼等は宣教師より何の勸誘をも受けずして自から錢を投じて聖書を購ひます、彼等は人に教へられずして自から祈禱の語を作つて神に祈ります、洗禮を受けず、聖餐式に連ならざるも彼等は直に基督教的事業を開始しまして、彼等の家庭と周圍とは彼等を通してナザレのイエスの感化力を感じ始めます、爾うして或る場合に於ては彼等同志相集つて、彼等自己流の教會を建設します、若し樹は其果を以て知らるゝ者ならば彼等は紛ふべきなき

キリストの信者であります、爾うして自由撰擇を以てキリストを信ぜし彼等は多くの教會信者のやうに年を経て信仰を放棄して俗人となり了るやうなことは滅多にありません、彼等は直に神に導かれた信者でありますから、現時の教會の腐敗などに就ては少しも知らず、監督あるを知らず、堅信禮あるを知らず、隨て教職を瀆すとか、教友を其敵に賣つて快哉を叫ぶと云ふやうなことは少しも知りません、私共或る時は教會内の冷淡と不情と、然り、或る時は其殘忍とを目撃しまして、若し斯かるものがキリストの教會であるならば我はキリストの教を棄てん乎との惡魔の試誘に遇ふこともありますが、斯かる時には教會を去つて斯かる無邪氣なる天然的の信者の許を訪ひまして、眞個の福音の未だ全く此地より跡を絶たざることを發見しまして、私共の將さに消えんとする信仰を回復することが幾度もあります、然り、大なる有力なる傳道は教會なしに行はれつゝあります、若し貴下が其事を御疑ひになりますならば、私は何時でも貴下に無教會的傳道の結果の實物を御目に掛けることが出來ます、ドラゴン神の聖靈の活動を教會内のみ限りないで下さる。

問、然し人間は古人も言ひました通り社交的動物ではありませんか、隨つて彼は單獨に生存すべき者ではないではありません乎、彼の靈性は同情の交換を以て成長發達する者ではありません乎、故に聖書は至る所に協同一致の必要を説き、「主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つ」と唱へまして、信者の一體たるべきを示し、又希伯來書の記者は貴下のやうに教會より遠ざかる者を誡めて「會集を輟むる或人に倣ふことなく」と教へて居るではありません乎（十章廿五節）、ダビデは其京詣の歌に兄弟親睦の美を稱へて「視よ、兄弟相睦みて共に居るは如何に善く、如何に樂きかな」と言ふて居るではありません乎（詩篇第百卅三篇一節）、私は無教會信者の最大缺點は此兄弟的和樂の缺乏にあると思ひますが、如何ですか。

答、貴下の其尋問は私が今日まで外國宣教師の口から度々聞いた所でありませぬ、爾うして一寸と伺つて如何にも御尤のやうに聞えます、然し私は其質問を以て私を説服せんとする宣教師に向つて常に左のやうに答へます。

一、人間は勿論社交的動物であります、然し彼は羊や鹿とは違ひ社交的（集合的）ばかり



りてはありませんが、哲學者カントの申しました通り、「人間は亦最も非社会的動物であります」、彼の裏には人の交際を以てしては如何しても満足するとの出来ない所があります、是れは教會に入らふが、俱樂部に加はらふが、如何しても充たすことの出来ない所であります、人が神に近づきます時には他の人を通して近づくのではありません、彼は「アバ父よ」と呼びて直に神に近づくのであります、故に天父に近づくの一點に於ては教會信者も無教會信者も何の異なる所はありません、若し世に教會を利用して神に到らんと欲する人がありますならば其人は必ず失望します、社交的團結の用は他の事にはあるかも知れませんが、然し神を父とし有つて其救済に與かるの一點に於ては何の用にも立ちません、神は信徒の心に臨み給ふ時は教會内に設けられたる祭壇の上より臨み給ひません、或は静かなる森の中に於て、或は激浪の往來する海の岸邊に於て、或は悔改の涙を以て枕を濡す床の中に於て、神は我濟の心に臨み給ひます、私は教會の絶對的の必要を説く者ではありませんが、然かし、世の教會論者が教會の爲し能はざることを説いて教會の必要を説くのを見て常に怪訝しく思ふ者であります。

二、貴下方教會信者は頻りに協同一致の必要を御説きになります、私も勿論それには大賛成であります、然し私の茲に貴下方に伺ひたいことは貴下方御自身の中に果して和合一致がある耶、否や、其一事であります、若し私の見たり聞たりする事が全然誤謬でありませんならば今日の所謂基督教會なるものは決して兄弟相睦む所ではないと思ひます、其内には教師相反目し、信徒相争ひ、譏誣あり、陷擠あり、結黨ありて、見る人をして時には嘔吐の念を催さしむるではありません乎、私は近頃或る信者が私に告ぐるのを聞きました、「私は不信者の社會にありました時にも未だ曾て教會の兄弟間に行はれるやうな執念深い争闘を見たとはありません」と、私自身の経験も同じとであります、私の生涯に於て私の出會つた最も悪い人は教會信者でありました、彼の誘計、彼の奸策は到底未信者社會に於ても見ることも出来ないものでありました、私は勿論、貴下方の理想の茲に無いことを知つて居ります、然しながら實際の教會なるものが決して和樂一致の郷でないことだけは甚だ明瞭であると思ひます。

而已ならず、貴下方の一致は若しありとすれば、それは貴下方の教會内の一致に止まり

ます。廣く他教會に對してあるのではありません。日本國に代表されて居る教派ですら已に四十以上もあるとのことでありまして、其多數の教派の間に實に聞くに忍びざるの不和競争のあるのは貴下と雖も之を否むことは出来ません。「彼はキリストを説くも實はキリスト信者に非ず」とか、「正教會は我が教會のみ」とか、其他神の子として決して口にするべからざることを彼等教會信者は己れの教會以外の教會に對して發して居るではありませんか、「主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つ」、然り、實に其通りであります、其れならば何故に監督教會はクエーカー教會を主の教會として認めません乎、何故に新教と舊教との間に犬猿も管ならざる嫉妬争闘がありますか、「視よ、兄弟相睦むは如何に善く如何に樂さかな」、然り、其通りであります、聖書の此語を心に懐いて組合教會と「日本基督教會」との間柄を觀察して御覽なさい、貴下は此聖訓の最も善き反證を得られました、涙と共に貴下の御確信を強められるであらふと思ひます。

三、私共無教會信者に「聖徒の交際」が無いと云ふ人は誤ります、私共の間にも至て篤い交際があります、勿論、私共は會員證を携へませんから、相互に之を示して交際を求

むるの便宜を有ちません、然しながら同一の主を信じて其救済に與かりし者は會員證を示されずとも終には深い靈の兄弟であることを互に認めます、爾うして斯く認めました後の我等の交際は之を味はざる者の到底知ることの出来ないものであります、是れは會則に服従して出來た一致ではありません、是れは聖書に謂ふ所の「靈の賜ふ所の一致」であります（以弗所書四章三節）、爾うして此一致は何にも必しも無教會信者の間にのみ限りません、教會に屬する者、屬せざる者の別なく、總て同一の靈を以て同一の主に救はれし者の間に存する一致であります、眞心を以て主を信する者は皆な私共の兄弟であります、私共は「貴下は何時洗禮を御受けなされましたか」と聞いて其人の信者である乎、ない乎を分ちません、其人の品性に顯はれたるナザレのイエスの感化力を認めて然る後に彼の基督教信者であるを覺り、彼に向つて私共の靈的交際を始めます。

問、貴下の仰せられるやうに、制度も要らない教則も要らないと致しまするならば、吾等は如何して教理の純潔を守ることが出來ます乎、斯かる場合には人々自分の説を宣るに至りまして宗教界は宛がら混沌たる無政府の状態に陥りは致しません乎。

答、さうてあります。若し教會なるものが貴下の仰せられる此無政府の状態を防止ることが出来るものでありますならば、御説、或は御尤かも知れません、然しながら事實は全く御説の正反對であると思ひます、教會は決して教理の純潔を護るの用をなしません、現に御覽なさい、我國に於てすら、今や最も明狀に基督教の教義を嘲笑し、之を迷信視して得々たる者は曾ては教會の寵兒をして目せれ其特別の保護を受けて斯世の智識を修めた者ではありません乎、教會が必しも信仰の養成所ではなくして、或る場合に於ては返て其正反對で、最も有力なる無神論又はオベツカ主義の養成所であるとは少しく眼を教會信者の實歴に注いだ者の疑ふとの出来ない所であります、亦、今尚ほ教會の中にある人でも、必しも教理の純潔を維持して居るとは限りません、今や立派の「正統派教會」の中に於てすら、我等少しく教理歴史を讀んだ者の眼から見ますればトンでもない教義が行はれて居るではありませんか、爾うして教會員中誰れ一人として之を咎むる者なく、異端は恰かも無人の地を行くが如くに、傲然として教會内に横行して居るではありません乎、若し教會は異端を矯めるための必要機關であると仰せられますならば、之を

日本國今日の教會の事實に徴して見まして、貴下の其御申分の全く立たない事が證明されるてはありません乎。

夫れ而已ではありません、今や自由思想の行はれる時に方て、若し教會が人の自由思想を制限するが如きことを爲しますれば、彼は直に教會を去て、教會外に於て彼の思想を述べるまでのことてあります、此世界は基督教會の制御する所のものではありません、無神論も行はれて居りますれば不可思議論も行はれて居ります、亦、基督教會の種類にも數限りはありません、故に人が如何なる思想を懐かうが彼は必ず彼の同意者を何所かに求むることが出来ます、教會が信徒の信仰を支配することの出来たのは遠い過去のことであります、今は自由の時代であります、教會の時代ではありません。

問、夫れならば我等は何を以て教理の純正を守ることが出来ますか。

答、神の聖靈を以てあります、外よりする會則とか制度とか稱ふ絆の類を以てするのはなくして、内よりする愛の能力を以てするのであります、信仰を以て外より作り、又は變更し得るものと見做すのは大なる間違てあります、信仰は直に神より來るものであ

りまして、之は上と内とよりする斷えざる愛の注入を以てのみ維持せらるゝものであります、教會を以て信徒の信仰を支へんとする人に向て私はパウロの言を藉りて言ひます、「我は神の恩みを徒然せず、若し義とせらるゝこと律法（制度、法令の類）に由るならばキリストの死は徒然なる業なり」と（加拉太書二章廿一節）。

問、然らば貴下は何時までも無教會信者で通ざる、御積りてあります乎。

答、左様であります、此自由信仰を容るゝやうな教會が出来るまでは此儘で居る積りであります、然しながら前にも申上りました通り信仰は何時までも外に發表せられずして居るものではありません、教會は信仰を作りませんが、信仰は終に教會を作ります、大抵の信仰の一致があつて一致の教會が終には顯はれて來ない理由はありません、爾うして既に信仰の一致がある以上は遠からずして一致の教會は出來て來るだらふと思ひます。

問、爾うして斯かる教會の出來た例はありますが、又、將來に於て其起らんとする希望は何所にありますか。

答、日本國に於ては傳道の年月の未だ短いのと、外國宣教師が自己の教會の扶殖にのみ骨

を折つて日本國自生の教會の發達を奨励しなかつたとの故を以て斯かる教會は今有りとするも、恰かも雨夜に於ける星の如く極く寥々たる者であります、然かし無いとは限りません、又將來に於てその起らんとしつゝある徴候は澤山にあります、現に何れの教會に於ても獨立運動が非常に善きこととして迎へられつゝあるのでも分かります、然し此事を細々しくお話し申すのは少しく私共無教會信者の手柄話しに渡るの嫌ひがありますから、それは茲では御免を蒙ります。

問、種々御説を伺ひまして、私は勿論之に賛成することは出来ませんが、然かし、貴下は私が今日まで聞いて居りましたやうな教會の破壊者でないことだけは分りました、多分貴下のやうな方の在るのは返て教會のための利益でありませう、爾うして神は斯かる目的を以て貴下を使はるゝのかも知れませんか。

答、貴下の御口より夫れ丈けの御言葉を頂戴するのは私の大に満足する所であります、私は勿論、宣教師や教會信者より何の援助をも受けんと欲する者ではありません、然しながら此異教國に在て随分多くの苦難を経まして今日まで福音の傳道に従事して來た積り

てありまするのに、同じ福音を宣傳する宣教師等より、何の援助を受けないのみならず、或る場合に於ては多くの詰らない誤解を受けましたとは私の常に遺憾に思ふ所でもあります、今の教會とは何の關係もない私は只放任して置いて貰へばそれで満足するのではありません、爾う申して、私は教會に向て何の同情をも表さないと云ふのではありません、前にも申上た通り私は機會の許す限りは到る所に教會の事業を助けて居る積りでありませぬ、我が主義を確守することは必しも他人の主義を攻撃することではありません、我は我に反對する他人の主張を尊敬しながら我が主張を守ることが出来ます、私は勿論、私が教會に向て表する同情より以上の同情を私に向て要求するとは出来ません、然しながら私の無教會の故を以て私の基督論や來世論までを無用視し、又は不問に置かるゝ宣教師並に教會信者の態度を少しく不愉快に感ずるのであります、斯く申して私は怨恨を述立つるのではありません、私も神を父として有ちキリストを兄弟として有つ者でありますから、他人の同情を藉りずとも満足歡喜の生涯を送り得る者であります、其御積りて今日の此話を御聽取り下さい、サヨナラ。

第六席

豫定の教義

其一 豫定の信仰

問、基督教に豫定と云ふことがあるそうですが爾うですか。

答、爾うです、之を英語でPredestinationと云ひまして随分議論のある問題であります。

問、夫れは抑々如何いふ事でありますか。

答、夫れは讀んで字の如く神に救はれし者は神に由て豫め定められた者であると云ふことであります。

問、其やうの事を今でも信する者がありますか。

答、今は多くはありません、然し往昔は澤山ありました、豫定はプロテスタント教徒の重要な信仰箇條でありました、然し來世の存在、キリストの神性等が曖昧に附せらるゝ

今日、豫定を信ずる者は至つて少くなつたのは事實であります。

問、貴下は之れに就て如何と信じになりますか。

答、私は頑固信者の一人でありまして、外國傳道會社の飯は食ひませんが、然かし三位一體の教義を信ずると同時に亦た豫定の教義をも信じます、私は豫定は基督教の最も大切な教義の一つであると信じます、私は基督教の精神に訴へて見まして、豫定は其免かるべからざる結論の一つであると信じます。

問、斯かる背理的の教義を貴下が信じになることは私には如何しても分りません、私は今日、充分に貴下のその御信仰に就て伺ひたく思ひます。

答、ドウぞ出来るだけ厳しく御質問なさつて下さい、若し私の論城が貴下の御詰問に由て崩れるものでありますならば、私は之を棄てるか、又は再び之を築き直すの必要があります、悪意を混へざる友人の攻撃は信仰上甚だ有益なるものであります。

問、夫れでは重ねて伺ひますが、貴下は人は何人も豫め神に由て定められたものでなければ神の救済に與かることは出来ないと思はれるのでありますか。

答、爾うであります。

問、爾うして貴下は基督教は斯くも不公平なることを教ゆる者であつて、貴下の信ぜられる神は斯くも不公平なることを敢て爲る者であるとお信じになるのであります乎。

答、爾うであります、然かし不公平云々の御言葉は一先づ御取消しを願ひます、其事は後て多少御説明申すことが出来やうと思ひます。

問、豫定説なるものは基督教の何處に示してあります乎。

答、基督教の聖書に示してあります、然かも一ヶ所や二ヶ所ではありません、多くの處に示してあります。

問、聖書の何處に豫定が顯著に示して有ります乎。

其二 聖書と豫定

答、左様であります、羅馬書第八章であるとか、加拉太書第一章であるとか云ふやうな、殊更らに豫定を論じた章は後廻しに致しまして、直接に論じなくても、顯著に豫定の精神を示して居る所の聖書の言葉を今、茲に貴下の前に陳列べましたならば、貴下は豫定

の理論は御判分りにならなくとも、其、聖書の傳へんとする一大教義であることだけは御承知になるであらふと思ひます。

問、何卒充分に御指示を願ひます、私は聖書に豫定のことを書いて在るとは聞きました、  
が、それが其大切なる教義であるとは今まで信じませんでした。

答、多くの人が爾う言ひます、然かし聖書を深く研究すれば爲る程、豫定は、贖罪と云ふが如き、又は復活と云ふが如きことと共に、其根本的教義の一つであることが判分ります、先づ聖書の大躰に涉つて、豫定の示してある所を御目に懸けますれば、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーゼ、サムエル等の事は措きまして、神が預言者エレミヤに言はれた言葉に斯ういふことがあります、

我れ汝を腹に造らざりし先に汝を識り、汝が胎を出ざりし先に汝を聖め、汝を立て萬

國の預言者となせり（耶利米亞記一章五節）。

是れは最も顯著に豫定を示した言葉であります、是れをユダ的思想なりと観過しますれば、夫れまで、ありますが、然し顯著なる聖書の言葉として、是れも何んとか合理的に

解釋せねばならぬものであります、爾うして斯かる觀念を以て預言職に就いた者はエレミヤのみに限りません、預言者といふ預言者はモーゼを始めとして、マラキ、バプテスマのヨハネに至りますまで、彼等は皆な神に預言者として特別に作られし者であると信じて預言の聖職に就いた者であります、ヤコブを再び己に復へらしめ、イスラエルを己の許に集まらせんとて我を生れ出し時より立て、己の僕と爲し給へるエホバ言ひ給ふ（以賽亞書四十九章五節）とは預言者全躰の口調でありまして、彼等に此の確信があつたからこそ、彼等は全世界が彼等に逆つて立ちし時も、獨り己を信じて動かかなかつたのであります、勿論茲に引きました耶利米亞記の言を除いては舊約聖書には新約聖書に於ての如く明狀に豫定を語つて居る言葉はありません、然し若し豫定と言はなければ選擇は確かに舊約の精神であつたことは何よりも明かであります、ノアであれ、アブラハムであれ、ヤコブであれ、モーゼであれ、エリヤであれ、アモスであれ、皆な悉く自から進んで神の忠實なる僕となつたのではなくして、神の特別の選擇を蒙つて、神に餘儀なくせられて、神の聖業に就いた者であることは舊約聖書の尤も明白に示す所であります、

預言者アモスは彼に沈黙を命ぜしベテルの祭司アマジヤに告げて曰ひました。

我は（職業的）預言者にあらず、亦預言者の子に非ず、我は牧者なり、桑の樹を作る者なり、然るにエホバ、羊に従ふ所より我を取り（強制的に）往きて我民イスラヘルに預言せよと我に宣へ給へり（亞麼士書七章十四、十五節）

選擇と豫定とは其精神に於ては一つであります、豫定は選擇の時間を更らに生前にまで延べたものであります、舊約聖書全躰は選擇に至る所に述べて新約の豫定説の基礎を置きました。

問、新約聖書に於ける豫定説なるものは是れパウロ特有の説ではありませんか。

答、爾うではないと思ひます、勿論、是れは使徒パウロに由て最も明かに唱へられた教義であります、然しながら是れが基督御自身の教訓の精神でない以上はパウロが斯くも力を罩めて之を唱へやう等はありません、豫定は贖罪と同じやうに基督教全躰の精神であると思ひます。

問、基督の言葉として何處に豫定が録してありますか。

答、約翰傳の十五章の十六節に基督がその弟子等に告げて汝等我を選まず、我れ汝等を選らべりと言はれましたのは選擇であつて亦た豫定であります、又イエスがナタナエルの間に答へて我れピリポが爾を召ばざる前に無花果樹の下に爾の居るを見たり（全一章四八節）と言はれましたのは先知を意味して、亦た豫定をも示して居ります、約翰第一書四章の十九節に有ります我儕神を愛するは彼れ先づ我儕を愛せしに因れりとの言葉は實に基督教の眞髓でありまして、斯かる觀念の上に立てられたる宗教が豫定を以て人の救済の原理と見做しましたのは決して無理ではありません。

然しながら豫定の何たるかを知らんと欲せば勿論保羅の書翰に行かなければなりません、爾うして其處には豫定が最も顯著に示されて在ることは誰も疑はない所でありませぬ、今時の人は往々にしてパウロの言葉であればとて、是れは基督の教ではないやうに思ひます、然しながらパウロの書翰が新約聖書の大部分であつて、亦た今日我儕の信ずる基督教なるものは多くはパウロに由て傳へられたものであることを知る者は、パウロの言であればとて之を賤價さなすのは勿論、反てパウロの言であればとて之に非常の重



第六席 豫定の教義 百八十

さを置きます。基督の心を識りし者でパウロの如くに善く之を穿つた者はありません。若しパウロが基督教の大家でありませんならば、私共は誰に依て之を研究しませう乎、選擇は聖書全體の精神であります。爾うして選擇の意義を其推理的結論にまで持運んだ者は使徒パウロであります。豫定はパウロが發明した教義ではありません。是れは彼れに依て最も明かに闡明された、ノア、アブラハム以來の信仰の原理であります。問、豫ねてよりパウロの豫定説に就ては聞いて居りましたが、茲に再び其要點に就て貴下より伺ひたく存じます。

答、羅馬書第一章の第一節にイエスキリストの僕パウロ召されて使徒となり、神の福音のために選まると書いてあるのを見まして豫定選擇はパウロに取りては根本的信仰箇條の一つであつたことが分ります。爾うして羅馬書を段々と讀んで行きますと豫定の教義は罪の贖ひ、信仰に由て義とせらるること、共に基督の福音の土臺石であることが、種々の方面から論究されて居るのを見ます。羅馬書は一名之れは任意的恩惠の福音と稱せられます。是れは即ち人の救はるゝのは彼の行績に由るに非ずして全く神の聖意の任

より出づる恩惠に由ることを殊に論述した書であります。爾うして其三章廿八節に於て故に我れ思ふに人の義とせらるゝは信仰に由りて律法の行ひに由らずと言ひて救済は道徳以上であることを述べ、其五章八節に於てキリストは我儕の尙ほ罪人なる時、我儕の爲めに死に給へり、神は之に由りて其愛を彰はし給ふと言ひて神の愛は人の愛を待つて始めて來るものにあらざるを説き、竟に第八章及び第九章に於て豫定の大議論に入るのであります。

凡での事は神の旨に依りて召れたる神を愛する者（基督信者のことなり）の爲めに悉く働きて益をなすを我儕は知る、それ神は豫め知り給ふ所の者を其子（イエスキリスト）の狀に效はせんと豫め之を定め給へり、此は其子（イエスキリスト）を多くの兄弟（キリストチャン）の中に長子たらせんが爲めなり、又豫め定めたる所の者は之を召き、召きたる者は之を義とし、義としたる者は之に榮を賜へり（八章廿八、廿九、卅節）、誤解せんと欲して誤解すべからざる豫定の定義であります、又、

リベカ我儕の先祖の一人なるイサクに由りて二人の子を孕みしとき、即ち其子等未だ

生れず、善をも悪をも行さざりしとき、神の選ひ給ひし聖旨は變ることなく、(人の救はるゝは彼の)行に由るに非ずして(神の)召に由るものなることを彰さんとて、長子は幼子に服へんと(神)リベカに言ひ給へり、録して我はヤコブを愛しエサウを惡むとあるが如し、(九章十一、十三節)。

是れも顯著なる豫定であります、神の聖旨の中にはヤコブは業に既に、彼が生れざる先きより、彼の兄なるエサウに代はるべき者なりと豫め定められてあつたとの事でありませぬ。今、羅馬書を去り、加拉太書に到りますれば同じ豫定の意義と精神とは明かに示されて居ります、人よりに非ず、亦人に由らず、イエスキリストと彼を死より甦らせし父なる神に由りて立てられたる使徒パウロ(一章一節)と云ひ、我が母の胎の中に在りし時より、「胎を出し時より」とあるは誤譯なり)我を簡ひ置き恩恵をもて我を召し給ひし神(一章十五節)と云ふは前に引きし耶利米亞書の言と均しく豫定を示すの言葉であることは何人が見ても明著であります、若し又、次ぎの以弗所書に至りますればそれ神、我儕をして其前に聖く且つ疵なき者たらしめんがために世の基礎を置かざりし先より我

儕を簡ひ、その聖意のまゝにイエスキリストに由りて我儕を己の子と爲さんことを愛を以て豫め定め給へり(一章四、五節)とありまして豫定は誤解し難き言葉を以て顯著に示されて居ります、又降て帖撒羅尼迦書に至りますれば主に愛せらるゝ兄弟よ、爾曹の爲めに我儕常に神に謝すべき也、そは神、始めより爾曹を簡ひ、眞理を信すること、靈の潔めを蒙ることに因りて救ひを得しめ給へば也(後書二章十三節)とありまして、豫定選擇は當時の基督信徒の普通の信仰箇條であつたやうに書いてあります、今、此教義に關するパウロの言葉を悉く茲に貴下の前に引證することは出来ませんが、然し私が茲に陳述した丈を以ても豫定がパウロに取り如何に大切なる信仰箇條であつたかと分かります、豫定は決して聖書の其處此處に散在して居るやうな曖昧なる教義ではありませぬ、豫定は聖書を始より終まで貫徹する精神であります、故に若し之を不道理なりとして聖書より切抜きますならば、是れ贖罪を拒み、キリストの神性を否むやうなものであります、聖書なる建築物より樞要なる梁を取除くやうなものであります。

問、聖書の引證は夫れまでにして置いて戴きまして、私は今より豫定は信仰上の事實であ

る乎、其事に就て伺いたく存じます。

其三 豫定の事實

答、私は貴下が豫定の論理よりは先づ其事實に就て御尋ねになりました事を甚だ喜びます、何故となれば豫定は基督教の他の教義と均しく、其事實を示すことは其論理を述べよるよりも容易いからであります、基督教は科學と同じやうに先づ第一に事實でありまして、然る後に論理であります、然るに兎角論理好きの日本人は事實を探らないで先づ論理を究めんと欲します、是れ彼等の宗教研究なるものが常に墮胎に終る原因であると思ひます。

問、私は殊に貴下御自身の御實驗に照らして豫定の事實を示して戴きたく存じます。

答、畏参りました、私の心靈上の實驗と云へば微少いながら使徒パウロの實驗であります、私が少しなりとキリストを見ることが出来、又、少しなりと神の聖潔を心に感ずることが出来るに至つたのは、私は是れ單に神の任意的恩恵に因るのであると堅く信じます、爾うして斯く申すのは決して私の謙遜からではありません、私は最も確實なる心靈

基督教問答

的事實として此事を表白するのであります、私は決して世に謂ふ所の聖人ではありません、私の心に在るものはたゞ悪ばかりであります、若し私の生涯が私の計畫した通りのものでありましたならば私は決して基督教信者とは成りませんでした、私は神の攝理に餘儀なくせられて、無理やりに基督教信者と爲さしめられた者であります、殊に福音の宣傳者と成りしが如きに到ては是れ私の幾度びか拒んで避けんと欲したことでありまして、私は何者になりてもヤン教の傳道師には成るまじと幾度びか決心した者であります、故に生前の豫定は別問題として、私が自身選らんで基督教信者と成つたのではなく、殊に基督教の傳道者となつたのではないことは是れ私に取ては何よりも明かな事でありまして、此事を知る者は私自身ばかりではありません、私の親友が皆な此事に就ての證人であります、私は私自身の改信に就ては使徒パウロの言を藉りて白します、キリストは我儕の尙ほ罪人たる時我儕のために死に給へり、神は之に由りて其愛を彰し給ふ、又、オリバー、コロムウエルの言を藉りて白します、

貴婦は知る、余の生涯の如何なるものなりし乎を、嗚呼、余は幽暗に在りて幽暗を愛

し、光明を憎めり、余は罪人の主なる者なりし、然り其首なりし、此事は事實なり、即ち余は聖なることを憎めり、然れども神は余を顧み給へり、嗚呼、神の恩恵は大なる哉、願くは余の爲めに神を讚美せられよ、願ふ、余のために祈られよ、余の衷に善き業を始め給ひし神がキリストの日に於て之を完成せられんことを。(彼の従妹セントジョン夫人に贈りし書翰の一節なり、カーライル著「コロムウエル傳」より寫し且つ譯す)。

若し私に何にか善き所があるに由て、私が神を信するに至つたのでありますならば私は第一に何故に世には私に優つて遙かに善い人がありますものに、其人が神のことを聞くも神を信するに至らない乎、其事が分かりませんが、第二に、神が私の心に顯はれ給ふ時は私の愛國心が最も高く、私の公義心が最も旺なるときではなくして、私の失望落膽の時、私の心の中が殆んど百鬼夜行と稱すべき時であります、此事はドウ云ふ理由である乎、其事が分かりませんが、畢竟するに神に關する事は私の實驗に由りますれば唯「意外」と云ふより外はありません、私の左せんとする時に神は右せよと命じ給ひ、私の昇らんとする時に私は下り、私の下らんとする時に神は私を引上げ給ひます、私は夫れ故に今は神に向つては唯斯う曰ふのみであります、即ち父よ、然かり、それは是の如きは聖意に適へるなり(路可傳十章廿一節)と。

私自身に就て爾うであります、亦、私が主に導かんと欲した他の人に就ても同じ事でありませぬ、此人は必ずキリストに來らんと思ふた人が必ず來るとは定まつて居りませぬ、否な、爾う思ふた人は大抵はキリストに來りませぬ、此人は事物の分かつた人である故に必ず基督教が解るであらふと思ふた人は大抵は半途にして基督を棄去つた人であります、之に反して斯かる人が如何して聖き神の子なるイエスキリストを信するに至るであらふと思つた人が思ひ掛けなくも堅固なる信者となりました、キリストの言はれし、工匠の棄てたる石は家の隈の首石となれり、是れ主の行し給へることにして我儕の目に奇とする所なり(馬太傳廿一章四十二節)

との言葉は誠實を以て福音の宣傳に従事した者の誰でも深く感ずる所であります、遺傳も境遇も教育も基督信徒となるには何の關係もないやうであります、其れは神の特別の